

560

9



始





人情代表集

全

大正
15. 9. 16
内交

烏文甫榮之筆「遊女」



松葉唐乃
漆助
三三三

三三三



松文唐茶之卷圖文一

菊川英山筆「娘風俗」



藤田英山筆

560-9

近代日本文學大系 第二十一卷目次

✓ 小さん 金五郎 假名文章娘節用……………一—二四

清談 若緑……………一四—二九三

教外 娘 消息……………二九—三九一

盛衰 榮枯 娘 太平記操早引……………三九—五六一

辰巳 清談 梅 の 春……………五六一—七三三

✓ 閑情末摘花……………七三三—九〇〇

目次

一

解題……………文學博士 笹川種郎……………卷頭一〇

目次終

解題

文學博士 笹川種郎

人情本の起原と變遷

敵討物は寛政九年頃よりそろく見え始め、其の派の元祖南仙笑楚滿人は、此の歳に『敵討姥捨山』三冊を著し、同十年には同じ人の『敵討柳下貞婦』三冊、式亭三馬の『富士劍術 吾嬭街道女敵討』三冊出で、同十一年には十返舎一九の『殿下茶屋擧仇討』三冊、『敵討住吉詣』二冊、楚滿人の『敵討沖津白浪』あり、同十二年には楚滿人の『娘敵討扇銀面』三冊あり、享和元年二年三年を経て、次第に流行し、文化に入りては、黄表紙の作風一變して、敵討物全盛の世となり、山東京傳も曲亭馬琴も筆を這種の著作に染むることとなつた。馬琴が其の著すところの『敵討二人長兵衛』に、「金々先生榮花夢より草雙紙に滑稽をつくしたること二十餘年、中頃一變して不洒落となり、今又一變してまじめとなる、黒縹子の帯がすたると思へば、又流行り、長羽織が流行

解題 人情本の起原と變遷

ると思へば、又すたる、草雙紙の流行も又其の如し、是れから後は、大昔の金時化物にならふも
 知れぬ、御油斷なざるな。」と跋したのを見て、時代の趨勢を知るに足りる。三馬の如きは、憤
 慨して、「噫、御江戸の名物たる戯作の道も、既に澆季に及んだり、衆人皆敵討の稗史に酔へり、
 吾獨り醒めたり。」と云ふに至つたが、滔々たる大勢は又如何ともする能はず、文化三年の如きは
 殆んど敵討物獨占の状態であつた。其の體裁も亦追々合巻物となつて來たのである。此の敵討物
 流行の壇上で、最も活躍したものは、實に楚滿人で、其の著にかゝる敵討物は數多くあつた。楚
 滿人、通稱は楠彦太郎、南仙笑と稱し、志筈房、又杣人、待名齋今也と號した。芝宇田川町に住
 し、手跡指南を業としたとも云ひ、又書肆とも、板木師とも、醫師とも、鞘師ともある。『作者部
 類』には「滑稽の才なしといへども、こも古き作者にて、安永中より文化に至れり、初めよりの
 さをさ若き中の作のみに、世の評判も果敢々々しからざりしに、文化に至りて、敵討の臭草紙の
 流行により、時好に稱ひて折々にあたり作あり、そが中に敵討三組杯（五冊豊廣畫、和泉屋市兵
 衛板）尤も婦幼に賞玩せらる、生涯著す所の草さうし三百餘種ありと覺ゆ。」と云つてゐる。其の
 著作の重なるものに、

敵討三味線由來

敵討姥捨山

敵討沖津白浪

娘敵討扇銀面

敵討布施利生記

敵討梅之枝

虚空 武者修行話

虚空 舍弟之讎討

敵討松寄木

敵討時雨友

敵討巖間鳳尾艸

敵討安積車

仇討碓打手

妻之復仇千正牛

敵討水潛蜀紅錦

敵討龍田山女白浪

敵討蟒蛇榎

敵討柳四郎兵衛

復讐岐枝川

仇報妹吞扇

親敵擊山魅

敵討三人姥

敵討鶯酒屋

敵討讚誠囊

敵討島廻幸助船

敵討三重忠孝貞

敵討奥州千貫橋

仇討手討新蕎麥

敵討轆轤首娘

敵討松の榮

敵討蘇生娘

敵討遠森渡

敵討稚木櫻

等がある。

彼は文化四年三月九日、享年五十九歳にて歿した。芝西久保心光院に葬り、法號を只但受樂翁
 居士と稱した。子女なく遺金五兩あつたから、友人どもが打集ひて葬儀を營んだと云ふことであ
 る。敵討物の流行は遂に文化五年、石川雅望をして、『敵討記平汝』の黄表紙を綴りて、洒落の
 めすに至らしめたが、もう敵討物は漸く全盛期を通り越したのである。

一方には寛政享和の交より、讀本がそろく流行し始め、曲亭馬琴は、享和三年に『月水奇縁』

五卷を、文化元年に『富士三國一夜物語』八卷、『復讎稚枝鳩』五卷を、同二年には『四天王勦盜錄』十卷、『椿説弓張月』前編六卷を、山東京傳は、此の年『櫻姫全傳曙草紙』五卷を著し、『水滸傳』『西遊記』の翻譯も此の頃に刊行せられ、馬琴、京傳を初めとして、振鷺亭、感和亭鬼武、石川雅望、蒔關月、柳亭種彦の徒は争ひて讀本を著述した。

義理人情のいきさつはあつて、中には滑稽じみたものもありとはいへ、多くは殺伐なる血腥き敵討物と、歴史を取扱つた讀本とが流行した反動として、男女の戀愛を主とした軟か味のある小説を渴望する讀者の要求のあつたことは、又自然の數である。寶曆頃からして起つた洒落本は、明和より安永に入りて流行を極め、天明寛政の際に其の全盛期となつた。江戸文藝中の粹を鍾めたもので、短篇ではあつたが寫生の妙を窮め、通で、おつで、頗る善く穿つたものであつた。黄表紙の如く、ふざけた、軽い可笑味のあるものとは違つて、世態人情の琴線に觸れた氣の利いたものであつた。然し洒落本が發達すると、専ら材を花明柳暗の巷に求めることとなり、全く大通のものとしてしまつたのである。蓋し江戸文化の最高潮を象徴したものと云つてよからう。

しかし洒落本は一種の通な寫生があつたから、硬派の敵討物、讀本に對する軟派物としては、通人ならぬ一般讀者には物足らなくあつた。人情本は此の要求に應じて作り出されたもので、洒

落本の長篇とも見られる。けれど人情本は洒落本の如く、氣の利いたものではなくして、寧ろ頗る野暮臭いものであつた。蓋し洒落本は京傳、三馬の如き文藻ありたる人々の手に成つたが、人情本の作家は、これに比して遙かに下つてゐる。


人情本の先驅は、やはり十返舎一九で、文政二年に、『清峯の初花』初篇、同六年に『風聲所縁の藤浪』前後編を公にしてゐる。同三年には一筆庵可候(溪齋英泉)が『人世松操物語』六卷を著し、同四年には鼻山人の『生死玉散袖』五卷が刊行され、瀧亭鯉丈の『明烏後正夢』初篇三卷が公にせられ、同五年には、鼻山人の『玉菊全傳花街鑑』二卷の出づるあり、翌六年には同じ人の『尾上伊太 契情意味張月』、志満山人(歌川國信)の『兒女美談 椰の二葉』三卷の刊行せらるゝあり、七年に入りては、後の爲永春水なる二世楚滿人の『凌霜菊廼井草紙』十二卷、『錦の帶屋軒竝娘八丈』十二卷、『給妻雪古手屋』、鼻山人の『傾城蘭蝶記』初二篇、玉川調布の『秋夕霧籬物語』三卷等多くの人情本が現はれた。其の初めに於ては、洒落本とも差別なく、讀本とも區別のつかぬものさへありて、云はば人情本への過渡期の作品であつたが、是に至りて、次第に人情本の特徴を發揮することとなつた。

人情本は男女間の戀愛を主とし、市井に於ける色戀のいきさつ、それにからまる義理人情を描

いたもので、藝娼妓、圍者、茶屋女、女房、娘等を環りて、遊蕩兒や通人や、町家の堅氣者、番頭、無頼漢等を配し、其の間に生じた關係を描寫したのである。然し其の觀察は多くは銳利ならず、奇警ならず、深刻ならず、文章も變化に乏しく、趣味は千篇一律に墮して、其のうち二三篇を讀まば、他は類推すべきものである。浮世草子、八文字屋本に及ばず、洒落本、黄表紙、讀本に比して頗る遜色があり、江戸文藝中、最も劣つたものと云つても、決して苛酷な評ではあるまい。浮世草紙に井原西鶴あり、八文字屋本に、江島屋其碩あり。黄表紙に戀川春町、喜三二、芝全交あり、洒落本に山東京傳、式亭三馬あり、中本の滑稽本に十返舎一九あり、讀本に曲亭馬琴あり、草雙紙に柳亭種彦ありたるが如き、文藻の優れた作家が人情本に缺けてゐたと云ふのは、其の最も大なる原因である。爲永春水の如きは、人情本作家の代表者と稱せられてゐるが、固より名の實に過ぎた片々たる小才に過ぎない。人情本唯一の傑作は春水の春色梅曆や其の他の爲永の諸篇でなくして、寧ろ曲山人の娘節用である。人情本をして重からしむるものは、此の一娘節用であることを思へば、頗る人情本の落莫たるを思はざるを得ない。

然し人情本が文學史上に於ける効果は、江戸より明治にかけての連鎖と云ふ點にある。洒落本から明治小説へ移るには餘りに距離が遠かつた。人情本があつて其の間に橋梁を架してゐる。讀

本が時代物で、理想的であつたに反して、人情本は現代物で、寫實的であつた。飽くまでも現代に即して、寫實の長篇を綴つたと云ふ點は、人情本の決して棄つべからざる所以である。よし機智はなく、深刻はなく、多くは常套手段の結構に出てるるとは雖も、新しい別天地を開いたところに、其の價値はあつた。但し一言にしてつくせば、人情本は頽廢したる江戸文化の産物であつたが、次の時代へ移るべき津梁と云ふべきものである。

人情本の作家としては、初期からかけて鼻山人があつた。『近世物之本江戸作者部類』には、東里山人の條に、「麻布に居宅せる御家人(御勘定付御普請役)實名を忘れたり、文化四五年の頃、和泉屋市兵衛に請うて、初めて臭草紙(當時合卷既に行はる)を印行せられしより、年毎に此の人の作出たり、然れども拔萃なり、あたり作なし、其の作りさま南北と相似たることあり、前輩の舊作を剽竊して作れるもの多かり。」とあるが、此の東里山人は即ち鼻山人の別號である。活東子の『戯作者小傳』には云ふ、「東里山人、九陽亭と號し、又鼻山人と號す。麻布三軒家に住す、公の典事たり、通稱を細川浪次郎といふ、如斯印章あり、俗に京傳鼻といふ、山東庵(京傳)が門人なり。著述『娼妓美談籬の花』、『契情肝粒志』此の外數多あり、畧す。活東子云、吾師無物老人話に浪次郎晚年漂泊して、芝切通しにて傳授屋といひて、奇方妙術などを小さき紙に記して賣れり、

予も流離して曝書繪となり、俱に相鄰りて活計せしが、後に江戸橋四日市の小店に移りてより聲聞せざれば其の淵瀬を知らず云々」と。安政六年九月、七十四歳を以て歿した。人情本の外、洒落本、草雙紙等著すところ少くない。其のうち重なるものを掲ぐる。

- 生死玉 散里 玉菊花 街鑑 尾上伊太八 契情意味張月
- 流轉玉 蝶記 浮世猪之助 仇比戀浮橋 契情肝粒志 風俗粹好傳
- 傾城蘭 蝶記 若名屋若草 婦人江戸花誌 郭意氣 郭意氣地 珍說豹の巻
- 永明郭 雜談 孝經 地發端 郭意氣 草子 蔓羅屋 籠氣物語
- 郭雜談 北里通 傾城胸中極秘傳 美談紫 草子 玉琴が傳
- 郭意氣 鶏卵 未曾可の月 同三 郭中 由佳里の月 萬事心 意氣
- 地二編 角談 光澤 春色合鏡 四季 餘情 神田お玉ヶ池
- 妙 塵 記 紅絞 花志 春色郭の鶯 和說假名論語
- 風流脂 藤絞 續談 花志 珍說 さゞめごと 郭 かゞみ
- 春色根引の松 妙 智 力 仇枕 春の寢覺 貞鑑實の花
- 美談 可 誌 傾城腹の巻 久松 艶の油屋 さとの花物語 賢女千代物語
- 山本全 盛錄 久松 艶の油屋 鼻山人には『由佳里の月』『未曾可の月』の如き洒落本もあり、『江戸花誌』の如き讀本もあつ

たから、其の人情本には洒落本を加味し、若しくは讀本を調味したものが多かつた。しかし『作者部類』に指斥した如く、他人の作を剽竊する癖があつた。其の最も甚しいのは、十返舎一九の『諸用附會案文』を全部丸拔し、『浮世附會案文』と改題して出版したが如きである。これをしも人情本作家の雄なるものの一に數へるのであるから、人情本作家の貧弱なることは推して知るべきである。

爲永春水は別に春水集に述べてあるから、此にはこれを省く。曲山人は、司馬山人とも云ひ、筑波仙橘、三文舎自樂などの別號がある。文を善くし、又書にも畫にも長じてゐた。但し不幸にして早世したと云ふことである。著すところに、

- 人情女 大學 小三 假名文章 娘節用 教外娘 消息 娘太平記 操早引 初篇
- 其儘女 大學 金五郎 俗文娘
- 清談 若緑

等あるが、其のうち最も傑れたものは娘節用である。

人情本の多作家としては、松亭金水を挙げねばならぬ。金水、名は定保、通稱を中村源八と云ひ、初めは神田大和町に住居して手跡の師であつたが、中頃淺草寺中にあり、後には小傳馬町三丁目北新道に住し、また本郷附木店にも移り住した。別號を積翠道人と云ひ、春水の人情本を淨

寫し、遂に自ら著作に従事するに至つたのである。書道を谷金川に就いて學んだから、金の一字と、春水の一字とを取りて金水と題した。其の著すところに、

戀の花染 其佛蹇廻復讎

同後戀の字喜身

比翼花迺志滿臺

兩國の花笠 春宵多佳年の花

伊達錦 迺往

縁結娛色の絲

閑情末摘花 風月錦の魚

浮世人情濱千鳥

四時花 筐

春花いろは藏 鶯塚千代の初聲

假名會我的昔語

毬唄三代娘

花筐の月 伊賀古迹豪傑譚

春色淀の曙

女實語 教

拾遺 婦女迺壽賀多美 貞操園の朝顔

貞操松の花

雪迺嵯峨の假寢

等があり、曲山人の『娘太平記操早引』の二篇を補綴し、三篇以下を續修し、一筆庵可候の『朧月花の朶』二篇以下を續作してゐる。文久二年六十六歳にて歿した。其の門に梅亭金鷲、竹葉舎金瓶等があつた。

此の他の作家としては十返舎一九、柳亭種彦のやうな著名の文人以外に、『傾城買二筋道』の洒落本を以て知られてゐる梅暮里谷峨あり、敵討物の楚滿人あり、『八笑人』等滑稽本作家の瀧亭鯉丈あり、浮世畫師溪齋英泉即ち一筆庵可候あり、俳優瀨川路考、岩井兼三郎あり、遊女玉樓花紫

あり、浮世畫師墨川亭雪齋あり、玉川亭調布あり、驛亭駒人あり、一九の門人十字亭三九あり、浮世山人あり、笠亭仙果あり、菅垣琴彦あり、平亭銀鷄あり、岳亭定岡あり、喜久平山人、花街櫻山人、寛江舎葛丸があつた。

人情本の挿畫を描いたものは、溪齋英泉や曲山人やが自著自畫たるを除いて、里見八犬傳の挿畫家であつた柳川重信あり、歌川國直あり、貞齋泉晁、泉壽あり、歌川國芳あり、春川英笑あり、歌川景年あり、菱川政信あり、歌川直秀、歌川國平、歌川貞廣あり、米花齋英之、花岡光宣、吳烏齋主人等があつた。國芳は浮世繪末期に於ける豪快なる畫家で、風景畫に於ては、北齋、廣重等と別趣の觀察と腕前とを有してゐた。重信は北齋門下で、忠實に其の師法を守つた畫家であつた。溪齋英泉は菊川英山の門人で、廣重と合作の木曾街道六十九次の内二十三枚を畫いて、其の名が高い。其の門人に貞齋泉晁と泉壽がある。貞秀、貞廣は國貞の門下で、貞秀は多く鳥瞰式の風景を描いてゐる。然し、國芳が美人畫に獨得の筆法を用ゐる、重信が北齋風に人物畫を扱つてゐる以外には、英泉の美人畫も、どこやらにぎこちなく、其の他の諸氏はいづれも江戸末期の浮世繪畫家たるに外ならない。江戸文藝の挿畫としては、人情本が後れて出て、頽廢的氣分が漲つてゐると同じく、其の挿繪にも見るべきものが更にない。本篇には浮世繪の大家として極めて品の

いい高雅な美人畫を描いた鳥文齋榮之の遊女圖と、末期ではあつたが、菊川流と云へる一流を開いた菊川英山の娘風俗とを巻頭に掲げて置いた。英山の美人畫はこれを全盛期の畫家に比すれば遜色あるが、其の特色となる所は、軟か味のあつて、どこことなくあどけない點である。此の特色からしても、彼の娘風俗を描いたものは、最も善く適してゐる。

人情本の作家に深刻なる觀察と、燃犀なる筆致を有する名人の出なかつた事は、江戸文藝の爲に惜しむべきことであつた。春水の如きは「狂訓亭主人曰く」と署して、卑猥なる敘事の後に、道德めいたことを云ふを常とした。要するに世間の非難を恐れての遁辭に過ぎないが、斯うした逃路を作らねばならぬほど、彼は世人の好奇心を挑發せんとしたのであつた。人情本作家が多く春本に筆を執つてゐるのを見ても、彼等の藝術心は極めて低き幼稚なものであつたのである。御伽草紙より浮世草子、黄表紙、洒落本、草雙紙、合巻、中本、讀本に至るまで、其の作家の數は極めて多く、中には、ちとばかりの才筆に述作を敢てしたものもあるが、これを概するに、人情本の作者ほど無學に、創作力の乏しく、剽竊を平氣にやつてゐるものは少なからう。人情本の元祖と稱する春水が最も善く之を代表してゐる。彼の著作が歡迎せられたのは、要するに當時の淺薄な婦女子や遊蕩兒を相手にしたからである。鼻山人や松亭金水其の他の作家に至りては殆んど

云ふに足らない。

遮莫れ彼等は微力ながらも、大膽であつた。現代の世相を捉へて、寫實的にこれを描かんとした功は甚だ没すべからざるものがある。これ従前の讀書界に企てられなかつた試みであつた。否敢て試みられなかつたではない、洒落本が既に一步人情本に轉化せんとする機運は既に熟してゐたのであつた。例へば、娼婦と遊客と情夫との三角關係を描き、情夫が女の己れにぞつこんなのに乗じ、詭計を以て金の才覺を餘儀なくせしめる。偶、昵みの遊客の登樓したのを機會とし、妓も亦詭計を以て客に金の無心を吹きかけて、これをせしめる。遊客の懷から出た金子は情夫の手に入つたのである。情夫はこれを懷にして、晨朝匂々樓を辭して其の夥間と一杯の祝酒を汲み、酔ひのまぎれに再び他樓に登ると云ふを以て一編の終りとしてゐる。然し此の洒落本は、これにては片鱗を描いたに過ぎないから、別に題を設けて、其の後譚をものする。斯くして題は異なるも、數篇連續する趣向であるから、これを合はすと、一篇の人情本と異ならない。人情本は必ずしも單獨に起つたものではなく、斯かる洒落本の變形したものである。して見れば人情本は鼻山人の發意でもなく、春水の案出したものでもないが、此の機運を隆昌ならしめて、一派を作つたところに其の功を認めねばならぬ。人情本は江戸末期に衰へたが、餘勢は明治に涉りて、明治小

説への連鎖となつてゐるところに又其の價值がある。

天保十三年の水野越前守忠邦が極端なる風俗取締の改革は文藝に及んで爬羅剔抉する所があつた。人情本が打撃を受けたのは當然である。春水は處罰せられて手鎖を申附けられ、版元七名は所得金を没收せられ、各過料五貫文づゝを課せられ、版本は取上げられて削られ、書物は焼き捨てられた。これよりして後は一々検閲を受けることとなつたので、一時多數に制作せられた人情本の出版も寥々晨星の如き觀となつた。然し此の厳しい取締がなかつても、人情本は既に其の全盛期を過ぎて下り坂であつたから、決して其の隆盛は望まれなかつたのである。春水は大した作家ではなかつたが、彼の逼息とともに人情本が凋落したのを見ると、彼も亦一方の雄なりと稱することが出来る。とにかく彼は人情本の代表作家であり、此の人の向背に依りて人情本が浮沈したのである。よし曲山人に一二の稱すべき作品がありとするも、其の勢力に於ては、到底春水の比ではない。況んや鼻山人、松亭金水其の他の羣作家に於てをや。

春水が人情本作家として文壇に翱翔してゐたうちは、人情本も賑やかであつたが、彼が嚴罰を受けるとともに意氣沮喪してより、人情本は全くあるかなきかの姿となつた。『娘節川』を其の儘翻刻して『小さん 小金の花』と題し、厚顔にも二世爲永春水の名で刊行してゐるやうな、風上

にも置けぬ作家のあるを思ふと、人情本の末路も悲しむべきである。然し斯かる翻刻は從來とても人情本作家が往々平氣でやつてゐたところを見ると、彼等の何等藝術的良心を有せざる事が明白である。それほど人情本作家には下らないものが多かつたのである。名作の乏しいのも亦當然と云はねばならぬ。

小さん
金五郎 假名文章娘節用

前編三卷、後編三卷、三編三卷、併せて三編九卷である。曲山人の作で、初二編は天保二年、三編は同五年の出版にかゝる。小三の切なる思ひと、義理を立てつらぬく心意氣とを寫して、華やかなうちに、寂しみがあがり、人をして涙を催さしむる感傷的小説である。特に金之介と云ふ子役を用ゐて、頑是なき行動と片言交りの言葉とを其の中に綴つて、哀れさは一しほ勝つてゐる。朝夕に、木々の落葉を雨と見つ、冬をば告ぐる寂しさに、心も空も時雨月、訪ふ人もなき草の戸へ、友さそひ來て音なふは、水鶏にあらぬ小雀の、ちよはよと啼く聲を、聞くにつけても哀れ添ふ。

とある、三編下巻第九回以後は卒讀に堪へざらしむるものがある。蓋し人情本中の白眉で、此の

作家の老手なるを思はしめる。

清談 若緑

娘節川の續編にして、金五郎の一子金之介とお政との戀物語である。全部十二卷、曲山人の作に成る。一説に爲永春水の作なりとあるが、其の確證はない。刊行年月は明らかでない。娘節用に比しては、ひどく見劣りせられる。殊にお政が觀世音菩薩の功力によりて、佐重の誘惑を遁れて熱海から、情人の許に歸る趣向などは、甚だ淺薄で、幼稚な、子供だましの結構である。或は他人の作と云ふのが事實かも知れぬ。娘節川では初二編とも、江戸曲山人綴とあり、三編には江戸三文舎自樂補述と記してあるに、此の編では東都曲山人著編若しくは編著、著と記してある。猶娘節川の挿畫が曲山人の自畫で、歌川國直の摸寫であり、『娘太平記操早引』の挿畫が曲山人の自畫であるにもか、はらず、此の書の挿畫は一鵬齋芳藤の手に成つてゐる。尤も『教外娘消息』は柳川重信の畫であるから、必ずしも挿畫を以て云々すべきではないが、此の書の作者に就いては猶研究すべき餘地がある。然し天保三年には、春水得意の春色梅曆も出てゐる事であるから、賣名のかれが、曲山人の名に匿れて此の書を著すが如きことは萬々ない。唯疑ふべきは、春水以外に誰か曲山人の名に依りて、此の續編を著したものがあはせぬかの一事である。

教外 娘消息

初編三卷、二編三卷は曲山人の著すところで、天保七年の刊行にかゝる。曲山人の歿年は明らかでないが、天保七八年の交かと思はれる。第三編より第六編までは爲永春水が續作してゐる。此の書は大工の徳兵衛と裏店の娘お初との戀關係にからまつて、お初に戀してゐる且那の惣兵衛や娼妓上りのおふさ、待合の女房お仲などを配して、職人風の色戀を寫したところに、他に見られぬ輕妙さがある。一寸三馬の浮世風呂に似通つた面影もあつて、どこかにさつぱりした點がある。春の浮々した艶つぽい愛情や、秋の寂しい實意の深い色戀でなくして、夏向きのあつさりした、とんだ氣のいいもので、人情本中には異かり種である。此の書は從來複刻されて居らぬ。

盛衰 榮枯 娘太平記操早引

初編三卷は曲山人の作、二編上卷は同人の遺稿にして、中卷以下は松亭金水の作にかゝる。二編の初めに金水は序して、「吾が友なる曲山人、別名を三文舎自樂といふ、性來筆道に巧にして文

解題 娘消息 娘太平記操早引

を能くし、畫を能くす、且世間の人情に涉りて、常に流行の書を著し、其の名をさく聞えたりしに、惜しい哉歿故して、その志を果すに至らず、顔回が才ありといへども、不幸短命なるが如し。こゝに操の早引てふは、婀娜なる色に身を崩して、貞烈なる淨家を捐て、慈仁ある父を思はず、放蕩情弱の息子の傳記は、色に溺るゝ世の弱冠を戒めんとする一端ならむ。」と云ひ、第三輯に敘して、「こゝに筑波仙橘子は、文筆の道に賢くて、弱冠より文字を能くせり。されば其の譽れ四方にきこえて、書賈千里の遠きを厭はず、競ひて書を乞ひ上梓にす、また其の暇ある時は、戯墨を好んで和漢の故事、或は今様の振を取合はして、兒戲の冊子を綴るものから、人もて是れを珍奇となし、やゝ其の名も香しく、或時は一文舎自樂といひ、或は司馬山人、曲山人等の數號を標して、人情世態の浮世冊子は自ら畫いて、その重寶大方ならざる畸人なりしが、嗚呼惜しいかな、不幸にして、早く黄泉の客となる。然るに此の草子も初輯より第二輯の半ばに至るに、思ひきや遺稿とならんとは。」と云つてゐるが、曲山人の事實は此の序以外に何等所見がない。

此の書は繁兵衛と云ふ嫖兒と貞婦お千代とに配するに淫婦お玉を以てしたもので、曲山人の趣向はどう云ふ筋であつたか固よりそれと知る由もないが、片鱗を第二編上卷に現はした髮結傳吉なるものは、金水の筆に依りて甚しく活動し、初めは極悪無道であつたが、末には後悔して善人となると云ふ趣向である。其の間に於けるお千代の貞節を縷々敘してゐるが、一體に下劣で、卑猥で、人情本の缺點を遺憾なく發揮し、甚だ不愉快なる讀物である。しかも其の趣向も讀本擬ひで、寫實を隔たること遠い。お千代の悪夢一段の如きは春本作家の常套手段、唾棄すべきものである。初編三卷二編三卷は、いづれも天保八年、三編四編全六卷は同十年上梓せられてゐる。

辰巳梅之春
清談

爲永春水の作で、初編三卷は天保九年、二三四編九卷は同十年刊行せられた。序は式亭三馬の借物、それを辯解して、「右の序言は、今より二十餘年以前なりける戊寅春正月、五葉の松の序文に故人本丁庵三馬先生の記されし妙章なるが、其の頃諸君の珍重せられ、これを玩ばぬはなかりしが、此の程ははや其の冊子も世に絶えて噂をする人もなくなりければ、本意なき事に思ひたりしが、友人溪齋英泉子も同じ心にありしかば、或時のはなし草に、其の冊子を出して予に先哲の勝れたるを評ありけるにぞ、いよく式亭を追慕の餘り、此の梅の春の作意にのかりもあれば、頓て寫して序の代りとはなすものならし、卷をつなぐ四方の看官心得たがへして必ずしも故人の文を掠めたりとなそしり給ひそ、古今を論ぜず、親疎を選ばず、他の文章がゆかしさにかかる所

爲をなす事なれば、免し給へと願ふにこそ。」と言ふに至りては、思はず微笑させられる。福之助に對するお柳、お八重、七三郎に對する玉八、象吉、あ、相も變らぬや、こしい、こんがらかつた戀愛關係のことどもかな。人情本の千篇一律の代表作。

閑情末摘花

松亭金水の作、初編三卷は、天保十年、二編三編六卷は同十一年、四五兩編は同十二年刊行せられた。「むかしくの狂歌に、屁に寄する月といふ題に、すかし見ればひるかと思ふ武藏野の、くさきをわけて出づる月影と詠じたりしは、往昔の野原でありしその様を想ひやりたるものぞかし。」と巻頭の書き出しが既に此の様な、下卑た醜惡文字であるから、全く鼻持ちがならぬ。尤も此の書は其の割に他の人情本ほど挑發的な卑猥ではないが、結構もつまらなく、文章も極めて平凡だ。元來松亭金水なるものが、何等推稱に價せぬ羣小文士の一人であるから、これに對して傑作を求むるのが既に見當違ひと云はねばならぬ。

解題 終

小さん
金五郎 假名文章娘節用

そも／＼男女のなからひは、八百萬の神達の、出雲の御社に羣れ集ひて、結ぶえにしの様々なる、
竈の前の三介が、相模出生のおさん殿と、物置の出合の國訛、片言交りの口説事、寡婦と養子の芋田
樂、喰はぬは損者のびんづる隠居が、むしろやぶりの女狂ひ、あるは帶屋の長右衛門が、老實をして
筥入の、お半の壺へくらひ込み、浮名を桂川に流せしも、皆ことごとく縁なるべし。こゝにあらはす
一部の冊子は、いかなる人の筆に稿りけん、小三金五郎が一期の奇譚を、いと長々しく綴りたるを、
書肆のもて来て、補ひてよと、需めにしたがひ、をこがましくも、いさゝかこれに筆を加へて、櫻木
に壽くこととはなりぬ。

文政拾四年辛卯孟陽

江戸曲山人しるす

金五郎 假名文章娘節用前編上卷

江戸 曲山 人補綴

ほつたん

太刀は大山石尊の、さ、け物に納まれば、長刀は冷飯の、草履にその名を止めたり。弓は矢場のあ
 ねさんが、活業の助となれる静けき御代の事になん。斯波家の藩中に、假名家文字之進といへる者あ
 り。二人の男子ありけるが、兄は文之丞と云ひ、弟は文次郎と喚びなして、兩人ともに文武の道を、
 常に勵みて勤めしが、兄文之丞はいつしかに、奥勤めの御側玉章と云へる、容貌よき女と人知れず、
 契りをこめて語らひしか、日にまし互に思ひ募りて、忍びくの密話に、玉章はいつか只ならぬ、懐
 妊の身となりけるほど、この事今にも現はれなば、とても添ふ事なり難しと、思へば二人密かに語ら
 ひ、ある夜館を忍び出で、少しのしるべを便りにして、難波をさして上りつ、彼地此方とさまよひ
 て、思はしからぬ日を送れば、この地にをりても要なき事と、それより皇都へ赴きて、三筋町のほと

假名文章娘節用前編上卷

りに、さ、やかなる家を借りて、學文劍法の指南をしつ、月日をこゝにおくりしが、もとよりその技に勝れたれば、わづかのうちに、弟子のあまた付いて繁昌しければ、おのづから金銀の融通もよければ、些とづ、の金を人に貸しなどして、その利を取りて不足なく、暮す程に月満ちて、妻はやすくと玉の如き、男子を産み出しければ、名を金五郎とよびなして、蝶よ花よと育つるうち、満つれば缺くる世のならひ、妻は産後肥立たぬ上に、あしき風を引きそへて、醫療手を盡すと云へども、その験更になく、つひに無常の風にさそはれ、冥途の旅に赴きぬ。文之丞はたよりに思ふ妻に別れて、今更に悲しむる方なしといへども、いかんともすべきやうなければ、泣く／＼野邊の送りをなして、跡ねんごろに弔ひけり。斯かりしほどに幼児を、乳なくては育てがたしと、乳母をか、へ養育させ、只金五郎を手の中の、玉の如くにいとほしみて、光陰の過つをかぞへけり。こゝに又珠數屋町に、古鐵買の六兵衛とて、夫婦かすかに暮す者あり。年ごろ子の無かりしかば、つねに是れを深くなけき、神佛に祈りし故、その信心の通じたりけん、妻は今年四十歳にあまりて、初めて女子を儲けしかば、夫婦の喜び大かたならず、名さへいはうてお鶴と號び、いつくしみ育つるうち、妻はふた、び妊身になりて、次の年また女子を産みぬ。しかるに今度は養生の悪しかりしにや、四十の上の年子の事故、おのづから、血心おとろへ循環せざるにや、惡血さへもおりかねて、あと腹のしきりにかぶり、その

なやみの堪へ難きと、心の疲れに養生かなはず、つひに空しくなりにけり。こゝにおいて六兵衛は、子なきを神や佛に祈り、二人まで子をまうけしに、今はた思ひがけもなく、妻は子を捨て亡靈の、數に入りたる身の當惑に、歎くより外なかりしを、近所の者にいさめられ、まづ亡骸は取り納めても、納まりかねし胸のうちに、とやかく思ひつゞくれば、貧しき暮しに男の手一つ、いかゞして二人の子をば、育てんやうもなかりし故、心を鬼とも蛇ともなし、藪へなと子を捨てんかと、思ふまでに苦しみて、一日々々と暮しけり。さるを假名家文之丞は傳へ聞きて、おのが身に引きくらべては、捨て置きがたく、今不自由なく暮す故、當歳の子を親知らずに、貰ひうけて育てなば、その親の手も少しは輕くなりもやせんと、人づてにこの事を云ひ入れて、妹娘を貰ひうけ、名をお龜となづけ、また幾許の金を六兵衛に送り、姉なる娘をはぐ、みたまへと、情ある深切に、六兵衛はいたく喜び、娘が行末ふかく憑み、これより後、恵まれし金を少々お鶴に添へて、さる家へ里につかはし、あぢきなき世を送りけり。さればまた吾妻なる、假名家が家には文之丞が、不義なして家出せしかば、文字之進は怒りつ悔みつ、憎からぬ俵といへども、世間のおもはく上への聞え、親の名を出す不孝の罪、打捨ててもおかれねば、これ等の趣主君へ達し、文之丞を勘當なし、弟文次郎に家督を譲り、嫁を迎へて是れに娶合はせ、その身は隠居し、名を白翁と改めて暮すうち、文次郎夫婦の中に、一人の女兒を儲

けけり。是れにつけても文字之進は、文之丞の事をりふしは、何かにつけてうち案じ、思ひ出しつ、ほのかに聞くに、今は花洛に住み馴れて、男子持ちて不足なく、暮すと人の風便ゆゑ、案じの胸も安まりて、ゆく／＼は文之丞が子を、文次郎が娘に娶合はせ、家をゆづらば血すぢも絶えずと、心に思ひるたりけり。

第一回

されば月日に關守なくて、文之丞が一子金五郎は、今年十七歳、お龜は十五の春となりしが、二人ともに天性の美男美女にして、華洛廣しといへども、たぐひ稀なる容顔は、梅と櫻の婀娜くらべ、劣らずまさぬ風情なり。文之丞はこのとしごろ、古郷を離れ遠き都に、世を送るそのうちも、二人まで子をまうけ、何不足なき身のうへにも、十年あまり過ぎしころ、鎌倉の家をぬけ出でて、父のところへ便りさへ、ならねばいとゞなつかしく、子を持つて知る親の恩、報じがたきを口惜しく、思ふものから考へ見れば、主家の掟を破りつゝ、妻と不義して出奔せしかど、今にも詫びの叶ひなば、再び主家へ立歸る、事もあらんと行末を、かれ是れ思ひ合はずにぞ、早くより金五郎には、文學武術を教へしに、もとよりさかしきうまれ故、一を聞いて萬を知る、文武の才に長けたれば、幾程もなく上達し

て、今ははや金五郎は、武士の道くからず、殊に和歌、連俳、茶の湯、插花のたぐひまで、人なみなみより勝れたる、よき壯士とはなりにけり。お龜もまた世に珍らしき、發明の生まれにて、文よみ歌よみ手習ふ道は更なり、物たち縫針の技藝に勝れ、琴三味せん調べさへ、いと美しく何にまれ、女子の道にくらからず、その生立も頼もしく、人もうらやむばかりなれば、文之丞は何とぞして、古郷の父に勘當わびて、子どもの顔を見せまほしと、人を頼みてつど／＼に、父白翁にわびたりける。鎌倉には白翁も、總領の文之丞が、身のいたづらから家出して、今は花洛に相應に、文學武藝を師範しつ、不自由なく暮す上に、孫まで出来しと聞きつるが、いかなるさまに生ひ立つや、尋ねまほしと思ふ折から、人づてにて文之丞より、わび言を云ひ入れければ、白翁は、嬉しさひとかたならねど、いつたん主君へ勘當と、披露せし身をたやすくは、許す事もならざれば、その中首尾を見つくるひ、君へねがひて出入をさせん、文通のみは苦しからず、又孫の金五郎は、罪なき身のゆる幸ひに、文次郎に男子なければ、迎へをつかはしこなたへ引取り、いく／＼は假名家の家名を、相續さするほどに、支度をと、のへ待つべしと、返事に委細を聞くよりも、文之丞は大いに喜び、わが身の出入は叶はずとも、倅を本家へ遣はすは、この上もなき事なりと、金五郎を近くまねき、鎌倉の事くはしく語り、日あらず迎への來るをまちて、鎌倉表へくだるべし、と聞いて金五郎は今更に、思ひがけなく本家を

繼ぐは、身の本まうと云ひながら、一人の親をのこしおき、そのうへ子どもの時よりして、行末をたがひに夫婦ごと、胸に思ひしお龜にも、別れん事の心憂く、いまだ枕はかはさねど、何か心おくそこも、なくうちとけて憎からぬ、中なるものを打捨てて、行く事にやとさすがまた、おほこ育ちの心には、當惑するも理なり。お龜もこの事聞きしより、心細さの案じごと、とやせんかくやと思ふうち、鎌倉より金五郎を、迎への人の著きしかば、今は別れとなりけるかと、人目の關の忍び泣き、ふさぐは女子の常ながら、いと々に胸も結ほほれ、部屋に屏風を立てまはし、衣引被ぎ打臥して、涙のひまもなくばかり。折から障子引きあけて、立て廻したる屏風のはしを、折り返してはひる金五郎、「おかめ、けふはどうだ、やつぱり氣色が悪いのか。」トいふ聲におかめは目を見開き、「ハイ、いろいろの事を案じますと、心ほそくて氣がふさいで、いつも頭痛が致します。」ト金五郎は見てとりて、「おほかた今度東の本家へ、おいらが別れて行くものだから、それでふさぐと云ふのだらう。マア、何はともかくも、けふは南であつたかいに、こんな立てこめたり引被つては、猶のほせて悪いから、ちつと庭でもながめな。」トおかめはやうくおき直り、あたまをおさへてさしうつむく。金「コウおかめ、つよく頭痛がするなら、なんぞ薬でもやらうか。」おかめ「ハイありがたうござります。あんまり氣がふさいで、頭が重くてなりませんから、今しがた實母散をのみましたヨ。」金「さうか、あんまりつまらぬ事をくよくよ思つて、ほんたうの病氣が出るとわりいから、今日はちやうど天氣はよし、芝居でも行つて見ればいい。」おかめ「い、え、わたくしは、芝居も見たくはござりません。」金「ハテ困つたものだ。行つて見ればいいがのう。團藏だの璃寛だの、國五郎なんぞが大ひやうばんで、それに東からのほつて來てるる、路考の門弟の路之助が、又新作のはやりうたを、舞臺でうたつて、三絃の手があるが、いつ見てもまことに妙だヨ。」おかめ「さやうでござりますとネ。アノいつぞやあなたと御一緒に、浪花へ参りましたとき、濱芝居で見ました評判のよい、紀伊國屋はどう致しましたネ。」金「源之助か。今は東都へ歸つての、ますく評判がよくつて、去年の春向町の芝居で、刈萱の狂言をしたさうだが、近年にねえ大あたりで、それからなんでも當りつゝけて、町も屋しきも紀のくくと、べたいちめんに女子供が、ひいきすると上方まで、もつばらの評判よ。」おかめ「そのひいきの多い紀の國屋にも、まさつたお方がまた東へお下り遊ばしたら、マアどんなでござりませう。」金「紀の國屋よりいい男とは、そりやアどこの人だ。」おかめ「どこのお人か御存じでありながら。目もとから口元まで、音羽やに紀の國屋を、一ツにしたよりよい御容貌と、學文のけいにお出でなさる、みなさんが常不斷、さういつておほめなさいますよ。」金「なんのこつたかさつぱり解せねえ。」おかめ「わかりませんかえ、あなたの事さ。」ト顔をつくり笑ひ、金「何をいふかと思つたら、おいらが顔の棚おろしか、いいかけんにおひやる

ものだ。」おかめ「アレ本當でござりますよ。それだから私は、一倍苦勞になりました、いろいろな事を案じますと、胸がいつばいになりますよ。」金「なんのこつたな、をかしくもねえ。戯談はじやうだんだが、ほんにあんまり案じなさんな。迎へと一緒にあしたの朝、鎌倉へ立つて行つても、落ちついたら早速に、お前を迎へによこすから、ちつとの中だ、待つてゐな。しかし未始終は、親父がおめへとおいらをば、夫婦にすると豫ての料簡、なれど今までついしかに、親の目を忍んだり、なまめいた事もしねえから、そこがおめへの料簡一ツで、もしおいらに遠ざかつて、呼びによこすが待遠なら、縁づくともどうなりと、それはマア勝手次第。大かたモウ東へ行くから、いやになつた時分だらう。のうおかめ、いやか。」おかめ「い、え、なんのいやでござりませう。心にもない事ばかり。たとへどの様な所でも、あなたが呼んで下さいますなら、私は嬉しうござりますが、あなたは東へお出であそばしたら、あづまの女中は上人品で、まことに意氣だと申しますに、私の様なものは、とてもモウ、お捨てなさるは知れてをりますもの、未々の事を考へますと、寢ても夜の目もあひませず。そのうへ實の父さんは、お顔さへ見ぬその中に、三年あとにお果てなされ、跡に残るは姉さん一人、里に行つてお出でなされば、いつぞや逢うて名告りあひ、便りになつたりなられたり、致しませうと存じましたに、そのかひもなく里親に、だまされて身を河竹に、お沈めなさりしといふ事ゆゑ、今は杖にも柱

にも、力に思ふはおとつさんばかり。末を頼みしあなたにまで、思ひがけないこん度のお別れ、心細い身になりました。」トのこゝろねを思ひやりつゝ、むねなでおろし、「なんのこつたな。そんなに末の末までを、案じるから氣がふさぐ。なるほど兩親に早く別れ、姉さんにも生き別れでは、心細いもつともだが、人間は老少不定、定めないので世の習ひ、命ばかりは神佛の、力づくにもゆかぬのは、みな定まれる身の宿世、それをよく氣にしても、役にもたたぬ事ぢやアねえか。又たとへ別れくに、遠く隔つて行けばとて、おめへに此の家をゆづりでもすると、せひ壻をとらねばならぬが、さういふ時は、マアどうする心だ。」おかめ「そりやモウあなたがおつしやらずとも、海より山より御恩の深い、おとつさんのおつしやる事を、背く心はござりませんが、この事ばかりは背きます。たとひ妹のお許しをうけずとも、あなたをのけて餘の人に、添ひます心はござりません。あなたが東へお下り遊ばして、問ひ音信もござりませんと、わたくしはその時は、とても生きては居りません。死ぬる心でござります。」金「馬鹿な事を云ひな。それはほんの短氣といふもの、死ぬくれゑなら何も苦勞をするには當らず、添ひたいと思へばこそ、いろいろに氣をもむぢやアねえか。ほんに悪い事はいはねえから、少しのうち辛抱して、便りをするのを待つてゐな。コレサおかめ、なぜそんなに泣きなさる、子供かなんぞの様に。別れて一生あはぬといふ事ぢやアなし、ちつと氣をしつかりもちな。」トいはるほど

なほお龜は、うれしき「あなたがそんなに事をわけて、優しくおつしやつて下さるほど、猶悲しくなり
かなしさをやるせなく、」考へて見れば見ます程、しきりに心細くなりまして、あなたがお宿にお出で遊ばすうち、い
つそ死んでしまひたくなりました。」ト金五郎のひざにとりつき、金「エ、おめへもマア心のよわい。なん
ぞといふと死ぬくと、譯もないその縁言。マアよく物をつもつて見な。こんな事をいふと年寄めく
が、今世の中が静かだからよけれ、昔の亂世の時で見な、なんほおいらの様なちよろつかかな者でも、
武士の種だから、軍のところへ、是非出なけりやアならぬわ。よしか、出れば敵の首を取るやら、こ
つちの首を取らるゝやら、二ツに一ツ命がけ、親を捨て子を捨てて、戰場へ出るは武士のならひよ。
昔と今と比べて見な、まことに樂なこの世の中、そんな危い狂言もなく、武士の身に取つては本意ぢ
やなけれど、實に今は極樂世界。この道理を考へると、三年や五年遠ざかつて、苦にする程のこ
ともねえが、そこがやつぱり自己勝手に、十分でも不足に思ふは、人情のあたりめへさの。それだか
ら必ずとも、きなく思はず時節を俟ちなよ。短氣を出したそのあとでは、後悔してもはじまらぬえ
から、心を大きく持つがよいよ。」ト事をつけて、さとすをりから下女來り、「若旦那さまえ、旦那さまが
ちよつと入らつしやいました。」トいふに金五郎は、「オイ、」トおかめの部屋を出でてゆく。父文之
丞は一間の内に、煙草くゆらし文よみ居る。金五郎はしとやかに、父の傍にかしこまる。文「オ、金五

郎か。さてモウ鎌倉へ下るのも明日なれば、旅の調度を、落ちなく用意するがよいぞや。それにつけ
てもくどくと、いひきかすまでもなければ、獅子はわが子を谷へ投げ、其の生立を見て安堵して手
ばなすと。焼野の雉子夜の鶴、子故に迷ふは親の常、鳥獸でさへその様なるを、況いて人間は猶さら
に、子を見る事親に如かず、たとひ高貴指紳を始め、稻刈り漁る下さるまで、子を思ふのは同じ事。
もはやそちも十八なれば、案じる程の事はないが、かういうては異なるものなれど、人なみより文
武の道も、すぐれたといふではないが、マアどのやうな人中へ、出してまんなざら恥かしくもなし、
というておのが智にほこり、藝に慢じて多くの人を、眼下に見くだしてはならぬぞや。又一ツには祖
父さまを大事にかけ、われにかはりて孝行してくれ。二ツには弟文次郎は、養父といへども其方が爲
には、いはすと知れた血すぢの叔父ゆゑ、するぶんとともに心にそむかず、これまた孝行せにやならぬ
ぞ。また鎌倉は繁華の土地ゆゑ、人氣が都と違ふから、よく風俗をのみこめよ。仲間のつきあひその
外も、仕儀によつてはのつびきならねど、物事萬うちばにして、花にさそはれ月に浮れて、女郎買な
ども三度に一度は、外されなけりや行くがよいわさ。さりながら傾城傾國の譬へもあれば、かならず
深くはまらぬやう、心にこゝろを亂しちやならぬぞ。只忠孝に心を勵まば、その身の末もあしからぬ
ど、兎角に酒色は染まりやすく、昔より名將勇士も、色に迷ひ酒に溺れて、大切の身を亡ぼす例も、

まゝある事のゑ、この道は深く耽らすつゝしめよ。こゝが常言の、恥をいはねば理が知れぬといふ通り、早い例はこの己が、若氣の至りといひながら、無分別な心から、親を捨て故郷を離れ、家出なしで暫しが中は、住居も定めず迷ひしが、親の身では不孝な子でも、憎し罰あたれとは思はぬにや、こゝに住居をさだめてから、仕合と不自由なく、暑さ寒さの難儀もせず、人なみくゝに世をおくる、今この暮しも浪々の、日かけ者の望みはなけれど、不孝の罪なりやどのやうに、今更悔んでもあとへはかへらず。サこの道理をよく辨へて、女色その外あしき事には、遠ざかるやうにするがよい。今度そちが、わが本家へ貫はれ行きて、御主君へ事ふる事はいとめでたく、我が身の喜びこの上なし。又お龜は小さい時より、そちにこの家を譲りなば、娶合はして夫婦にしよう、おもうては居たれども、本家へ行かば何として、わが手で育てし娘でも、氏素性といひ弟の手まへ、卑しい娘は妻にはなるまい。殊にかための杯を、させたといふ中ではなし、そちを彼の地へ下した上、おかめには婿取つて、この家をゆづらば我は又、外に楽しみ望みもなければ、必ずともに今の教訓、忘れてはならぬぞや。」トわが身のこと、まじへてさと言の葉の、はじめ終りを金五郎、つぶさに聞きて胸にたゝみ、ありがたなみだと別れの涙、目に浮めてつゝ、金だんくゝと事をわけて、お心深き御教訓、きつと骨身にこたへまして、ありがたうござります。もとより愚かな私なれど、心の及びますだけは、忠孝二ツ

を勵みます。あなたもするぶんお身の上を、御大切に御養生なされ、おすこやかにお暮しなされて下さりまし。」トしとやかなる、文「イヤそれはかくべつ。おかめもそちと同じやうに、小さい時から共に育ちて、兄弟同様に暮したから、今別るゝも悲しかろが、これも定まる約束事、無分別の出ぬやうに、よく暇乞したがよい。」トすいもあまいも囁みわけた、言葉をしほに金五郎は、父の前を退きて、おのが部屋へ入り、翌日出立の事なれば、何くれ彼くれそれくゝに、旅の準備を落ちもなく、とゝのへて夕餉をしまひ、楊枝を使ひながらおかめの部屋へそつと来り、金「どうだお龜、ちつとは氣色が直つたかの。」おかめ「ハイなんだかどうも鬱塞ぎつゝけで、やつぱり頭痛が致します。アノあなたはどうでもあしたの朝、お立ち遊ばすのでござりますかえ。」金「さうさ、モウ迎へが来て居るから、どうも延されもしねえのさ。それだからおめへの顔を見るのも今夜限りゆる、忘れぬため見納めに、能く見て置かうと思つて来たよ。」ト笑ひながら顔を見れば、おかめは恥かしげに顔をあかめ、おがめ「又そんな嘘ばかり、それはほんの氣やすめでござりませう。」金「さうさ、いづれおいらの言ふことは嘘さう。どうでモウ明日から、居ねえのだから、本當にやゝしねえ筈だ。さつきおとつさんが言ひなすつた事を、おめへも大かた聞いたらうが、おいらが行つたその跡では、おかめに才子をとつてやつて、この家を譲るとおつしやつたヨ。のう、もしその婿が色男なら、首つたけはまりこんで、おいらのや

うな者は、うしろむきで唾だらう。」おかめ「なんのマアもつたいない、夢にもそんな心は持ちません。たとひ業平さんが生まれかはつて参りましても、私はあなたに見かへる心は、爪の垢程もござりませんヨ。」金「いいかげんな事をいふ、見かへる心は富士の山ほどあるだらう。」おかめ「モウ、あなたなぜそのやうに、わたくしが申す事を、お疑ひ遊ばしますえ。」金「うたぐりやアしねえけれど、謹らしい言ひやうだから。それが信實まことなら、必ず短氣を出さねえで、たよりにするのを俟つてゐなよ。」ト背をさすればお龜は嬉しく、おかめ「私はどのやうにも、俟つてをる氣でござりますから、どうぞきつとお便りを、早くなすつて下さりまし。」ト互につきぬ名残の涙、いとしかはいもまだ知らぬ、明けのからすの泣くくも、お龜は金五郎が支度する、かたへに持ちものなど取り揃へるうち、用意ことごとく整ひしかば、いざ出立とさめくを、金五郎は流石にも、跡に心の残れども、せんかたなければ氣をとり直し、父とおかめに別れをつけて、迎への者ともろ共に、心づよくも旅立つを、今が名残と文之丞、おかめも共に門邊まで、送り出でつ、金五郎の、影見ゆるまで見送れば、あなたも見かへる別れの泪、互に胸の憂也霽に、かくれて姿はみえずなりぬ。

小さん 假名文章娘節用前編上卷 終
金五郎

小さん 假名文章娘節用 前編中卷

江戸 曲 山 人 補 綴

第二回

在然程に、お龜は金五郎が鎌倉へ下りし後は、いと心も結ほれて、兎角浮き立つ事もなく、今日や便りのありもやせん、あすや音信あらんかと、あだに過つ日を指をり算へ、一日々々と暮すうち、早くも半年あまりも過ちて、彌生の末になりけり。されどもいかなる事にやありけん、金五郎の方より音信の、文さへ來ねばひとしほに、おかめは思ひいやまして、ほのかに聞けば鎌倉には、お雪といへる娘ありて、ゆくくは金五郎に、娶合はする約束なる由、きいて猶さら胸つぶれ、さうとは知らずうかくと、便りの文を楽しみに、待ちし心の愚かさよ、殊に妹伏のかたらひも、せぬ中なればなかく、いつの世にかは添ふ事ならず、というて今更よそほかの、男持つ氣はさらくなし、今は日頃の樂しみの、かひさへ泣いて暮すのかと、思へば千々に胸苦しく、あるにもあらぬせつなさ

を、父文之丞にもかたられず、ひとり心をいためしが、唯その事のみ思ふものから、うつら／＼と牀病の、朝な夕なの食事さへ、ろく／＼す、ますうち臥しぬれど、もとより妬む心なければ、あぢきなき世とうちかこち、一日二日と送れども、夜の目もあはさで案じ事、行末こしかた思つてみれば、よく幸なき生まれにて、親にはおくれ姉には別れ、便りさへなき身の因果、心の願ひも叶はねば、生きながらへても楽しからず、いつそ淵川へ身を沈めて、果てなん事こそましならめと、戀に心も亂れ髪、なであぐる氣もなかく、泣きしづみたる閨の戸を、更けゆく夜半の風ならで、ほと／＼とうち敲き、「おかめく」とよぶ聲に、驚かされて立ちあがり、そつと戸を開けうかへど、人もあらねばさてはわが、心の迷ひに風の音を、もしや戀しきその人の、來給ひしとや思ひしゆゑ、あな淺ましき心かなと、わが身の程をかへりみて、又うち臥すにふた、び三たび「おかめく」といふ聲の、耳に入るこそいぶかしく、もしやと惑ひて出て見れば、影さへもなしうち臥せば、またよぶ聲のする故に、おかめは夢歎うつ、かと、そのまどひさへ解けがたく、心亂れて立つたり居たり。こは生存へても添はねば、思ひあきらめ死ねかすと、父母の呼び給ふならん。オ、それ／＼と娘氣の、よしなき迷ひにひかされて、死する覺悟に据はしより、幸ひ誰も見しらぬ様子と裏口より脱け出でて、いづくともなく急ぎ行きぬ。其の明けの朝お龜の居ざるを、見つけて驚く文之丞、家内の男女もおどろき

て、其處此處と捜せども、その行方知れざりければ、文之丞はつく／＼思ふに、日頃より金五郎を、夫の如く思ひ思はれ、互に憎からぬ中なりしを、いづぞや別れしその日より、唯うつら／＼として、東の空のみ打眺め、娘心に添はれぬ事と、思ひ餘りの胸に絶えずや、夜もをり／＼うなされては、淵川へなど身を沈めんと、うつ、の如くにいひけるが、さては入水やなしたりけん、猶人を出し水邊を、落ちなく尋ね探しけれど、その死骸さへ知れざれば、今は文之丞も定業ならんと、やうやくあきらめ、家出せし日を忌日として、七日々々の訪ひとむらひもねんごろに、涙ながらにいとなみつ、文之丞はこの事を、くはしく狀にした、めて、鎌倉の金五郎かたへ、人を下して知らせけり。されば又金五郎は、本家の叔父文次郎の家に、養子に貰はれ來りけるが、思ひきやお雪というて、容貌のうるはしき、娘のあるに驚きしが、今更にせん方なく、父の教へに従ひて、養父母に孝をつくし、暮すうちも都に残せし、おかめの事のみ氣にかゝり、末は女夫と約束して、別れて此の地に落ち著きしなら、便りをなして呼び迎へんと、思ひし事もくひ違ひ、お雪のあれば此方の父に、おかめの事をうちあけて、迎へたしとも言ひがたく、殊に實父文之丞が、おかめは素性もいやしければ、本家の妻にはなりがたしと、云ひたる言のかれこれを、思ひ合はせばゆく／＼は、とてもお龜と添ふ事ならず、一旦約束したれども、かかる譯ゆる思ひきれと、言ひ送らんもさすがにて、又遠さかりる事なれば、

なま中たよりのをするならば、思ひのたねをいやす道理、音信せぬこそ互のため、いつか忘る、事もあらんと、あきらめては見るものの、愛敬つきて憎からぬ、お龜を今さら餘の人の、手活けの花になす事も、いと口惜しき事なりと、日々に胸のみ苦しめけり。かかるところに實父の方より、しかくの事により、おかめが家出行方知れずと、いひこしければ金五郎は、駭くこと大かたならず、掌中の玉を、うしなひし、心地にあきれ胸つぶれ、氣ぬけるまでまどひしが、さすが男の事なれば、やうやくに心取直し、つくづく思へば縁なきむかしと、あきらめては見るものの、もしやおかめの心かはり、我のみ深く思ひるるのも、知らずに男をこしらへて、家出せしにはあらざるか、又は狭き心から、添はれぬ事を苦に病みて、入水などせしにやと、さまざまに思ひとりて、心に廻向したりけり。是れより後は金五郎も、おかめが死せしと思ふものから、家の娘お雪の姿も、十人なみには勝れたれど、見かへる心もなき故に、世に楽しき事もなく、面白からぬ日を過すうち、夏去り秋も文月の、中旬にいたれど暑さはさらす。ある日金五郎は、酔狂といふ友達にさそはれて、大磯の燈籠を見物せんと、打連れてたそがれより、郭へいたりなじみの茶屋、守多屋へゆきて酒宴をまうけ、歌妓牽頭など相手にして、ざゝめきわたつて大騒ぎ。たいこもち「コウくおたこさんく、コレサおたこばう、ちよつとこちらを向き給へ。」トしやうに引つばる。おたこ「アレ厭だヨ、よしておくれ。そんなに引つばる

と著物がきれるわネ。すかねえのう。」へほ吉「オヤ氣がつかねえ、堪忍しておくれようツ。コウおたこさん、いい子だからちよつとうしろを弾いておくれ。無類飛切大極上、せり賣り卸し仕らずといふ聲色をつかふから。」おたこ「オヤくおつな薬のいひ立てだねえ。」

うた菊はとうりのもとよりも、けいしうの袖やかをるらん。

へほ「まねするは、エヘンくく、エヘンノ、エヘンく、エヘくエヘンノ、エヘンくく、エヘン」目八「なんだく、コレどうしたのだ、そこへ小間物見せを出しちやア眞平だぜ。」へほ「なぜなげ、こりやア聲色だ。」目八「エヘンく、エヘンノヘンツ、なんのこつた。」へほ「ハテやほな事を聞き給ふな。よく考へて御覽じろ。即ち咳が三十らうサの。」酔狂「おきやアがれ。アハ、、、。」目八「モシ旦那、妙な事がござえます。誠にどうも、どうも誠に、實に妙々々でござえす。」酔何だやかましい、何をいふのだ。」目八「イエサ貴方が誠にどうも。」酔「己かどうした。女が惚れるで羨ましいか。」目八「いかなこつても御挨拶。オホ、、、ツ。エモシ、お前さんはお目が二ツあつてよく見えますネ。實にうら目しいアこのこつた。」酔「ハ、、、、何をいふかと思つたら、足下は目が一ツだつけの。をしい男だが、あつたら玉に疵だのう。」へほ吉「さやうさねえ。モシ旦那、よく御覽じまし。顔の丸みあんばい肉合などは、てもなく珊瑚珠の緒の再来、モシ鼻筋が横の方へぐつと通つて、眉毛がに

よつくりと蛭蝮の様で、鼻は獅子でもねえが赤くむくれて、口は錢湯のざくろ口だが、流し男の給金が安いかして、齒は一向に磨き上げず、勻ひのあしき事はん方なし。警へていはってんくむきむきの、寄合世帯といふ顔がまへサ。ア、なげかはいが愛敬のねえ、女縁のなさうな御面相だぞ。」

目八「こうく貴さまは、何の遺恨があつて、おれが顔の棚おろしをするのだ。隣の寶をかぞへるやうに、人の痴氣を頭痛に病むとは、よつほどおめへも苦勞性だぜ。ア、とかく男のいいものは、そねまれるのでうるせえぞ。オホンく。」

目八「へん、おつうとまりたがる奴だの。コウ戯談はおどけだが、足下幫間をさらけやめねえ。いい金まうけの筋があるぜ、九月になると。」

目八「なぜく。」

目八「よく考へて見さつし。容貌といひ口前といひ。」

目八「ハテナ、富でもとるといふ事かノ。」

目八「へん押し強え、神明の祭だからよ。」

目八「ナニく、神明のまつり、フウめつかち生姜か。ヤいまくしい事をぬかしやアがる。コレそんなに難非を付けて悪くいつても、是れでも女にやア憎がられねえ男だよ。」

目八「そのかはりかはいがられた事もあめえ、その顔ぢやア。」

目八「そねめく。顔にやまよはぬ姿にやほれぬと。」

目八「フウたつたひとつの目に惚れるか。フハ、、、。」

目八「オヤく目八さん、今日はまことに閉口だねえ。」

目八「ナニサく、こんな理も非も辨へねえ、田夫野人と論は無益だ。」

目八「ナニ、己が田夫野人なら、足下は牛夢にんじんだ。」

目八「ハ、、、。」

目八「ときに

モシ、金さんとおつしやいましたネ、ちよいと一ツけんじ天皇あきの田のといたしませう。」

金五郎「こりやア一ツお押へだ。」

目八「ナル、そこもあれば蓋もあるか。モシ旦那、實に妙といふことがござえますトいふ來歴は、モシ、千年屋のか、への子で、この頃まで引込んでをりましたのが、けふ突き出しの眞名鶴といつて、ぶつつけのお職さネ。その容貌といつば、天人は羽衣をかぶり、辨天さまは冠を落し、拙者がお宿の山の神も、尻をまくつて逃げ出すばかり。」

目八「へんがうぎに山の神をあがめたの。」

目八「大きにス。エ、とまづこの天杯は、そちらの旦那へさ、けて置きのと。そこでモシ旦那、今にモウこ、へ眞名鶴さんがめゑりますから、よくお拜みなせえ。實にびつくりおいたちこ、ねすみこつこは癡話の初まり、とけつこつこは鶏よ、はとつほつほにや豆をやれ、すてつほうには油断をするな、ふてえ奴なら打ちのめせ、じたい我らは都のうまれ、色にそやされ、こんな幫間になられたア。ハアどんどごどん、どんどごどんツ。ア、せつねえ、いきがはずむ。アツハツハ、ハ、、、。」

醉狂「エ、やかましい、よくしやべるぞ。そんなにどなると、天井の煤が神事舞をして、疊の芥がをどり出すだらう。」

目八「違へごせせん。酒呑猪口がきやりをいつて、銚子の引物を引き出すと、吸物膳の箸が突立つて、硯ふたの慈姑をおつちらかしやせう。とんだ化物屋しきのやうだ。アハハ、、、。旦那おどけはのけて、モシ、噂をすれば影ぢやあねえ、正真正銘本家元祖、まじりなし、

外八文字でしよなりく。アレく、あの提灯がそでござえます。」醉「ほんにのう、金さんおめへもよく目利をして、もし無疵で氣に入つたら、今夜の花にしなざるがいい。」金五郎「ちけへねえ、なんならお前ともやひにませう。」ト「おどけをいふうち、千とせやのつき出し女郎まな鶴は、新造かぶるをひきつれてへの知、お龜の姿にいきうつし。もしやそれかとつくく見れば、劣りはせねどどこやらが、違ふ様に思はれても、目もと口もと愛敬ある、品かたちのよく似たれば、胸とろきて心まどひ、わが身の迷ひか、酔うたる故かと、しばし見とれて詞なきを、見てとる幫間醉狂も、金五郎の肩をた、醉「コウ金さん、おまへは此のごろひどく物案じな様子だから、いろくにすゝめても、女郎もけいしやも地者もいやだと、だゝつ子がすねるやうに、いやだくといひなすつたが、なんと今の花魁はどうだエ。」金「さうさネ、なか／＼美しいネ」醉「よつほどさそふ水あらばだネ。」金「ナニ、さういふ理窟でもねえけれど。」醉「けれどがをかしい。あながち氣がないでもあるめえ。」金「ハ、、、マアなんでもいいから、わたしやアあの子にきめよう。」醉「それがいいく。そんならおれも行つて、誰ぞ見立てよう。」ト「ふたりはたいこげいしやをひきつれ、ちとせ お定まりの杯事も、ほどよくきりあけ牀へまはれば、藝者牽頭は「御機嫌よう。」ト「みなくどやど。金五郎は初會の事ゆゑ、羽織は枕元にぬぎ捨てて、横になつて寝てる處へ、相方の眞名鶴は、藍御納戸の唐縮緬、裾に光琳の鶴の染め出し、緋ぢりめん

の裏襟つきし、ひとへものについたけの襦袢、黒の紋天に緋のごろふくりんの、腹あはせの帯をだらしなく結び、鼻紙を持ち添へて褌をとり、いそ／＼しながら金五郎のそばへ來、眞名鶴「もしえ、モウおやすみなんしたかえ。なぜ起きてるておくなんせぬえ。サア目をお覺しなんし。」ト「ゆすりおこせば、金五郎は、わざと目のきめたふり、金「オヤおいらん、いつの間にマア來なすつた。くるなら來ると前びろに、鳥渡人でもよこしなさればいい。出しぬけに起されちやア蟲が動じるから。」まなづる「オヤ／＼いやでおすよ。」金「さうだらうネ。いづれ私のやうなへうたんは、可愛がられねえのはあたりめへさ。」まなづる「アレさうぢやアおざりいせん。お氣にさはつたらおゆるしなんし。」ト「煙草をすひつけていだす。」金「これは御馳走。」ト「まなづるにわたし、顔をしげく見てゐる。」金「オヤなんざんすえ。ぬしやアなぜそんなに顔ばかり見なんすえ。主にそんなに見られえすと、恥かしくなりすヨ。」ト「わらふ。」金「まことに不思議。どうも生きうつし。こんなにもよく似るものか。」ト「われを忘れて、まなづる「オヤなんでおすえ。似いたとは、そりやアたれさんに似いたえ。」ト「つこりわらふ。」金「ソレ、その笑ふ顔つきから、物ごし恰好、似たとはおろか、瓜を二ツにわらすとその儘。」まなづる「オホ、、、ばからしうおすヨ。似たくと仰せえすが、誰に似申したのか、話してお聞かせなんしな。」金「話ませうく。その似たといふ仔細は、マア聞いておくれ、かういふ譯さ。わたしが幼さい時分から、行末かけて云ひ交し、女房にせうと思つた女にサ。ほんに

野暮な野郎だと、笑つてくんなさんな。」金「なんのマア笑ひんせう。そんならモウぬしは御新造さんがおざりますネ。」金「ナニサその女はモウとつくに死んでしまつたのサ。」鶴「うそく。そんなにお隠しなんせすとよいぢやアおつせんかえ。」金「謙ぢやアなしサ、實に死んでしまつたよ。」鶴「ほんさんすかえ、ソリヤアマアさぞお力がお落ちなんしたらうネ。たとひまた謙いつはりにも、主に思はれてお出でなんした、そのお方に似たと思つておくんなんすりや、わたくしが身に取りいしちやア、眞實嬉しうおざりいすヨ。」金「なんの、うれしい事はありやすめえ。そりやアほんの勤めの手くだ、實は七里けつばいだらう。」鶴「オヤ勿體ない、なんでいつはりを申しせう。初會からこんな事を申ししたら、おさけすみなんせうが、ぬしのためなら都合しても、呼び申したうおざりいすが、ぬしやア大かた通り一遍で、もうお出でなんすこつちやアおざりいすめえ。」金「そりやアみんなこつちで言ふ事、一河の流れ一樹の陰、他生の縁があればこそ、かうしてわざく來るといふもの。おめへがさういふ心なら、わたしも根限り通ふ氣だが、いい時分に突き出しちやア恨みだよ。」鶴「どうしてマア、ぬしを突き出したら、それこそ罰があたりいせう。」金「それはさうと、たとへにも、他人の空似といふけれど、どうも他人とは思はねえが、お前はマアいつたい何處の生まれか、なじみがひに話して聞かせな。」鶴「そりやアぬしの事さんすから、おはなし申しも致しいせうが、身の上をあか

しいしたら、ぬしに愛想をつかされいせう。」金「さう思ふも尤もだが、いづれこの郭へ身を沈めるには、仕合がよくつて來た者はねえから、なに恥といふではなし、はなして聞かせてもいいぢやアねえか。」鶴「ほんにそれもさうでおすネ、そんならお話し申しせう。アノ私はまことに遠くの國でおざりいすよ。」金「ハテネ、それぢやア蝦夷松前か、紅毛の果てからでも來たのかえ。」鶴「オホ、ホ、ばからしうおすヨ。アノ上方でおざりいすからさ。」金「フウ、アノ上方、ハテナ本當にか。」鶴「ア、それだから遠くだと申しいすのさ。」金「何の上方の生まれなら、遠くな事があるものか。ハテ縁といふものはおつなものだネ。わたしもやつぱり上方せえろくさ。」鶴「オヤ謙をおつきなんし、なんのマアぬしなんぞが、上方だとおつせえしても、上方にやアぬしのやうな、いきなお方はおざりませんよ。」金「さうさ、わたしの様な不意氣な野郎は、どこの國にあるものか。そしておめへは上方の、もし數珠屋町の邊ぢやアねえかえ。」鶴「エ、ほんにさうでおざりいすヨ。よく主は知つてお出でなんすネ。その數珠屋町の六兵衛と申しすまづしい者のむすめ。」金「ヤ、そんならアノ數珠屋町の、古鐵買の六兵衛どのの、娘であつたか、アノおめへが。」トあきれて暫しことばなし。わが身の上は幼き時より、母にわかれ家まづしき故、さるかたへ里にゆきて、やうやく成人なしたる處、里親にだまされ、過ぎし年この大磯の苦界に沈み、父六兵衛は夫れより先に、亡靈の數に入り、たつた一人の妹

は、藁の上から情ある、お方に貰はれ育つと聞けど、つひに一度逢ひもせず、便りなき身はつね々から、妹ばかりがゆくゆく、力と思へどかひなきつとめ、まめで居るやらどうしたやらと、案じるのみと身の素生を、語るをきいて金五郎は、驚く事ひとかたならず、我こそあなたが妹の親の、文之丞が男子なるが、幼き時より妹おかめは、我が身と共に人と成りて、いまだ枕はかはさねども、行くする女夫の約束して、仲よく暮すその中に、われは此の地の叔父の家へ、貰はれ来りしその後にて、おかめは家出し果てたるにや、行方の知れぬその處に、今また思ひがけなくも、姉のおん身にめぐりめぐりて、今宵名のりあふといふも、やつぱりつながる血すぢの絲、あやしき縁なりけりと、いちぶしじうを物語れば、ますく駭く眞名鶴は、便りにせんと楽しみ俟ちし、唯一人の妹まで、世になき人と聞くからに、悲しさいとゞいやまさり、しばし涙にくれにけり。かかるえにしの淺からぬ、中なれば猶さま々に、身の上の事かたり明しぬ。されども互に一ツに寝ねず、一旦金五郎も妹お龜に、女夫の約束せし事なれば、今更その血すぢの姉が、流れの身とても枕かはすは、さすがにうしろめたく思へば、眞名鶴もまたその心ゆるゑ、すいた男と憎からねど、帯紐解いては死したる妹の、供養にならずと心に慎み、いやらしきことさへ言はず。さりながら金五郎は、この儘にもふり捨てられねば、是れより常の客の如く、をりく眞名鶴の處へ通へど、決して枕をかはす事なく、酒等のみては憂さ

を語りぬ。かくてその月もくれ、八月の初めになりけるに、例の如く思ひく、俄狂言をどりなど、さまざまあるその中に、額俵屋といふ茶屋の、今度かへの藝者の小三、品かたちといひとりなりまで、五町にまれなる容貌ゆゑ、淺間のをどりにこの小さんを、傾城奥州に仕立て、衣裝著つけも美をつくし、淨瑠璃は登見本阿輪太夫にて、人の耳目をおどろかす踊ゆるゑ、郭中での大評判をりふし金五郎は、待宵の月をながめつ、俄を見物なすべしと、例の如く守多屋の二階にて、眞名鶴と共に酒くみかはし、今や来ると待ち居るところへ、程なく来る淺間の踊、節おもしろき太夫の淨瑠璃、あさい心としら絲の、染めてくやしきなれ衣、ありしなからの一つまへ、小づま揃へてしどけなく、風に柳の吹くま、に、まかせるはずのつとめぢやとても、いやな客にも比翼ごさ、思ふ男の、山鳥の、

トかたる文句につれて踊る小さんを、金五郎は、何心なく、見ればふしぎやすぎし頃、家出して死したるおかめに、寸分違はぬ顔かたち、これは不思議とまた、きもせず、見れば見る程違はねば、是れもわが身の迷ひかと、思ひ直して見るものの、外の女と思はれねば、もしや浮氣な心をいだし、男をこしらへこの郭へ、逃げて来てゐる事にやと、まはり氣すれば腹立たしく、さりとて人に問ふも異なるもの、とつくり様子を見極めんと、そしらぬふりにて見てるれば、幫間のへほ吉見とれつ、へほイ

ヨイヨ、濱の本店、小さん大明神さまくく、外には決してごせえせん、三千世界にたつた一人。」
日八「イヤ有りがたし、妙でござえす。濱むらや丸むき、額俵屋の大黒柱、有り難いの天上め、咲耶姫の再来か、三國一の無類々々。」金「たいそうほめるのう、賄賂でも貰やアしねえか。」日八「モシ旦那、賄賂處か、けふもきのふも昨日も今日も、文玉章の數々は、ヤモシ、あんなうつつい美婦人が、つけ文をするのでのほせやすのさ。」女侍「いやおまわ」オヤ目八さんきついこつたネ。十九文やの店さきのやうに、うぬほれ鏡が澤山だヨ。オホ、、、。」日八「ヘンやつかましい、妬くなく。おとわばうは氣めへはいいが、とかく妬くので恐れるのツ。」おまわ「オヤよしておくれ、お前のおかみさんとはちつと違ふによ。モシ旦那、アノ小三さんはネ、上がったから此の頃まゐりましたさうでございますか、よく早く呑み込みましたぢやアございせんか。」金「さうか、とんだ遠くから賣られて來たの。大かた男と驅落でもして、其の男に賣られたのだらう。」日八「旦那きついもの、お前さんの判断のとほり、男とはるくくにけて來たが、その男にたぶらかされて、泥水へしづんだのでござえすツサ。」まなづる「オヤくアノ子がかえ、どうもさういふやうすには見えいせんねえ。もしえ、さうぢやアおつせんかえ。」金「おいらんはさういふけれど、そこが警への小袋と小娘、油斷のならねえ世の中さの。」へほ吉「ナニく旦那、さういふ譯ぢやアござえせんツサ。わたくしがこのあひだ額重へめゑつた時、よ

く氣をつけて見ましたが、それはく起居ふるまひの物しづやかさ、音聲はさわやかにして驚のさへづる如く、多辯でなく、はすはでなく、意氣でしやんとして程がよく、鴨川の水を産湯にあびて、京おしろいを糠袋に入れて、みがきあけた眞の美女さネ。」ト話す處へある庄「モシ旦那、額重の小さんをごらうじましたか。」金「フウ何だかろくく見なんだが、よつほど美婦人ださうだの。」庄「さやうでございます。まづ此の頃の藝者だと申します。いい金箱をかへました。」トとりくひやうば金五郎はむね「アノ小さんこそ面ざしといひ、上方から來たといへば、おかめにとも相違はあるまじ。眞名鶴にもうち明けて、様子を聞かんと思ひしが、なま中あからさまに語りても、健であゝしてゐるからは、心かはりて男のために、身を沈めしもはかりがたしと、さまざまに思案して、今宵は去りがたき用ありとて、そこく座敷もきりあけ、眞名鶴に別れて大門を出でしが、忽ち又取つて返し、私かに額俵屋重兵衛の處へゆき、彼の小さんに口をかけて、二階へあがり酒のみながら、今や來ると待つところに、程なく小さんは俄をしまひ、うかぬ顔にて何氣なく、二階のはしごをとんとくと、上り來りて金五郎の、側へ立寄り顔見合はせ、ハツとばかりに驚きあわて、立たんとするを金五郎は、そをとりあげ、「コウ小さんとやら、なぜ逃ける。氣障な客だから氣に入らねえか。きざならきざでいいけれど、物も云はずにそしらぬふりは、見忘れたのか見くびつたか。よもや忘れはしめえがの。」

末練が残つて来たのぢやねえ、聞く事があるから下に入る。」ト、いはれて小さんはむねにくぎ、なんといらふして、只さめんとなきゐた。「コレ、あいさつしねえは面目ねえのか。エ、そのさまはマア誰ゆるだ。定めしかはいい男のために、心からのこの勤め歟。よく物をつもつて見ろよ。犬猫でもそれ相應に、恩といふことは知つてゐるぞ。それになんだ、己の顔を踏みつけにするは愚かな事、わらの上から育てられた、産みの親より恩の深い、養ひ親の情を忘れ、恩を仇の犬畜生、義理ある親の名を汚し、恥をはぢとも思はぬ狸め。よくマア面もかぶらずに、のけ／＼と出てうせたナ。いかに遠路をへだつるとも、多くの人のいりこむ郭、この鎌倉にもおれが親父の、文武の弟子はいくらもあれば、この街へもみないりこむわ。それに面を合はしても、恥ぢやアあるめえ恥でもなからう。さういふ事とはつゆ知らず、親父は直な心から、神かくしにでもなつたのか、又は身をなけて死んだかと、心を盡して尋ねさせ、うらなひ八卦御圖にも、生死の程も分らぬから、家出した目を忌目として、佛事供養も、懇にする、くはしい書状が来たゆゑに、子供の時より一ツに育ちし、馴染がひに朝な夕な、念佛申してやらうと思へど、今は養子の身の上なれば、両親の前へも遠慮がちで、心には任せねど、合間を見ては廻向して、抹香くさい佛いぢりも、萬一たつしやで居るならば、身の祈禱にもならうかと、心づくしに引きかへて、性根のくさつた恩知らず、大切な親をふり捨てて、この土地へ来て泥水活業、オ

オ貞女だ、節義ものだ。髪のかざりの櫛笄、はでな衣裝に浮氣なとりなり、長唄豊後はやり唄や、一中ぶしをうなつたり、是れ見よがしに踊を踊つて、客の機嫌をとる事ゆる、人も迷はう惚れもしよう。悪性ものの天上め。モウ／＼愛想のつかし納めた。顔を見るのもいま／＼しい。ものをいふのも是れぎりだから、勝手次第に浮氣をしをれ。」ト、いひすて立たんとするを、小さんはしじういひわけなきに、小三サ、みな御尤もでござりますが、マア／＼待つて下さいまし。くはしい様子を御ぞんじないから、お腹をお立ち遊ばすも、少しも御無理はござりませんが、是れにはいろ／＼深い譯が。」金「オオ譯もあらうし義理もあらう。けれどもそりやア聞く耳やもたねえ。エ、いけふざけた、はなさねえか。」小三「いゝえ放しはいたしません。言ひがひのない心から、思ひもよらぬおうたがひ、死なうと覺悟極めしは、今日の今まで日にいくたび、やつぱり死なれぬ身の因果、どうなりとして今一度、あなたのお顔を見たうへにと、あまたの人の入りこむこの花街、そればかりを楽しみに、つらい苦界に身を沈めて、恥や人めに氣もつかず。」金「エ、やかましい、よしにしろ。ど、いつの文句めいた、そんなせりふはをかしくねえ。流行言に道理をつけたり、間に合ひの口ほこでも、モウその手ぢやアばかされねえわ。」小三「左様ではござりませうが、どうぞ情と思召して、たつた一言申すことを、お聞きなすつて下さいまし。その上にてはともかくも、殺してなりとお腹いせ、御勝手しだいになされ

まし。」ト身をなげかけてすがりとめ、涙ながらにわびるにぞ、金五郎もさすがまた、心強くは云ふもの、憎からぬ小三の事ゆゑ、すけなく立つても歸られねば、袖ふり拂ひ身をそむけ、銚子の酒を手酌にして、茶碗にうけてぐいと呑み、手まくらをして寝ころびるる。

小さん 假名文章娘節用前編中卷 終

小さん 假名文章娘節用前編下卷

江戸 曲 山 人 補 綴

第三回

當下小三は胸なでおろし、涙を袖にぬぐひつゝ、金五郎の側へさしより、小三今さら實を申しましたも、一旦お疑ひを受けましたれば、誠とは思召すまいが、あなたにお別れ申してより、一日片時忘れませず、泣いては明し泣いては暮し、もうく悲しい日を送るも、やがて東へ落ちついたら、呼びによこすとおつしやつた、そのおことばを力にして、今日か明日かと指をりて、まてば一日も十日の思ひ、明けても暮れてもお便りなく、一月たち二月過ぎ、三月四月と日は立てども、風のたよりのお文さへ、ないて暮して居るうちに、この春の彌生の頃、日さへ忘れはいたしません。上の八日の夜もふけて、みな家内は寝しづまつても、わたくしばかり目も合はず、こしかた行くすゑどうかうと、思ひまはせばいとしく、便りなき身をあなたにまで、捨てられては世に頼みなく、いつそ死なうか果

てようかと、案じすごして居ります折から、閨の戸とん／＼うちたゞき、お龜／＼とあなたのお聲、さてはと嬉しく戸をあけて、見ればなんにも眞の闇、これも心の迷ひかと、また寢ますと又とんとん、おかめ／＼とよぶ聲の、三度四たびと聞ゆるゆる、また出て見れば物もなし。我とわが身で合點もゆかず、途方にくるれば寺々に、ひゞく夜中の鐘の音の、あはれ無常を告げるかと、ながらへ難く胸せまり、物うき月日を送りますのも、心苦しく苦患になり、いつそ死んだがましであらうと、思へばしきりにぞく／＼と、首すぢもとから身の毛だち、死ねよ／＼と死神の、ついて死ぬのを勧めますのか、立つても居ても落ちつかず、我を忘れてふら／＼と、家をぬけ出で走りましたが、その後の事はさつぱり知らず、どうして身を投げしやら、賀茂河へ流れ著いたを、近所の者に引き上げられ、息ふき返して見ましたところが、顔も見知らぬこはい男が、せけんとやら人買とやらいふ男と二人で、いろ／＼な、あだいやらしい事をいうて、抱かれて寝るか言ふ事聞かかど、いはれて怖さ恐ろしさ、いろ／＼にわび言しても、こはい目ばかり致しまして、聞き入れのない無理非道、というて身を汚すくらゐなら、舌を喰つてなと果てませうと存じましたが、身を投げてさへ助かるものを、まだ命の盡きぬ事なら、どうぞして東へ下り、あなたのお顔をもう一度、見ましたうへで死にたいものと、思ふた心の通じましたか、その悪棍が、いふことをきかすば、遠い大磯へ賣りこかし、金にするとやら申

します故、とても運悪く死におくれ、悪者の手に捕へられては、おとつさんのところへ直ぐすなほには、返す事もありますまいし、どうで憂き目を見る位なら、大磯の郭は朝暮に、人の入りこむ處といへば、そこへ身を沈めたなら、あなたにめぐり逢はれうかと、はかない事を便りにして、御恩の深いおとつさんを、お見棄て申す心はなけれど、心一ツにせんかたなく、とう／＼この額依屋へ、歌妓に賣られて参りましたが、思ひもよらずたつた今、あなたにお目にかかりまして、あまりの事の嬉しさ、ものさへいはずに立ちましたは、私が前後の考へなく、不調法でござりますから、お許しなされて下さりまし。殊にあなたに逢ひたいばかりに、覺悟いたしてこの苦界へ、身を沈めは沈めました、今さらお目にかかりますと、まことに身の程が恥かしく、消えてなくなりたいうござります。どうで大切のおとつさんを捨て、道ならぬことに身を墮し、御苦勞かけてあなたには、御憎しみをうけたこの身、いつまでながらへ居られませう。どうぞこの世の思ひ出には、今までのお疑ひを、おはらしなされて下さりまし。トせつなるを、聞けばさすがに金五郎も、いつたん腹はたちけれども、かくまでわが身を深くおもうて、この泥水に身をしづめても、蓮に似たる心の潔白、苦勞さするも我ゆるか、不便のものやと心には、おもへど男の事なれば、そのまゝ、心もをれかねて、返事もせずに空睡り。小さんはりよつて、顔さ、「もしあなた、これほどまで申しますのに、お疑ひがはれませぬか。エ、エ、金五郎さ

んえ、どうぞ御堪忍あそばして、お心を直して下さりまし。もしお疑ひが晴れましたら、たつた一言いつものやうに、堪忍するとやさしいお詞、お聞かせなすつて下さりまし。よ、よ。」トちがねあら氣の、金五郎に取付きて、心づきて涙をばらひ、あたり見まはし金五郎の、側に置きたる指添を、音せぬやうに、そろりと抜くを、見るより金五郎ははねおきて、その手をしつか、金「コレ何をする、あぶねえわ。人おどしの刃物三味か。」ト見て涙ほろり、小三「エ、お情ないそのお言葉。女子だてらに人おどしの、こはい刃物が持たれませうか。そりやあんまりでござります。なんほあなたが男でも、お情ないおどうよくでござりませう。是れほど事をわけまして、お詫言を申しますに、たつた一言のおへんじもなく、しばらくお目にかゝらぬとて、そんなにマアわたくしが、憎くておいやになりましたか。そりやあなたでもござりませぬ。たとひ女夫のかためはせずとも、一旦あなたのお口から、戯談におつしやつたかは存じませぬが、行くすゑかけて女房にするの、二年や三年遠ざかつて、變る心はない事の、短氣を出さずに便りを待てのと、人ばつかりを嬉しがらせて、わづか半年あまりのあひだに、さうお心の變りますは、あんまり聞えぬあなたのお心、どうでそのやうにおきらひなされば、何を樂しみ今日が日から、むだに命をならへませう。わたくしがなきあとで、せめて一遍の御廻向をと、申した處がおいやの私、とてもそれも叶ひますまい。これもみんな約束事、いたし方もござりませ

ぬ。」トゆだんを見すましましたぬきかけ、金「はやまつた事して後悔するな。それ程に深く思つてゐるなら、生きながらへて後の世まで、人の物笑ひにならぬ様に、にごりの名をもす、ぎあけ、生きわかれた眞身の姉に、めぐりあうて名告りあひ、古郷に残したわが親父に、孝行せうとは思はぬか。殊にそなたの身のうへは、此家へ賣られて来たことゆゑ、わがものならぬ主人の體、なりや今こゝで死んで見ると、主人も難儀このおれも、のがれぬ中で難儀をするわ。死は一旦にしてなし易く、生はかたしといふところへ、心づかぬか、コレ小さん。」小三「エ、そんならあなたお疑ひが、晴れましたと申しますのか。そりや本當でござりますかえ。」金「ウンヨ、なに謹をつくものか。」小三「エ、嬉しうござります。それでちつと氣が落ち付きました。」トたがひに心はとけながら、金五郎も男のいち、いひつけて、唄妓幫間を呼びにやると、程なく皆々どやくと来る。目八「へい旦那、其の後は一別以來、とんと見参つかまつりませぬ。」金「ほんに目八公、さつき逢つたまんまだつけの。」目八「ホイ、さうでありましたつけか。」もく齋「大しくじり、目八公それぢやア、先刻以來といひてえのう。」おいしや「オヤ旦那、お歸んなすつたと存じましたら、またこの穴へお這入りなさいましたネ。オホ、。、。オヤ、小三さん、是れはおはやう。さぞおくれたびれなすつたらう。」トあいきつするに、小さんはけ、小三「アイ、やうやう今しまひましたヨ。まことに暑くつて、びつちより汗になりましたよ。」トかくに胸のどうきの

をさまらねば、さしう。もく蕪」ときにおいらんはまだ御入内がござえませぬね。モシ旦那、やつがれがちつむいてふさぎある。トいふに金五郎「ナアニ、足下の足を勞すまでもなしさ。ちつと見かけよと、救使に立ちませうか。」ト笑ひながら「た山があるから、おいらんの處へ救使もたてず御内意もしねえのよ。」おまわ「オヤ／＼旦那はおいらんに、かたい約束をなすつたぢやアありませんかえ。それにマアそんな事を。」金「ナニサ、今に様子がわかりせえすりやア、眞名鶴も呼びにやるのす。まア／＼そんな事は扱置きとして、諸事酒だ、唄へ唄へ。」トげいしやの長唄、

さうした黄菊としらぎくの、おなじつとめのその中に、外の客しゆは捨小船。

トうたひはやして賑はしく、しだいに銚子の數もかはれば、はやこくとくぜりのはやり唄、上がたうたで騒ぎ立つれど、とかく少三はうき／＼せず。目八は小三の肩をたゞき、目八「コレ女房ども、なぜマアそのよに鬱塞いでをる。ちと浮々しやいのう。イヨ成田屋ア。」小三「アレモウ嫌だヨ。おふさげでない。」目八「コレサなぜそんなに、ぴんしやんぴんするのだ。人目が多くて恥かしいか。さうかく。ハテさて初心な子ではあるぞ。おまへとわたしのその中は、知らねえものは、ネエもし旦那。」金「大きにサの。左右この子は男が嫌へださうで、なんほ馴染のねえおれでも、ちつとかそつとは何とか彼とか、のうおとわ。」モシ「さやうさねえ、今日はどうかおしださうで、まことにふさいでお出でなさるが、こりや

ア何か譯がありません。」トけどつた様子の口うらに、金「さうヨ、大かた色男が、俵つてるのをこつちへ呼んだで、それできつく鬱塞ぐだらう。どうで己が様なつべらほんは、女にやア縁遠いから、兄弟分になるつもりだ。ちひせえもんぢやア面倒だから、サア／＼是れへついでくんな。」ト大きな酒をつがせ、のみに懸る。「モシあなた、それではあんまり過ぎますぞえ。」金「なぜ、酒がすぎぢやアわるよと小三はおさへて、」小三「わるいと申すぢやござりませんが、あんまりあがるとお身の毒、わたしがすけてあげいのか。」小三「わるいと申すぢやござりませんが、あんまりあがるとお身の毒、わたしがすけてあげませう。是れもやつぱり勤めの一ツ、みなさん笑つておくんなさんなよ。」トほつとひといき、もく蕪「イヨ濱々、ありがたし。玉藻前の再來め。これらがほんの、よしこの／＼。」目八「モシ旦那、わたくしが目の悪いせゑか、小三さんはどうも、おいらんに似てるなさるぢやアござえませぬか。」トいはれて胸にぎつくり、金五郎「金「ナニ小三がカ、どれ／＼。」ト笑ひながら、小三の顔をさしのぞけば、小三はうれしさ恥かしさに、ほをかくす。金「ほんにのう、足下の目のせゑでもねえ、己にもさう見えるやつヨ。他人の空似とやらだ。のう小三。」トむねどき／＼。小三「どうでございますか、私なんぞが。」金「ア、なんだかひどく酔ひがまはつた。ゲエイ引。コウ小三、水を一杯もつて来てくんな。」トそのまゝそこへ三は下へおもく「旦那もし、モウたぬきでお逃げなさるネ。そりやア近ごろあなたでも御せえませぬ。モウ一ツ獻じませう。モシ旦那、およつちやアいけません。モシ旦那。これはしたり、モウおよつ

たさうな。」日八「そんならもうそろ／＼軍勢は、この陣を退かう。のうおとわさん。」おま「さうさねえ。」トいふところへ、小三は茶。小三「オヤ、だんなはおよつたかえ。」日八「さやうさ、あんまりあがりつづけだから、ちつとおよるがようござえやせう。そんなら小三さんおゆるりと。」もく「しかし旦那と小三さんとさしむかひぢやア、猫に鯉節泣く子に乳で、ちつとあぶねえものだテネ。」小三「オヤいやよ。わたしも今に下へ行くがネ。アノおとわさん、はかりながら、枕と搔卷をちよつと下へさういつておくんなさいな。」おま「アイ／＼合點でございますヨ。」トみなく。下。引きちがへて下女、かいまきと枕を持ち來り、下女「モシ枕をおさせ申しませうかえ。」トいふ時金。小三の膝をそつとつく。小三は心を呑み込んで、小三「ナニ私が今、お起し申して上げるから、そこへ置いていつておくれ。」下女「ハイかしこまりました。」ト枕をおいて、金五郎は目を開いて、あたり見廻しまくらを取つて又ねころび、金「七段目の由良といふ計畧だ。サアもつとこつちへよんな。」ト小三の手をと。小三「また誰か参りますよ。」金「なんのこつたな、そんな野暮な者が居るものか。但しはいやか、嬉しくねえか。」小三「あなたのお心がとけまして、嬉しい事はうれしいと、思ふにつけてまた一ツ、心が、りが出來ました。」金「そりやアマア何か。やつぱり誰にか義理だて歎。」小三「人の事より貴方のことさ。聞けば千年屋の眞名鶴さんと、深い中とおつしやること。眞名鶴さんは情を賣るが、勤めのならひに引きかへて、わ

たくしは又座敷ばかりの、はかない歌妓の身のうへ故、たとひどのやうな譯あつても、彈妓は抱への女郎衆には、勝たれぬが郭のならばし。それ故なま中お目にか、つても、今日より末はどのやうな、つらい愛目を見ませうか。知らねば知らぬで心はすめど、あなたと眞名鶴さんの譯もあれば、やつぱり焔をもやすたね。格氣は女子の嗜みなれど、流石女の淺はかに、よい貌ばかりしては居られず、どのよな事でああなたのお名まで、出るやうな事でもありませんかと、今からそれがさきだつ苦勞、思へば悲しうござります。」金「なんのこつたな、こりやアをかしい。そんな苦勞を今からすると、天井で鼠が笑ふによ。この郭の立だといつても、思ひ込んだが男の意氣地、郭の掟をやぶつて見せう。といふはまことの意氣張づく。だが眞名鶴とおれが中も、深い馴染であらうかと、一寸聞いても腹が立つ筈。牽頭歌妓もくはしい事は、互に顔に出さぬから、惚れて通ふと思つてゐれど、これにやア深い様子があるのヨ。といふ譯は外でもねえが、おめへが家出をした事を、知らせの状にがっかりして、この世に望みも絶えたから、ながらへて居ようとも思はなんだが、又よく／＼考へて見ると、實に死んだか壯健であるか、又は外に云ひかはした、男があつて逃げたのか、取りとめた事も分らぬのに、己ばかり心中立てるも、あんまり愚癡な穿鑿で、末代人の物笑ひ、殊に上方の親父をはじめ、此の地の養父や養母に、苦勞をかけるは大不孝と、心で心を取直しても、おめへの事が忘れられねえから、他

の女にや心もうつらず、一日々々と暮すうち、友達にさそはれて、いや／＼燈籠を見物に、来た日が丁度眞名鶴の、突き出しの日でとり／＼に、美しいと評判するゆゑ、もしや少しも似てゐるか、見れば迷ひかそなたにその儘、ハテ似た者もあるものと、客になつてよそながら、聞けばやつぱり都といふから、心ゆかしく懐かしく、初會の晩から打解けて、互に身の上明した處、似たのも道理、お鶴といつて、里にやられた六兵衛殿の、總領娘と聞いてびつくり、妹のお龜は斯う／＼と、話せばお鶴も共に驚き、泣きつかこちつ哀れな話で、一ツに寝るは扱おいて、妹のそなたに心中立て、帯紐とかぬさすかの氣性、おれとても又おめへの生死が、知れぬからとてその姉の、眞名鶴を抱いても寝られず、というて見捨てるも本意でねえから、妹のよしみに客になつて、末ながく力にならうと、約束をして通ふゆゑ、深い様子のある事を、誰一人知る者もなく、今日まで義理で遊びに來たのヨ。ところが今度額重で、かゝへの藝者の小三といふが、淺間の踊を踊るといふが、郭中での随一と、とりどりに評判するを、守多屋の二階で眞名鶴と共に、見ればそなたに違はねば、どういふ事でこの郭へ、遠路を隔てて來てゐるかと、不審に思へば辨問共が、男のために身を賣つたの、男と逃げたのなんの彼のと、いふを聞いてはこの胸が、はりさくばかりに腹が立つて、心の腐つた女の事、ふりむいて見るもいま／＼しいと、あきらめて見ても凡夫のこと故、やつぱり迷ふ心の愚癡から、なんでも實否を

糺したうへ、ともかくもしようと思つて、みんなに知らせず歸つたふりで、取つてかへしてこゝへ來て、見ればそなたに違ひはねえが、顔を見るより物をも云はずに、逃げるから猶腹が立つて、今の様にいつたのも、なんと無理ぢやアあるめえがの。かう心がとけるからは、眞名鶴を爰へ呼んで、姉妹の名のりをさせてやるぜ。」トきいて小三は大「エ、そんならアノ眞名鶴さんは、わたくしの姉さんでござりましたかえ。アノ姉さんで。」金「さうヨ、眞正銘のお前の姉よ。」小三「エ、そりやマア嬉しうござります。さうとは微塵もぞんじませんで、淺い女の心から、いろ／＼愚癡な恨みごとは、もつたいたないとも、恥かしいとも、又嬉しいもやま／＼なれど、なんの因果でこのやうに、姉妹ふたりが揃ひもそろつて、つらい勤めの流れの身、はかないなりで名のりあひ、つもるはなしのうき事も、亡き兩親が草葉のかけから、御聞きなすつたら、うかばれますまい。同じ勤めのその中でも、騙されしとは云ひながら、眞名鶴さんは親のため、苦界に沈むも恥でもない。それに引きかへわたくしは、いたづら事の心から、御恩の深いおとつさんを、都に残して此の勤め、我が身でわが身の愛想もこそもつき果てて恥かしい、面目もない身でござります。」金「なるほど夫れももつともだが、ハテ何事もみんな約束、どうするものか、仕方がねえわな。そんな事を苦にやまねえで、久しぶりだから浮き／＼して、ちつとにつこりして見せな。一體のろけるやうだが、眞名鶴とお前と、よく似てゐるが、なら

のとほり飲み込んだらうの。」十吉「オット合點承知之助、モシ今夜らはしつかりおあつたまんなせいまし。サアお二階へ。」ト案内に金五郎は、奥の小座しきへうちとほれば、娘分のおきく、茶煙草「オヤ金さん、よくいらつしやいました。お珍らしいものが澤山ふりましたねえ。」金「さうサ、それだから一ぱい寒い。」おきく「よくこのマアお寒いに、貴方もよつほど小三さんにやア御信仰でございますネ。」金「御推察の通りス。しかしおめへなんぞも容貌はよし、氣めへといひ、しん心をする男が多からう。」おきく「オヤよろしく申しておくんさい。なんの私のやうな者を、つめつてくれる人もございませぬヨ。」金「うまくいふぜ。しつほりと、しんねこではまぐりのお吸物をしめてる人が、のうお菊さん。」おきく「オホ、、、あんな、憎らしい事を、小三さんにいつつけますよ。」金「ハ、、、コウお菊さん、お前に献上しようと思つて、持つて来た物があつたつけ。」トふところから、本べつかふのく、おきく「オヤオヤおよしなさればよいに、毎度どうもお氣の毒さまで。」金「なんの、マアだまつて取つて置きなナ。お前のすきな、紀の國やのだから。」きく「誠に有り難うござります。ほんに眞菊がた、源之助のでござりますネ。どうも誠に風といひ、甲と云ひ、いつそ、好いた形でござりますヨ。」金「コウとき、小三は都合は能いのかの。どござ、座敷へ出てゐるのかえ。」きく「イ、エ、なんでござりますヨ、方々から口がか、りましたが、なんだか氣色が悪いとやらで、みんなお座敷を斷つて、引きこんでる

なさいますよ。」金「さうか、どうしたの。又れいの癩だらう。」きく「ナニ癩ではありますまいが、大かた此の雪に、あたんなすつたので、ありませう。小三さんの氣色のわるいは、おまへさんの、お薬が、いつち、よききますから、早く知らせて参りませう。」金「何のかんのと、嬉しがらせるのか。おめへもよつほどさるものだよ。」ト煙管でしりをち、きく「オホ、、、有りがたうござります。」トおきくは立つて下へ行く。程な梯子をあがつて出で来るすがたは、何かなやましげに顔色さへも常ならず、あらひ髪なる島田髷、鬢のおくれ毛寝みだれしを、黄楊の小櫛にかきあけつ、重き顔にもにつこりと、笑ひを含むあいきやうは、俗に所謂のち取り、男ごろしといふべけれ。金五郎は、行火へあたり、寝ころびてゐる側へ、小三はよりそひ、さしうつむくを、差覗き、金「どうした、ひどくふさぐのう。雪の寒さにあつたか、風でも引きアしねえかの。」小三「風もちつとは引きましたが、そればかりではありません。」金「フウ、夫れぢやアいつもの持病の癩か。」小三「持病や酒の二日酔なら、ふさいでもあなたの顔、見れば直るは常の事、そんなことではござりませぬ。」金「ハテおつなことをいふもんだの。さうしてマアどういふことだ。」小三「なんだかいつそ苦になつて、人にも言はれぬ心の苦勞。」金「ナニ、人にはれぬ苦勞が出来た。ハテナ、ハ、ア、それぢやア大かた、なじみの客が身うけをするといふ事か。」小三「なんのマア、そんなことが。アノなんでござります。」金「なんだとは。」

小三「アノ、是れでございます。」トはらへゆびをさして恥か 金「ハ、アそんなら、とまつたのか。アノ夜食のかたまりが出来たといふのか。」小三「ハイ、それだからモウ、まことに苦勞でなりません。」金「なんの事かと思つたに、どうでかういふなかだもの、子の出来るのは覺悟のうへ、なにも苦にする事はねえ。さうしてとまつたのは、いつからだ。」小三「モウ三月程になりますヨ。」金「そりやア大そうはやかつたの。しかし身重になるからは、いつまで勤めもなるめえから、追付け春になつたらどうなりと、重兵衛に懸け合つて、つがふして勤めをひかせるから、必ずあんじることにはねえヨ。マア、何はともかくも、實をむすぶ目出たいことだ。心祝ひにこれからわつさり、みんなをよんで酒とせう。」小三「とは言ふものこのれからは、一ばいあなたに御苦勞を、かけませうかとそれが今から。」金「苦勞になるとは金ばかりの苦勞、つまらぬ事を案じ立てして、煩つてくれちやア、いかねえゼ。サア、酒だ。」トこれよりいつもの幫間藝者、大ぜいあけて大騒ぎ、酒筵にときをやうつしけん。

小さん 假名文章娘節用前編下卷 終

娘節用二編敘

いろは引の節用集は、日用の御重寶にて、士農工商が朝暮の、引書、乾坤時候草木器財、何でも選採十三門、部分に四聲の畫引入らず、和かひのが當世と、おもひついたりたる假名まじり、娘節用とこじつけしを、俗でいいとか實意だとか、茶かして稱める看的の、洒落を版元實と心得、二編は今些色氣澤山、戀といふ字の趣意を、穿てくの立催促、初編の縁にひかされて、いやといはれぬ義理と犢鼻褌、書かれぬものは新趣向、變らぬ口舌の魂膽も、おもしろ狸の腹合はせ、帯の心實解き盡せし、小三金五郎が偕老の、その約言のひそくと、枕に残る仇言は、こんなものでもあらうかと、書肆の携せし稿本へ、ちよつぴり加へた補書の、序に朱墨を摺り流して、口繪の前を汚すといふ。

江戸 三文舍主人戲題

小さん 金五郎 假名文章娘節用後編上卷

江戸曲山人補綴

第四回

こゝに又、千歳屋の眞名鶴は、妹の小さんに名のりあひてより、力になりつなられつして、いとむつましく萬の事を語りひて暮せしが、かねてつき出しの時分より、さる有徳の商賈の、隠居が深くなじみ來つ、何くれとなく深切に、よく世話をなしたりしが、其の年の暮眞名鶴は、かの隠居に請け出され、向島の邊に樂々と、世をおくる身となりける。されば月日の過つこと速かにて、明くる二月のころには、小さんははや五月になりしかば、座敷へ出れば夜も更ける、又は無理なる酒も呑む故、身のためにあしかるべしと、金五郎は額依屋のあるじにかけ合ひ、ちとの手付の金を遣はして、近きうちには請け出す程に、夜の座敷へ出さぬやうにと、たのみにあるじ重兵衛も、さすがはするな男ゆゑ、早速に承知して、いと深切にいたはりけり。かくて金五郎は、小さんを身請の金と、のへんと、

さまざまに思案したりしが、もとより大金の事なれば、養父文次郎へ、うち明けていふべきやうもなかりし故、いかにやせんと左や右に、ひとり胸のみ苦しめしが、やう／＼に思案をめぐらして、京師の父文之丞かたへ、ひそかに言ひ送りけるは、この程三條の小鍛冶宗近の銘作にて、大小の拂ひものあり、殊に焼刃世にすぐれし、わざものにて其の價は、一包との事なるが、もとより兩刀は武士のたしなみ、何とぞ是れを手に入れたきまゝ、内々にて右の金子、御かし被下候やうにと、ひたすらに懇望の文面のゑ、文之丞もいと秘藏なる、一人の子の望みなれば、いつはりなりとは露しらす、まことと思へばわが子ながら、よき心がけ未頼もしく、本家を繼げども、兩親のあるゆる萬事身まゝにもならで、心に任せぬがち、さこそあらんと子を思ふ、なさけある親心に、故なく百金の金をとゝのへ、爲替にて、ひそかに金五郎のかたへ送りけり。扱も金五郎はけいしやの小さんが、唯ならぬ身となりしより、猶さらに可愛さいやまし、はやく勤めをひかせんと、思へど身請の金とゝのはねば、是非なくみやこの父のかたへ、刀もとむる金なりとて、いつはりて書状を送りしかど、かの地で金とゝのふや、それさへ恃にならざれば、とにかくに心安からず、みやこの便りを俟つうちに、しだい／＼に月かさなりて、小さんははやこの月が臨月になりしかば、額依屋の重兵衛夫婦も、深切なる心から、慾をはなれて、小さんをいたはり、殊に金五郎の親もとも、豊かなること知るゆゑに、手付の金を取り

しのみにて、残りの金はうけ取らねど、さらに危むこともなく、産の手當を何くれと、のこる方なくまめだちて、安産をこそ祈りける。金五郎はかくまでも、額重夫婦の深切の、ひとかたならねば少しもはやく、身請の金を渡したく、思へどそれも自由ならず、ひとり胸をぞ苦しめける。はや月みちて小さんは、玉のやうなる男子を産みしかば、金五郎はさらなり、額重夫婦も、喜ぶこと大方ならず、その名を金之助と名づけしが、兩親に似て美しければ、金五郎は日ごろにまして、小三金之助の愛にひかされ、とかくそは／＼氣もおちつかず、内に居ることはまれにして、額重へのみ行くものから、白翁は總領の、文之丞が不身持にて、大かたならぬ苦勞をしつれば、秘藏孫の金五郎、いたづら者になりもやせんかと、はらく／＼思ひるたりしに、近きころは外を内、内を外と居つかぬも、はじめの程は若ものの、ならひとさのみ咎めせず、打捨てておきけるに、漸々につのるゆゑ、かくては身の爲悪しかるべしと、思うてある日わが居間に、孫娘のお雪に琴を弾かせ、煙草くゆらし聞きるたるが、おゆきをむかひて「コリヤお雪よ、モウ琴もよいにしやれ。この頃は太ふん上達したが、するぶん身にしみてならうたがよい。わしもおのしが琴をきいて、大きにうさをはらしました。年がよるとおつなもので、外に何も楽しみがないから、お念佛でも申したり、おのしが琴や三味線を聞くのが、何よりよい慰みぢや。イヤそれはさうと、アノ金五郎は内にあるのかの。」ト問はれてお雪は琴のつめを「ハイお

兄さんは、お部屋にお出であそばしました。なんぞ御用でござりますか。」白オ、さしたる用もなければ、私が今茶を入れるから、ちと話しに來いと呼んで來やれ。」ゆき「ハイ／＼かしこまりました。お呼び申して参りませう。」ト琴をかたよせ出でて行く。引きちがへて、「オ、金五郎か。サア／＼もつとこつちへ來て、茶が出來たからひとつ呑みやれ。茶菓子はさいはひ御前から頂戴したのをとつてある。」トいつにかはらぬまめ／＼しきりに、金五郎も、白、コレ金五郎、おぬしも今が血氣のさかり、老人のいふことは茶を飲みつゝよもやまのはなしのついで、面白うあるまいが、マアよう聞きやれ。おつなもので、子を思ふは親の常で、貴い賤しいの差別はないうてよこしたも、やつぱりおぬしを案じるゆゑ、氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親、又兄弟とても外にはなし、もちろん文之丞始めおぬしまでも、隠してはるるなれど、お龜とやらいふ容貌よき娘を、親知らずに貰うて育てあげ、互に兄弟のやうにして、憎からぬ中であつたとやら。そのお龜でも側になるたら、またまぎれにもならうけれど、それとても行方知れず、生死の程もわからぬと、サ、ちらりとおりや聞いたぞや、何をいうてもこちらのお雪は、まだ一向の子どもなり、内にゐても面白くあるまいが、今では文之丞もおぬしをば、こちらへ貰ひうけてからは、お龜も居ぬゆゑ楽しみに、思ふはコレ、そちばかりぢやから、わるい耳を聞かせぬやうに、せにやなら

ぬが若いうちは、利發な者でも些とつ、は、身にあやまりの出來るもの。もつともはや遊びなどは、めん／＼の得手勝手ゆゑ、暑さ寒さも何とも思ふまいが、また内ではさうはない。アこの寒いに出てゆきをつたが、風でもひきそへねばよいが。夜が更けてかへらねば、寝てゐてもろく／＼ねられず、人の足音のするたび／＼に、歸つたか／＼、門をしめたで這入られぬのかと、引立耳をして聽いてゐるぞや。するぶん折節は付きあひなどで、遊びにも行くがよしサ。若いうちの事なれば、なんでもするなでは無いけれど、此の頃はあまりに嵩じたぞや。それがつのと、はて／＼は、モウどうなつてもまゝの川と、身の納まりもつかぬやうに、なるものだからたま／＼は、内にゐてみんなの氣も、ちつとは休めるやうにしやれ。このくらゐな事はいはずとも、承知してゐるであらうが、募らぬやうにしたがよい。」トる丸あたまた、撫でつゝことばはらかなき意見に金五郎は一言半句の、かへす言葉もなかりしが、金だん／＼の御意見心魂に徹しまして、申し上げることばも御座りません。これまで種々に御苦勞を、かけましたは、重々身のあやまり、お許しなされてくださりまし。」トあやまり入りたるをりかで來ゆき「モシ、おあにいさまへ、アノ上方からお使がまゐりましたヨ。」ト聞くより金五郎は俟ちかねたる、たよりにとびたつ嬉しさを、知られじと胸におしかくし、金「ナニ上がたから人が來たかえ。」ト聞き耳たて、「オ、なんぢや。上がたから便りがあるか。今も今とてうはさをした處、早う金五郎行つ

て見やれ。」トすむる。金五郎はいそ／＼として玄關に立ち出で、使に逢うて状うけ取り、ひらきて見れば、刀をもとむる金一包は、使の者に、持たせつかはし候へば、あらためてうけ取り申すべしと、こま／＼といひ送りつ、猶其の書狀の封じの奥より、隠居白翁への書簡も出でしかば、その状は白翁のところへ差出し、かの一封の金をうけ取り、おのが部屋に入りて返書をした、め、使の者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかば、飛びたつばかりに喜びて、すぐに懐中し、立ち出でんとし、中の間をみれば、お雪は一人一心に、人形の著物を縫ひ居るすがたは、今年十四になりけれど、よろづ内端にしてあどけなく、容貌かたちも美しく、心だてさへ優しけれど、小さんに比べては劣るなるべし。金「コウお雪坊、それはこのあひだの人形に、著せる著物か。」ト問はれておゆき「ハイ、あなたに頂きました、人形のでござります。」金「それはいいがの、おれは今出て行くから、おちいさんやおつかさんがお聞きなすつたら、今仲間から呼びに来て、参りましたと、いい子だからさういつてくんよ。」トいへばお雪は「ハイ／＼、かしこまりました。」金「なぜそんなに笑ふのだ。」ゆき「それでもお仲間へお出であそばしたと申しましたも、おかへりがお遅いと、うそだとお思ひ遊ばしませう。」金「なにさ、あとでは又どうでも、言ひやうがあるからいいわな。案じずにさういひなよ。」ゆき「ハイ、さやうならお早く、お歸り遊ばしませう。」ト引うは「おちやうさん、何を遊ば

します。」ゆき「これかえ、これは此のあひだおあにいさんに、いたゞいた、人形の著物だよ。」うは「もういいかげんに、ね、様いぢりも遊ばしませう。いつまでもそのやうに、ね、様ばかりかはいがつて、どうしたものでござります。今に若旦那さまの奥さまに、おなりあそばすお年でから。」ゆき「オヤ、乳母はいやな事をお云ひだよ。あれはおあにいさんだものを、そんな事はなりません。さうしてもう何處にか、奥さまがお出でだよ。」うは「それだからあのやうに、お内にとては片時も、お出であそばす空はなく、それといふもおまへさまが、もうちつとおとならしく遊ばせばよいに、ほんのね、さまで、若旦那の女狂ひを遊ばすを、知らぬ顔でお出で遊ばすから、私 はもうじれつたくつてなりません。」ト云はれてお雪は氣の毒さうに顔をあかめて猶あばひ、ゆき「それでもアノおあにいさんは、おちいさんや皆さんに、まことにお心づかひを遊ばすから、おかはいさうだものを、ちつとは御保養のお遊びをあそばしてもよいではないかえ。」うは「それは又知れた事。あなたはお家のお娘さま、若旦那さまはお血すぢでも、御養子でござりますもの、お心づかひも遊ばす筈を。」トお主思ひの岡焼もち、におゆきは笑ひな「オヤ／＼、そんな事をいふと叱られるよ。上がった伯父さんの、まことのお宿は爰だから、おとつさんよりお兄さんが、大切だつね／＼から、おつかさんがおつしやつたよ。」ト子ども心にも金五郎を、大事にするぞいぢらしし。さても金五郎は、件の金をたづさへて、飛ぶが如くに額俵屋へ

至りて、あるじ重兵衛に逢うて、小さんの身の代をわたして、これまでひとかたならず、世話になりしを厚く報い、夫れよりたち青柳橋のほとりなる、糸川といふ、料理屋の裏に家を求め、造作までも綺麗にして、この家に小さん金之助をひきとり、乳母をか、へ婢女をおきて住まはせけるに、小さんは故なく、産後すらく肥立つものから、小さんはつくく行くすゑを、考へ見れば金五郎も、養子の身にて、この身をはじめ、金之助や乳母下女まで、はぐ、まんこと大ていならず、所詮わが身はおちぶれて、一旦郭の藝者して、人にも顔を見知られたれば、今さら斯うして暮すとも、誰知らぬものもなければ、女の手業にはかくしき事も出来ねば、またもとの藝者となれば馴れし事のゑ、さのみに氣ほねもをれぬわざ、三筋の絲の世わたりも、藝は身を助くると、たとへのふしも金五郎が、せめては心やすめなりと、思へば金五郎へ我が胸を、うちあけてものがたれば、今更一旦うけ出せし小さんをふたゝび客へ出さんは、人の思はく世のそしりも、口惜しくは思へども、萬事に任せぬのゑ、詮方なくて承け引きければ、小三は是れより又もとの、かへり花さく唄妓となりて、客の相手に出でしかば、容貌もすぐれ、座もちなれば、引く手あまたにいよ／＼はやり、内に居る間はなかりけり。頃しも霜月の末つかた、小さんは金之助をかき抱き、その身もこたつへ横になり、出もせぬ乳をふくませて、ねんころ／＼と鼻唄を、うたうて寝かしつけてゐる。そのかたはらに乳母のおち、は、

火鉢に煮花をこしらへながら、金之助の頭巾を縫つてゐる。かかるところへ金五郎は、しゃうじをあけ「オヤ入らつしやいましたか、さぞお寒うござりましたらう。」金「さうよ、なんだかひどく冷えるのう。ばうずめは又ひる寝か。」トいひながらはお、火燵へあたりて寝ころべば、小さんは片手にて煙草をすひつけ、金五郎に出しな小三もしおまへさんエ、アノ郭から、最中のもらつたのがありますが、アノお雪さんにあけましては悪うございますかえ。」金「ナニ悪くもねえが、あんな大きな者にやるよりは、取つておいて坊にやるがいい。」小三「それでもこの子には、あんまり甘くつて悪うございます。ほんに甘露梅もありましたから一緒にして、おぢいさんの處へでもあけませうか。」金「ばかアいひねえ。石部金吉鐵かぶといふ堅い内へ、花街から貰つた物が出されるものかな。」トいはれて小三「オホ、、、ほんにさうでありましたね。それはさうとアノ、お雪さんは、さぞお美しくおなりなさいましたらうね。」金「さうさ、まんざらではねえけれど、まだ一向のね、さまざまなり、どこかの人と比べては、とても及ばねえ論なしよ。」トゆびの先で小さんの顔をちよい、「またそんな憎らしい事を。それでもモウ女といふものは、子持になると色氣もなくなり、つまらぬものでありますねえ。」金「違へねえ。色氣がなくつても、汁氣があれば澤山だ。のうば、ア。」ト聲をかくれば、うは「オホ、、、ほんに左様でございます。私の様になつてはいけません、御新造さんなどはこれからが肝心でございます。」小「オ

ヤイヤよ。それでもおつなもので、子供にかまけると、いくぢなくぢ、むさくつて、わが身ながら婆アじみたと思ふやうだよ。それだから座敷へ出て、お客がみんなわたしの事を、子もち山姥だなんのといふから、わたしもそれをやつぱり通して、かういふ唄をうたつてやるよ。

わかい時は二度はない、有頂天までのほりつめて、親に苦勞をかけるはばかよ。子をもつて知る親の恩ほど深いものはないわいな。

たとへ金銀で、富士の山つむとも、子にや易へられぬ。ほんに世の中に、子ほどかはゆいものはない。

と唄ふゆる、中にはむねきなお客は、てめへのやうな者にやア、ろくな子は出来やアしめえ。子といふものは尻をひつても、できるのなんと、ぢらす人があるから、わたしもまたまけぬ氣で、味噌をあけるぢやアないけれど、かはいいと大骨を折つて拵へた子だから、出来合ひの子とはちつと違ひますといひますから、色氣がなくつていいといつて、呼んでくださるからをかしいのサ。」金「へんとんだからくりの云ひたてだ。ほんに此の頃ぢやア、めつさう口が達者になつたよ。道理で己も言ひまくられる。」トむ故、金之助は顔をしかめながら目をさます。小三「アレまたそんな悪戯ばかり。とう／＼起して、おしまひなすつた。せつかくよく寐かしわけましたものを。」金「いいわな、あんまりひる寢

をすると、夜になつて目をさますから、やかましくつて、寐られねえ。」小三「おまへさんではあるまいし。」金「ナゼ／＼。」小三「なせもよくできました。あなたはいつでも午時までづゝおよつてはお起きなすつて、宵ッぱりをなさるものを。」金「ナンノ、むりに起しても、もう寐あきた時分だから、アレ機嫌のいい事を見な。己が顔を見ちやア、に／＼笑ふぜ。いい子かく、いい坊ぢやんだぞ。」ト金之助の顔を撫「こりや、おつかアのやうに、うは氣になつちやアいかねえぞ。」小三「オヤ、けしからねえ。私より貴方に似たら、親に世話ばかりやかせませう。」トろのかたを向いて、「お竹や、何をしてゐるか。坊が起きたから、ちつと抱いておくれよ。」下女「ハイ／＼。サア／＼坊さんお出でなさいまし。アノお乳母どん、わたしやア今お坊さんをつれ申して、惠迎院へ行つて遊ばせ申すから、アノ齒入屋が來たら、ながしの下駄の齒を入れさせておくんないよ。」うは「アイ／＼。夫れはいいが、お泣きなすつたら早くお歸りよ。お怪我をさせ申さねえ様におしよ。」下女「アイ。そんなら行つて参りませう。」トお竹とへ出でて行く。ひき違へて女かみゆ。小三「オヤおたほさん、丁度よい閒だよ。サアおあがり。坊を今あそび、洗ひがみのおたほが來るを見て、小三「オヤおたほさん、丁度よい閒だよ。サアおあがり。坊を今あそびに出したから、この間にちよつと結つておくれな。」たほ「それは丁度ようございますね。オヤ、旦那お出でなさいまし。この間は閒ちがひまして、さつぱりお目にかゝりません。」金「ほんにサウサ。なんだか急に寒くなつたね。モウこんな火燵と首つびきをする様になつちやアいけねえのサ。」たほ「オ

やおまへさん、そんなことをおつしやるが、こたつといふものは能いもので、些の間のたのしみがありますよ。ねえ小三さん。」小三「なんだねおたほさん、おつなことをお云ひでない、人の鼻をこするやうな。私らアそんな事はきらひサ。」金「コウおたほさん、お前も餘程好物家だね。成程鳥渡いちやくには、まんざら悪くねえやつさ。冬の……は火燵で出来るやつがいくらもあるものさ。」小三「もし、をかしくもない、そんなはなしはもうおよしなさい、氣障でありますわね。サアおたほさん、今に煮花ができるから、その中結つておくれなねえ。」ト三の髪をゆひながら、小三「小三さん、昨日はアノ、どこへお出でなすつたえ。」小三「きのふかえ、昨日は舟で酉の町へ行つたわね。夫れだからいつもより髪がだいなしになつたのサ。」金「ナニ、昨日は舟へ行つたから髪がこはれたと。そいつはちと怪しい。」おたほ「オヤ、且那が何かおつしやるよ。」小三「又おやきがはじまりさ。珍らしくもございません。」金「これがやけねえでどうするものか。番人のねえ生簀だもの、どんな人が釣るか、知れやアしねえ。」小三「オヤ、とんだ寃をうけるもんだ。たとひどんな釣人があつて、餌をどんくまけばとて、曲つた針にやアかゝりませんよ。憚りながらわたくしは。」金「ヘン、とんだ所で力むやつよ。あかえが芝居をするやうに。」トからかつてゐるうち、小三「ばアやア、お茶はまだ出来ぬかえ。」うは「ハイ、やうくできました。」小三「そんなら一ツあけよう。」ト金五郎のはつほをとりて、たほ「是れははかりさま。モウおかま

ひなさいますな。ほんに旦那え、このごろに顔みせはどうでござります。」金「わたしも此の間からさう言つてゐるのサ。小三も見てえといふから、一緒にお出でな、四五日のうちに。」たほ「それはありがたうございます。楽しみにいたして居りますよ。」トわかいもの入り來り、「モシ小三さんえ、このぢうのお留守居衆が、夕方行くから口をかけて置いてくれろ、といつてめゑりましたよ。」小三「オヤさうかえ。けふはお店の衆のやくそくもあるが、こつちは夜が更けるから斷つて、おまへの方へ參らうよ。」わかいもの「そんならのちほど、御案内を致しませう。」トわかいものはたほ「どれ、わたくしも參りませう。さやうなら小三さん、又明日。」トあいさつして、髪ひおたほは歸りけり。

小さん 假名文章娘節用後編中巻
金五郎

江戸 曲 山 人 補 綴

第五回

小三は桑川より口がか、りし故、鏡臺取り出し身じまひの、紅粉おしろいも深くはせず、ちよつと化粧ひて櫛笄、前さし一本うしろへは、銀の細打ばかりさして、いきな粧飾のいやみなし。金五郎は手枕して、火燵にあたり寐いりし様子に、小さんは戸棚よりかいまきを出しそつとかけて、枕をあてがひ、そこらをかたづけ金五郎の、羽織をた、んで戸棚へしまひ、火鉢のそばへすわり、煙草を一ぶくのみ、そばにある淨るり本を手にとりあけ、讀みながら乳母とはなし、小三「コウばアやよ、こんな事を言つたらまた、つまらぬ事と笑ふだらうがの、水のながれと人の行末程、定めないものはないよ。この淨るり本の三勝を見るやうなわたしの身のうへ、よく似てゐるが若しひよつと、浮世の義理にからめられ、どんな別れにならうも知れず。マアさうなつたらどうしようと、外に苦勞はないけれ

ど、そればかりが案じられて、人の知らぬ胸をいためるよ。」ト身行末をくりかへし、ほろりとおとすうは「アレ、またしてもく、そんな役にも立たぬ事を、おつしやるものではござりません。その三かつの身のうへは、それはほんの戯作もの、今時縁切だのなんのかのと、芝居かしやれ本ではあるまいし、どうしてそんな事がありますものか。たはいもない事ばかり。」ト「いひまぎらせど共涙、小「ほんにさう言へばそんなもの、作り物とは知りつ、も、身につまされて線言いふも、やつぱり女の淺はかゆる。金坊といふ子まであるものを、御本妻にはならねずとも、末のするまで添ひとけようと、思はないでなんとせう。もしもの事があつたらば、それはまたその時のこと。もうく案じまい。」ト「はなしなかばへ桑川より、「夫れならばアやア、行つて来るから氣をつけておくれよ。」ト「出が、ほんにアノ坊が歸つて、私が居なかつたら、又おとつさんをいびるだらうから、アノ、蠅帳にうづら焼があるから、あれをやつてだましておくれ。わたしが又かへりに、何ぞお土産を買つて来るから。そして若旦那がお目がさめたら、大方お茶漬を上らうから、鍋焼でも取つてあけておくれ。」ト「萬事に氣くばり房かたぎぞあはれける。かくまで夫やわが子をば、大事にかける心から、座しきへ出てもとにかくに、内の事のみ案じらるれど、勤めといふ字は是非なくも、いやな客にも機けんとなる、心の中ぞつらからめ。かくて小さん金五郎は、たゞ金之助の愛におほれ、他事なく暮すその年も、くれて又来る春がすみ、たなび

く空もうらゝかな、彌生なかばの事なるが、金五郎は仲間の者にさそはれて、向が岡の花見もどりのほろ酔に、みなく舟にうちのりて、青柳橋まで来りしが、こゝより上りて金五郎は、人々にわかれて、可助といふ供の男を引きつれて、衆川の前來れば、乳母は金之助をいだきつゝ、かくと見るよりの遠くから、うは「オヤ／＼おばうさん、アレ、お父さんが入らつしやいましたよ。」金「オ、坊か、ばアにだつこしていいのう。おつかアは内にかえ。」うは「ハイ、お宿でござります。サアおばうさん、おとつさんにおじぎはえ。へい御嫌けんようと。オホ、イエ／＼、おとつさんにだつこはなりません。もうまつくになりますから、お寝んねがようござります。」金「金坊や、おとつさんはおつかさんのとこへ行つてお乳をのむよ。あばく／＼だよ。」トは顔を見て、「おとつちやん、いや／＼。おつかちゃん、いや／＼。」うは「オ、さやう／＼、おつかさんのお乳はお坊さんの。お父さんではござりませんねえ。お父さんは御きけん故、おじらしなすつていけません。」金「ハ、ハ、ハ、坊やのばかやばかや。」トからかひながら内へゆ、今座敷より歸りしまゝ、三味線管によりかゝり、物思はしけなる顔つきに、金五郎は「小さん、どうぞしたのか、おつな顔をしてるのう。」トいはれてにつこ、小三「い、え、どうもいたしません、今座敷から歸りましたのサ。そしてあなたは、どこのお歸りでござりますえ。」金「ナニ己か、拙者めは今日仲間者の付きあひにて、よんどころなく向島へ御遊覽と出かけ

て、鯛七へおしかけた處が、女子どもが大勢出て、ソレお手をとれ足を取れと、めつたむしやうにそやしたて、それからなんでも大ざかもり、さいつおさへつ唄へや弾けや、

じれて迷うて、まようてじれて、くぜつも癡話も屏風の外へ、はうり出したる一ツ夜著。

はやしつさおせ／＼堀までつける。あとは野となれ山となれ。牀とつたら寢てかへる。雨ふつたら居つゞけた。などと唄ふからたまらぬて。」小三「道理こそ、マアきつい御機嫌。それはさうと、あなたは京を御立ちの時、おとつさんのおつしやつた事を、覚えて御出で遊ばしますかえ。」金「是れはまた改まつたお尋ね、親父の教へを守ればこそ、外の女に目もふらず、たつた一人を守つてゐるから、何もハヤお案じなさる事はござなく候サ。」小三「オホ、ハ、ハ、その思召しなら嬉しいけれど、今では日かけのこの身ゆゑ、おちいさんや皆さんが、このやうな事とは御存じなく、只あなたがわがまゝで、放蕩を遊ばす事と、思召すでござりませうから、お宿のお首尾がおだいじゆゑ、あんまり御酒をあがりますと、あなたのお爲になりますまいかと、それが苦勞でなりません。」ト思ひにあまるし、心に憎しと思はねど、一杯きけんの金五郎「ア、百も承知二百もがつてん、お爲ごかしのその意見、聞きたくもねえ、耳がけられる。酒をあんまりあがりますと、あなたのお爲になりますまいッ。へん酒を呑まうがのむめえが、己が口だから勝手だによ。大きにお世話お茶でもあがれッ。そんな理くつらしい意見

をいふのは、おほかた外におつりきな、面白きはなしでもあるからだらう。」小三「オヤ、久しいものでありますよ。」金「ナニ、久しいなじみがあると。それだからなんのかのといつて、早く歸さうと思ふのだな。よし／＼、そんなに邪魔になるなら、歸つてやらう、とめるな。」ト「じれるかんしやくはひふきたり。小三はいつもの事と思へ。」お腹が立つならどうでもなさい。たま／＼はお早くお歸りなされるも、御ば、わざとそしらぬ顔をして、「お腹が立つならどうでもなさい。たま／＼はお早くお歸りなされるも、御孝行でござりませう。オヤ、何だか風が變つたやうだ。ア、雨が降らねばよいが。」トさからはぬゆゑ金五郎は、煙管をしまひ、金「ナニ、御孝行でござりませう。お香々でお茶づけが聞いてあきれらア。雨が降らうが降るめえが、歸るに四も五もいるものか。」トも酒のわざ、我儘氣ま、をいひちらし、じれつ、うちへ歸りけり。乳母はこの時金之助をつれて、歸りか、れど、金五郎が不機嫌ゆゑに、次の間にあそばせて居たりしが、やう／＼此方へ出で來り、うは「御新造さまえ、今日はおとつさまの御機けんが、お悪うございましたねえ。なんのお腹だちであのやうに、お怒りなすつたのでござりますえ。」トわらひながら、「ナニサ、いつでもあ、だわな。御酒をあがるとなんだの彼だのと、わたしに無理ばかりおつしやるのサ。たまには早くお歸し申さないと、あなたもいろ／＼譯あるお身ゆゑ、おやどの御首尾が大事だからさ。お内では心づかひもなされるだらうし、私にはわがま、の、いひどころだと思ひなすつて、いつでも／＼あの通り。それに此のごろでは日にまして、だん／＼御酒が上るから、

まことに苦勞でならないよ。わたしは何と云はれても、つねから御氣性を知つてゐる故、御酒をあがつて御きけんの時は、その氣でゐるからよいけれど、やつぱりお雪さんにもあの通りに、無理ばつかりおつしやるかと、陰ながらそれが案じられるよ。わたしも女の情だもの、いとしと思ふお方をば、つれなく言ひておかへし申すも、浮世の義理や二つには、お身のためを思ふゆゑ、心にもない事などを、いひ出すまでの胸の切なさ、するりやうして。」ト「涙ぐむ。うばもさこそうは「御尤もでござります。警へにもいふ通り、一ツ叶へば又二ツと、何をいうても任せぬ浮世、十分な事はござりませぬもの。いろ／＼御苦勞あそばすも、因縁とやらでござりませう。」ト「くめ川のれうりばんおもてより、「オイお竹殿、ちよつと爰をあけてくんな。」ト「下女「アイノ、佐介殿かえ。」ト「しやうじあければ、佐介はひろぶたへい。」ト「モシ旦那はどうなさいました。」ト「小三「オヤ佐介どん、旦那はもうお歸りだよ。」ト「佐介「ホイ、そいつは大しくじり。けふはなぜ早くお歸んなすつたネ。さつきお出でなすつたのを見とゞけたから、せつかく、くめん十めんして、旦那のお好きな一口ものを、仕込んで持つてめゑつたのに。」ト「小三「オヤ、さうかえ、それはマアよく忙がしいのに、氣をつけておくれだ。嬉しいネ。」ト「佐介「なんにしても旦那がお出でなさらねえぢやアはじまらねえ。そんなら此の鉢のものや何かは、旦那へのこゝろさしだから、置いて參りませう。」ト「看を置いて、さても金五郎は、酒がいはする癩癩の、腹立ち紛れとがもなき、小

三に辛くあたりちらして歸りしが、根もなきくぜつの事なれば、又あはねば氣になるゆゑ、四五日たちて晝すぐるころ、小三のもとへいたりしに、小三は留守にて乳母ばかり、針仕事をして、「オヤ若旦那さま、此のころはまことにくお遠々しうござります。」金「さうサ、此の間はちつと用が多くつて、さつぱり出られねえやつよ。」うは「アノ、あなたがいつそのあひだ、お腹をお立ち遊ばして、お歸りなすつたから御新造さまが、まことにお案じなすつてお出でなさります。」金「ハ、ハ、ハ、さうだつたかの。おれはさつぱり知らなんだ。アノ、今日はどこぞへ行つたか。」うは「ハイ、今日は鮫清に、なんとやらの會がござりました。」金「フウ、坊はどうした。」うは「お坊さんは今、お竹がどこへかおつれ申してまゐりました。」金「さうか。おれを忘れはしねえかのう。」うは「オヤ、とんだ事をおつしやいな。三日や四日お出でなさらぬとて、おわすれなさるものでございませうか。今朝なども、いつそおとつちやんくと、あなたの事をおつしやいました。」金「ハ、ア、子供といふものは、どうも憎くねえものだの。アノ、この間來たとき、ちつと頭にふき出がしたやうだつて、そんなに殖えもしねえかえ。」金「ハイ、お頭のでござりますかえ。そのやうに殖えもなさりません。それはさうと若旦那さまえ、こんな事は申すまでもござりませんが、御新造さまが明けても暮れても、あなたの事のみお案じなすつて、それはく御苦勞のやすまる間とはござりませんから、その御心根を思ひやつて、

あなたもどうぞ、あんまりお氣をおもませ遊ばさぬやうに、なすつて下さりまし。」金「イヤ、モウおれとても、憎しと思ふ小三ではなし、殊に子まで出來たのに、少しはおれの手だすけと、いやな座敷の勤めをするのは、なみ大ていの女などは、なか／＼及ばぬ心だと思へば、一日片時も勤めをさせる氣はねえが、足らはぬがちゆゑ是非もなく、苦勞をさせるが可愛さうだ。」ト「ほろりとおとす男泣き。折から糸川のわかいもの清介、料理ばん佐介入り來り、「へい旦那、このあひだは。」金「オイ清介に佐介公か。サアあがねえ。」兩人「へい御めんせえ。」ト「そばへ來り、清「もし旦那、此の間はねから入らつしやいませぬ。きついお見かぎり。又外に何か、おもしろい世界でも出來ましたか。」金「とんだ事をいふ。おもしろい世界どころか、いつも眞面目でさえねえやつよ。ちつと面白い世界へ、案内して貰ひてえのう。」清「是れはまた迷惑千萬。ハ、ハ、ハ、。」佐介「旦那、この間ネ、あなたがお出でなすつたのを見とゞけまして、ちよつぱり趣向してめゑりましたら、もうあとのお祭で、大きに鼻をあきましたのさ。」金「ハ、アさうだつたか。そいつア残念だつての。しかしその心意氣がありがてえ。そんなら今から初めよう。」ト「是れより、色々、大酒もりとなるまゝに、互にさいつおさへつして、いと賑はしくなりにけり。」金五郎はこの間の、金「なんと清公や佐介公なんぞは、いつもく忙がしいから、女の所へ行くひまはあるめえのう。」清「サア、そこがもし、おつなもので、是れでもするぶん女ゆゑ

にやア、相應に謀計もいたしますのサ。まづ女に逢はうといふ晩にやア、内を都合してはやくきりあけ、おたしなみの藏衣裳を引つかけの、親方の目をしのび足、こそくくとぬけがけの、逸足出して阿多氣へおしかけ、ろぢ四ツ限も目につけず、たきおこして上りの天神。サアそれから口説のこんたん、おもしろ狸の腹つゞみ。」トのりぢではなすへ、座敷をしまひ歸り来る、小さんのあとより箱まはしの仁介 三味せん箱を背負ひ、ちやうちんを片手に引つさけ、供をして来る。小三は上へあ、「仁介さん、大きに御苦勞。そんならまた明日来ておくれ。」ト 紙にはさみし金を出し、「サア是れで一つ呑んでお寝よ。」ト 渡せば箱まはし 仁介「へい、これは有り難うございます。さやうなら明日。へいお休みなさいまし。」ト 三味線箱 歸り行く。小三は金五郎のそばへすわり、小三「オヤ、よくお出でなすつて下さいました。此の間はなぜ、さつぱりお出でなさいませんえ。」ト 顔を見て嬉し 金「へん、あんまりよくも来ねえのよ。来るなといふから来ずに居れば、又恨むのか、呆れるのう。四五日おれが来なかつたら、煩くなくつて好かつたらう。あんまり邪魔にされるから、呼びによすまでふつつりとも、来めえと思つてあきらめて居たが、逢はすに行んではちやアなくつて、逢はすに居ると氣になるから、顔が見たさについとかく、やつぱり迷つて又こ、へ。」小三「オヤばからしい、なんでありませえ。清どんや佐介どんが聞いてるのに、そんな事を。」金「ハテ、人が聞いても大事ないの。コウ小三、こんな馬鹿にやア誰がしたらう。おれも生まれつき是れ程の、阿房ではなかつたつけのう。佐介公。楊貴妃や玉もの前の例もあるから、さのみ恥かしいとも思はねえの。」佐介「こりやア、旦那の御尤もだ。惚れでもりきむのは野暮の至りサ。小三さんはやつぱりおほこ氣がぬけませんね。」金「なんのく、おほこ處か、ほらが變じて古狸とはなりにけりだ。ア、化かされるくと、知りつ、やつぱり化かされるは、おれが一生のあやまりだ。」小三「オヤ、よろしく申しておくんさい。貴方こそわたしを、お化かしなすつたのでございます。」金「そりやア又なげだ。」小三「それでも、唄にもうたふ通り、心からとて古郷をはなれ、知らぬ此の地で苦勞するとは、よくわたしの身の上に、かなつた唄でございますよ。」

清介「モシ、ト小聲でうた。

苦勞するのおまはんをたより、それに邪見な事ばかり。

モシ旦那、小三さんの心は、此のうたの文句のとほりでございますよ。ねえ小三さん。一ツ心意氣が承りてえもんでござります。」小三「何だね、をかしくもない。娘子供ぢやアあるまいし、心意氣なんぞはいやだわね。」佐介「そんな事をお云ひなさらすと、ちよつと一ツおやんなせえ。ソレ、ど、いつどいく、なだべこ、ちやらく、どんぶり鉢アういたく。」金「ア、やかましい、何をいふのだ。」佐介「ハア、サアく小三さん、サア一ツ。」ト いはれて小三は詮かたなく、淋

うたなまじなま中ほれたが恨み、ほれざ苦勞もせまいもの。

清「ハ、妙だくくくく。」小三「モウ是れでかんにんしておくれ。」金「コウ、おつなものでの、おれも實は上がたぜえろくだが、都といへば聞えがいいが、上がたぜえろく、上がた猿といはれては、一句もねえのす。」佐介「その上がたにも、お前さんの様な通人がありやすから、東ツ子は一句も出ません。全體は旦那が悪いのさ。お前さんがあんまり程がいいから、やほなら斯うしたうき目はせまいと、小三さんがこれくで、氣がもめるでござえませう。」ト 小三「ひたひに角のは、金「そんな口説は昔の事よ。コウ、それよりやア清公、今の阿多氣の物語の二段目狂言を話さねえか。後學のために聞きてえのう。」清「ナニもう跡は話しますめえ。」金「なぞ。」清「小三様に叱られます。」小三「清どん何だえ、面白い話かえ。」清「なアに、わつちが色の戀話さ。」ト 云ふところへ「清介どん、佐介どん、お客があるよウ。」佐介「オイく、そいつは斯うしては居られねえ。」金「小三、そこにある紙入を清公にやつてくんな。そして此の一ツ提げは、佐介、貴公に譲つてやらう。」ト 二人に投 兩人「へい、是れは有り難うござります。」ト 戴きながら「出でて行く。金「ア、酔つたく、今日はどうしたか誠に酔つた。」ト その儘そこへ打臥して、小三「お竹や、もうこゝを片づけておくれよ。」下女「ハイく、もう宜しうございますかえ。」小三「ア、いいのさ。乳母や、今夜は若旦那は、よつ程あがつたかえ。」うは「い、え、そんなにお過し遊ばした様

子でもござりませんが、いつたい御酒がお弱いから。」小三「さうサ、全體あがりはなさらなんだが、近頃はよくあがるよ。」うは「さやうでござります。若旦那さまもお宿では、萬事思召すやうにもいかず、お心づかひも遊ばしますから、ちつとづ、御酒をあがらずば、お氣の晴れやうがござりますまい。ほんにお坊さんもよくおよつたから、若旦那のお牀をのべませうか。」小三「そんなら其の子を、わたしが抱いて居ようから、お牀をとつて上げておくれ。」ト 金之助を抱きあぐるにぞ、乳母はこの内、六疊の座しきへ、牀をとり夜著を出して、うは「モシ、若旦那さまえ、サアおよりました。」ト 小三「サア、おつかアも寝ねえか、坊イ。ア、いい心もちだぞ。」ト 立上りて上 下著ばかりになりて、入 金「サア、おつかアも寝ねえか、坊主はおれが抱いて寝よう。」小三「あなたが抱いておよつたら、それこそ潰しておしまひなさるだらう。」金「いいわな、潰しても己の子だから、だれも何ともいひ人はねえ。萬一おれが潰したら、又いいのをこしらへるわ。」ト 金之助の手を 小三「すきな事をおつしやるよ。アレ、およしなさい、そんなに引張ると目を覚めます。起しちやア悪うござります。」金「ナニ起しやアしねえ。ちよつと貸してくれ。」ト 小三「エ、よく寐る坊主だぞ。コレ、ちつと目をさまして遊ばねえか。こちよくくくく。」ト 小三「アレ、およしなさいと云ふのに。寐る先へ立つて起しちやアいけませんよ。」金「ハ、ハ、そんなら乳母の處へ行つて寐ろ。いま目をさまして泣き出すと、おつかアの邪魔になるさう

だ。ト寝たまゝうばの乳母は金之助をかき抱きて、次の間へ入りてうち臥しける。

小さん
金五郎
假名文章娘節用後編中卷 終

欠

欠

でも結ばう。」トひとつと引寄せ、いかなる事や契るらん。在斯程に、隠居白翁は、金五郎が日にまし放蕩募りて、家にとては居らざる故、養父文次郎はじめ家内のものに、一ばい氣がねを爲たりしが、お雪もはや、十五にもなりたれば、金五郎と婚姻を結ばんには、少しは足も止らんと、頻りに是れをす、めしかば、金五郎は心ならずも、婚禮はしつれども、お雪はまだ年もゆかず、殊に手のなきおほこ氣なれば、とにかく面白からぬ故、さまざまこしらへ騙しては、小さんが許へのみ通ふものから、早くも二とせばかり立てども、猶不身持の止まざりけり。隠居白翁は是れを愁へ、文次郎夫婦もお雪の仕かたの、悪しきゆゑに金五郎が、内に居つかぬと口にはいへど、心には眞實わが子の可愛さに、金五郎に愛想やつきん。我あるうちは善し悪しとも、金五郎の爲を思へども、いくほどもなく吾が齡はてにし後やいかならんと、老いの心を痛めつ、思ひ餘りて、手を廻し、小さんの名所聞きたし、心の中をさぐりしうへ、理を説きて縁切らせ、事に由らば金を出し、支度して何方へなりとも、片付けやらんと思案しつ、金五郎が當番にて、詰所へ出でて留守の日に、小三が許へぞ尋ね行きぬ。頃しも文月上旬、小三ははでな中形の、ゆかたに藤色の裏えりかけ、黒緇子の帶しどけなくしめ、洗ひ髪をうしろへさけ、縁側へ出て金之助の、腹かけを縫うて居たりける。折から表に人ありて、頼む頼むと案内を乞ふに、小三は「ハイ。」といらへつ、立ち出づれば、「卒爾ながら小三どのの、お宿は爰でこ

ざりまするかな。」小三「ハイ、その小三は私でございますが、あなたはつひに見なれぬお方、どちらからお出でなされました。」白翁「ハア、そんなら此方さまが小三どのか。わしはこなさまに、ちと内々話があつて、わざ／＼來ました。ゆるさつしやれ。」上へあがれば、小三「何はともあれそこは端ちか、マア／＼こちらへお通りなさいまし。」ト奥へ通せば座。白「授こなさまの名はかねてより、聞いては居れど逢ふは初めて。わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが、今日わざ／＼來ましたのも、外の事ではござらぬが、アノ、孫の金五郎めが事。イヤもう、見るかけもないあの様な者を、ようマア可愛がつてやつて下さる。眞身にとつては嬉しいとも、かたじけないとも、禮は詞に盡きませぬ、その深切な心を見込んで、ちと頼みたい事がござる。」ト聞くより小三は胸に釘、はつと心に當惑し、いかゞはせんと思ひしが、今さら驚く事にもあらず、かねての覺悟はこゝぞと思ひ、胸なでおろし氣をとり直し、茶煙草盆を出しつ、しとやかに手。小三「ほんにわたくしも、若旦那さまのお話にて、つねづねから、御噂を承りましたあなたの事、お目にかゝりますは始めてでございますけれど、眞身の親に訪はれた心、お嬉しうござります。ようマアお出で遊ばしました。」トいふかほつくづ白翁「イヤ、あまりよくも參らぬて。ア、物ごしといひ取りまはし、容貌まで高位の、奥方とても恥かしからぬ、人に勝れた生まれつき、いかなる人の身の果てか、見れば見る程美しい。ア、若い者の迷ふは尤もか

い。こなさんを内へ入れたなら、孫めが尻も落ちつくであらうけれど、上への聞え世間の思はく、義理と人目の詮かたなく、頼みといふは茲の事、知つてるかは知らねども、金五郎はわしがためには、總領むすこの一人孫、世が世であるなら、無理わがま、も爲次第だが、だん／＼深い様子があつて、あれが親は家出なし、其の弟が今での家督、その養子となりし金五郎、あかの他人といふではなけれど、養子と名のつく悲しさは、思ふに任せぬ世間の人目、家の娘のお雪といへるを、娶合はせねばならぬ故、金五郎もふしよう／＼、やうやく此のごろ婚禮しても、お雪はまだ子供同然で、面白くないから片時も、内に居つかぬはもつともかい。わしが孫でいふではないが、世間の人にほめられて、それ程の事わきまへぬやうな氣性でもなかつたが、今に夜どまりはなほ止まず、女房はほんのすもり同様。それは誰故こなさんゆるゑ、わしが命のあるうちは、内外の者もわしに免じて、金五郎が悪いとは言はねども、見らるゝ通りわしも老人、今をも知れぬ身のうへゆるゑ、我がなき後は金五郎の、身のためにならぬ事もあらうかと、案じ過せば夜の間も寐られず、苦勞で壽命も縮まるやうぢや。こんな事云うたら、鬼とも蛇とも、慈悲情のない心と思はつしやらうが、眞實あれが憎くもなれば、内の嫁のお雪の中に、子どもの一人も出来るまで、遠ざかつて貰ひたい。さすれば世間の思はくもよし、又子どもでも出來てからは、こなさんを内へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で、こなたを

内へ呼ぶときは、部屋住みの事ゆる世間へすます。こゝをとつくり合點して、暫しの内を辛抱して、思ひきつて見て下され。もしその内が待遠なら、こなさんの心に叶ふやうな、身の爲によい所を見たて、この爺が支度して、縁付けて進ませう。さうすりや此方の身も落ちつき、多くの人の機嫌きづまを攪るにも及ばず。せめてはわしが禮心、氣樂にして進ぜたい。」トものやはらかに事をわけのつびきならぬ義理づめの、頼みにいやとはいはれねば、いつそわが身の成行を、うち明けんとは思ひしが、今さら索性を明しなば、見さけられもし殊にまた、金五郎の爲悪しからんトおもひ定めてかほをあげ小三だんくのお頼みうけたまはり、何と申さんやうもなく、大事のく若旦那さまを、人にわるく言はせたり、あなた方へいろくな、御苦勞をかけましたも、みんな私わたくしがいたづらから、つくつた罪でござります。お赦ゆるしなされて下さいまし。それをマア、憎いとも思召さず、氣樂にさせてやりたいと、かへつて優しいそのお言葉、もつたいないとも有りがたいとも、申さうやうはござりませぬ。さりながら私は、たとひ外にどのやうな、けつこうな所がござりませうとも、樂しみ望みはござりませぬ。只若旦那やみなさまの、おためになります事ならば、たとへこがれて死すまでも、ふつつり思ひ切りませう。」トいもなみうるみ聲、わつとばかりにせきあけて、正體もなく泣きけるたる、心のうちぞいかならん。白翁もによろこ「ヤレくマア、よく思ひ切つて下さつた。かたじけないぞや小三どの。その悲しさを見る

がいやさに、今日行つて頼まうか、明日行つて云はうかと、一日々々と見合はせても、どうで云ひ出さねば果てしがつかねば、心を鬼にしてわざく來たが、さぞ憎からうが是れも身の爲、憂世の義理のせん方なさ。老いの身に後生は願はず、縁切に來た罪つくり、わしが胸の切なさも、するりやうして下されよ。この事とくと承知なら、けふあすと云ふでもない。心まかせにいつなりと、こなたの身にも怪我のないやう、手ぎはよくやつてくだされ。」ト云ひつゝ立つて出でながら「金五郎とは縁切つても、わしはやつぱり孫嫁の心、この後なんぞ不自由あらば、必ずく遠慮なう、なんなりとさう言うてよこさつしやれ。こなさんの身の落ち付くまでは、いつまでも私が責みますぞや。」ト他人とおはぬ白翁が、やさしき言葉に嬉しさ餘り、悲しさやるせなきまゝに、とかくのいらへさへもせず、唯うつ臥して泣き居たる、その心根の不便さを、思ひやりつゝ、白翁も、老いのなみだにかきくれしが、心弱くて叶はじと、思ひ直してかへりける。小三はもとよりお雪の事を、聞いてゐたゆゑ末々は、中を柄かれんは必定なり、もし縁切らるゝ事とならば、生きて居たとてかひなき身の、別れてつらき日を送らんより、死して苦患をまぬかれんと、こゝに覺悟をきはめしも、せまき女子の心から、嗚呼是非もなき事にこそ。斯かりしほどに乳母のお乳は、最前よりの一五一什を、次の間にて聞くものから、小三の胸の切なさを、さこそと思ひやる程に、己も共に胸のうち、はりさくばかりの苦しさを、こらへて忍び泣き居た

るが、今はなかく、怵へかねて、わつとばかりに走り出で、小三のそばへ、うほもしあなた、とんだ事になりましたねえ。あのやうにマア美しく、おいそれと、お請合ひなすつたは、どういふお心か合點がまゐりません。おばうさんのあることを、なぜ打明けてかうくだと、おつしやらぬのでござります。子までなしたる戀仲と、お聞きなすつたらお祖父さまも、無理に切れろとはおつしやるまいに、いま若旦那と御縁を断つて、どうなさる思召しでござります。お坊さんが可愛くはござりませんか。あのお子さんの事はお案じなさらぬか。マアどういふお心でござります。」ト唯ひとすぢに金之助や小三を、大事と思ふ故、心を付けるこは意見、乳母はかくこそありたけれ。小三はなみだ「ほんにそなたのいふ通り、子まである身を析かれる事、切ないとも悲しいとも、胸の中ははりさくやうで、その苦しきは譬へられうか。それゆゑ金ばうのある事を、うち明けようと思つたが、男の子は縁切らるゝ時、男親に附くがならひ、なま中な事云ひ出して、あの子まであちらへ引きとられては、若旦那も今までよりは、なほなほ御苦勞が増すであらうし、二つには又わたしも、あの子を手ばなしては樂しみもなく、さぞ日にまし寂しからうと、未練らしいが云ひ出さぬも、やつぱり互の爲ばかり。又若旦那と縁切つても、わたしや外にどのやうな、男があらうと二人とは、馴染をかさぬる氣はないから、いつがいつまでも今の通りに、斯うして暮す心ゆゑ、そなたもやつぱり今までの通りに、金坊の世話をしておくれよ。」

トいふもなみだの乳母も目をこすりながら、うほまことにあなたのお心の中を、推量致せば致すほど、わたくしの胸もはりさくやう。なる程おばうさんのある事を、おかくしなすつたは深いお心、たとひ今日が日御縁がきれても、一生別れきりといふではなし、ほんの人目や浮世の義理と、お祖父さまの先刻のお言葉、少しの御辛抱でござりませう。又お坊さんの事はおつしやるまでもなく、ば、ア、とお馴染みなすつたもの、なんで他人と思ひませう。もつたないが、私が、産み申したお子だと存じますもの。たとひどのやうな苦勞をいたしても、お育て申す氣でござりますから、ちつともお案じなさいますな。しかし是れから若旦那の、お手がきれたら猶あなたは、いろく御苦勞遊ばすだらうと、それがおいたはしうござります。」トほろりとためなみだ。小三も浴衣の袖を、目にあ小三「わたしも今度の縁切が、一生の身の大事だから、只何事も神任せ、悪い工みをしたのぢやアなし、天道さまも見とほし故、今日は何はけふ、明日はあすと、その日の風に任するばかり。せつばつまつたその時は、又外に思案もあらうから、それを案じてくんなさんな。今にも若旦那がお出でなすつても、必ずわるい顔をしないで、今お祖父さんのお出でなすつた事も、お知らせ申しちやアわるいよ。」うほそれは呑みこんで居りますが、なんほお祖父さまのお頼みで、お家の爲や若旦那の、お爲とは申しながら、常にかはつてあなたの氣つよさ、お思ひきりのよさといふものは、あんまり見事でござりますから、

どうも合點が参りませぬ。」トいはれて小三は死する覺悟をさとられじと、おびやうの癩。小三アイタ、タ、今のもや／＼で持病の癩が、どうやら頭痛もするやうな。」トまくらを取つて乳母はせん方なくなくも、次の間へ立つて行きて、金之助の浴帷子を、縫ふもなみだではかどらじ。小三はしばし氣をやすめんと、横に寝ねても眠られず、只胸さきのみとゞろきて、とやせんかくやとさま／＼に、思ひなやみし折からに、鄰れる家にて若者ども、二三人にて聲高に、浮世ばなしのいろ／＼なる、中に一人は、●「コウ八さん、おめへ、己がむかうにゐた、つとめあがりの女を見たか。」▲「フウ見た／＼。二十三四のいい女だつけ。あれがどうした、文でもよこしたか。」■「ばかアいひねえ、アノ女で此の間大騒動があつたアな。」▲「ハテノ、又逃げでもしたのか。」■「どうして／＼、逃げたぐらゐならばいいけれど、首をく、つて往生したアな。」▲「エ、縊つたか。ヤレ／＼とんだ事をやらかしたの。そりやアマアどういふ譯だ。」■「聞きねえ。アノ女はの、婦多川の女郎だがの、さる所の息子に惚れて惚れてほれぬいて、互に心を明し合つて、末は女夫だ、夫婦にならうと約束をしたが、聞きねえ、その息子がおめへ、内にやアの、いい嫁があるんだアな。それを何でも深くかくして、まだ女房は持たねえから、請け出す／＼とだまかしたが、大ふでかしよ。それからお前、相應に金まはりもいいもんだから、親父の金をひん盗んで、身請をして己が長屋へ連れて來て、圍つて置いての、女房はた、き出

しの、から、手におえねえから、親父はおほおこりで、上がたへやるの、田舎へやるのと、大もんちやくよ。した處があは女は、女郎に似合はぬよく出來た者で、嫁が出されたり、親父がおこつたのを聞くと、サア氣をもんで／＼、息子が不埒とはいふものの、嫁を出したり内がもめるも、みんな私があやまりと、ひどく嫁に氣がねをして、生きてゐるちやア、四方八方、丸くいかねえと思つたさうで、たうとう書置をして、首をく、つて死んでしまつたから、嫁も歸るし、息子もそれから、しかたがねえから穩順しくなつたが、なんとその女郎は、よつほど氣めへもので胸がいいに、第一、貞女といふ女だ。」▲「ほんに女のかゞみだのう。水滸傳一百八人の中に、どうかありさうな豪傑な女だの。なるほど女は魔のもので、外面如菩薩内心如夜叉とか、佛さまがいはしつた通り、顔は美しくつても、肝魂の恐ろしいのがあるものだ。しかしあの女もその息子の、一旦恩になつたから、男の爲や何かを思つて、死んだのはあつばれ名が残るが、をしいかな首をく、つたからおしめえだ。とても死ぬならいさぎよく、身を投げるもちうだから、剃刀で咽をぐつとやると、鏡山の尾上ときて、がうぎに利いてゐるぜ。」■「さうよのう。そこがやつぱり氣がよわいから、剃刀でやつたら痛からうと思つて、縊つたのだらうが、見つともなかつた。」▲「さうだらう／＼。それぢやアやつぱりその息子の、面よごしでわらはれ草だの。ほんに死ぬのもよつほどあんべえものだ。何にしても恐ろしや／＼。」ト

れかくれさま、男氣の、それと知らさぬ胸の中、言はぬはいふに彌増して、猶さら辛きものぞかし。
 小三「あなたちつとお氣晴しに、御酒でもおあがんなさいませんかエ。」金「いや、酒よりはマア、ちつと寝よう。全體けふは番だから、どうも來られねえ處だつて、昨日もをと、ひも來ねえから、又案じるだらうと、氣になつて、それでやうくぬけて來たのよ。ひと寐入りやつたら直るだらう。」ト小三のまくらを引き寄「のう小三、實に人のいつ生は、どうなるものか知れねえものだの。今頃斯うしてせて、寝轉びながら」のう小三、實に人のいつ生は、どうなるものか知れねえものだの。今頃斯うして暮さうとは、おらア夢にも氣がつかねえよ。末々かけて夫婦だと、互に思ひ思はれたに、お雪といふ悪魔が這入つて、苦勞をさせる切なさ辛さ。それ故にこそ祖父さんや兩親へ、一倍氣がねをするといふも、ア、うるせえ世の中だのう。」小三「其の様にマア、お雪さんの事を冤や角とおつしやるが、お雪さんは大事の、お家のお娘でござりますから、可愛がつてあけて下さいまし。どうで私は日陰の身故、どうなつても宜しうござりますから、そんなにあちこちお氣を使つて、必ず煩うて下さいますな。それが私は苦勞でくになりません。」と、暫し涙にくれ六つの、鐘の鳴るまではまどろまん、金五郎はこゝに打臥しける。是れより小三、金五郎に、愛想づかしをいふや否や、それは三編を見て知り給ふべし。

小さん 假名文章娘節用後編下卷 終

器の古きを愛づるのは、ひねつた茶人の一癖にして、旨き物を食したがるは、小兒と意地のきたな連中、婦人を視て目のなきは、放蕩家の病なるべし。觀所と趣向のあたらしきを、妙で誤説の咎めもなく、ヤンヤと蘭語で贅言は、戲作通の看的、評判よし野の花より高く、部数は春の山ほどに、賣らん事を欲するは、言はねどしるき發客の慾情、活業原より忌敵、速いが勝の新版は、夕河岸の魚を競ふに齊し。近屬娘節用の、刻成つて發市は、近きにあれば序文でも、口上なりと出たらめに、早く早くと書肆より、使をおこして居催促、机の下に居眠りし、調市の唄を聴きながら、筆を探りて斯くばかり、有りの儘に記すにん。

甲午の孟春

三文舍主人

小さん 金五郎 假名文章娘節用三編上卷

江戸 三文舍自樂補述

第七回

生者必滅會者定離は、浮世のならひと悟つたる、言も今は身の上に、思ひあたりし憂き事と、小三は胸にこたへたる、人に知られぬ心勞も、かねての覺悟と云ひながら、さすが女のやるせなく、浮氣を捨てて眞實に、二世を三世と契りたる、かはらぬ中の金五郎の、爲とは云へど今更に、義理といふ字にせめられて、縁を切らんはなかくに、身を裂かるゝより苦しくて、冤やせん角と案じれば、案じるほど猶物思ひ、まさる苦勞を胸の中に、置きどころさへ泣きのたね、心を鬼に持つとも、道に缺けたる愛想づかしは、云ふに云はれぬ恩愛と、執著の絆断ち難く、ふつくし思ひ惱みしが、左にも右にも末かけて、添はれぬあだな縁ゆるゑ、なまじひな事いひ出して、臨終に憎しみ受けんには、女子は罪の深き身に、罪重なりていつの世に、罪滅ぼさん様はなし、うすき縁は前の世の、因果と思ひ定

めなば、人を恨み身をうらむ、よしなき罪はなきものをと、あぢきなき世を悟れども、心細さのいとどしく、生ひさきのある子を捨てて、いとしい男のためながら、暗き冥土へ旅立たんは、よくよく業の深き身と、又くりかへす迷ひの闇に、ひとり胸のみ苦しめつ、年ごろ日頃の辛勞が、つもりくつてこの頃は、うき立たぬ氣の結ほれて、食事も日々に細るものから、面もかたちも瘦せがれて、うつらうつらと氣を病むも、ことわりせめて哀れなり。かかりし程に金五郎は、案じる事大方ならず、薬よ醫者よとさまざまに、心を配り氣をつけて、いたはり優しくさるゝにつけ、小三はいとゞその情の、あつきと恩の深かるを、思ひつゞけ考ふれば、いかに義理でも操でも、いとし可愛の夫と子を、捨てて死すべきやうもなく、いつその事に白翁が、縁きつてくれと頼みたる、事をうちあげ金五郎に、話して談合したならば、どうかかうかとさまざまに、心もみだれ氣をもみて、病はますます重るゆゑ、寢ても起きてものほせるのみ、頭痛とゆるぐ齒のいたみに、胸のやすまるひまぞなき。金五郎は勤めの身ながら、案じる事ひとかたならず、日毎々々に訪ひ來るが、今日しも例のごとく入りきたりて、奥へとほれば小三のそばに金之助は、持ちあそびを、金五郎「どうだ小三、けふはちつとも快い方かの。」ト問はところせましとならばたて、餘念もなくあそびある。小三「ハイ、やつぱりけふも同じことで、どうもふさいでなりまるより、なやめる顔につこりわらひ。」小三「ハイ、やつぱりけふも同じことで、どうもふさいでなりません。」金五郎「さうか、誠にどうも困つたものだ。薬は毎日精出して呑むか。ば、ア立てつけて呑ま

てくんなヨ。」ト火鉢へ炭をつぎながら、「ハイ、なるたけ精出してお呑ませ申して、はやくお快くしてあげたいと存じますが、今度のお醫者のお薬は、まことに上りにくいさうで、ねつからどうもはかどりません。」金五郎「そりやアわるいのう。どうで薬は呑みにくいから、誰しもすゝんで呑むものはねえが、そんなに無精ぢやアどうもいかねえ。それにあの醫者にかけてから、ねつからはかゞしく無えやうだから、なんなら醫者を取替へるが宜からう。」小三「ナニあのお醫者様もお巧者だから、轉へますにも及びますまい。どうでかういふ病氣といふものは、はかゞしい事はないと申しますから、お氣をмонで下さいますな。私がこのわづらひより、あなたに御苦勞かけます事かと、思ひ廻しますと、もうく、いつその儘死にました方が、遙か優しでございませう。」ト云ひつゝなみだ。金五郎「またそんな馬鹿な事をいふヨ。なに死ぬのが優しなものか。病は氣から發るといふから、氣の持ちやうで早くも直り、重くもなるのに、おめへのやうに些と煩ふと、死ぬ方がましだくと、氣で氣を病むものだから、ちよつとした病氣も埒があかねえのだ。」小三「それでもどうも心から、氣で氣を病む氣はございせんが、もとより苦勞性な生まれつき故、つまらない事も氣になつて、あんまり深く考へますから。」金五郎「それがわりいな。寐る目もねずに考へて、氣で氣をмонで苦勞をしても、儘にならねえことが儘になるものかナ。餘計な苦勞で命を削るやうなものだ。勿論平生おれの爲を思つて、人

の知らねえ苦勞をして呉れるのは、眞實嬉しいは山々だが、こんなに煩つてくれちやア、實にどうも困りきるぜ。是れからは考へ事はさらりとやめて、苦勞は地獄へでも捨ててしまふがいい。」小三「あなたはさう一口におつしやいますが、とても女は罪が深いから、苦勞は一生はなれませんか。苦勞より此の體が、さきへ地獄へ参りませう。」トあはれた事をいひ出すにぞ、金五郎もむねふさがりて「金五郎もむねふさがりて、金その氣の小せえのが病の原だ。老人かなんぞちやアあるめえし、是れしきな病氣で死ぬものかな。ちつと氣をきりけへて、向島の姊御の所へ、保養にでも行つて見るがいい。」小三「わたくしも向島の姊さんに、ひさしく逢ひませんか、この間からどうぞして、参りたいと存じてをりました。老少不定は世のならひ、盛りの花も散るは常、定めなき世と申しますから、あすをも知れぬわたくしが身のうへ、もしもの事があつたらば。」トあと言ひさして胸せまり、金五郎のかほと金之助の「かほを見つめる目になみだ、袖にあふれて膝のうへに、雫と落つるを子心に、ふしんに思ふ金之助は、のび上りて小三の顔を、つくぐ」と見て膝に「金之助」おつかちやん、なに泣くのだエ。おとつちやんお呵いか。坊あやまゆから堪忍ちておくれよウ。」トいはれて小三はたまりかむせび、金之助可愛さ餘りて切なさは、胸もはりさくばかりなる。金五郎も男心に、口にはさまぐ言ひ紛らせど、小三の胸をおしはかり、せまき女の心から、よしなき苦勞に取りつめて、もしもの事もあらんかと、思ひ過して胸せまれど、さとられじと鼻紙に、涙つ、むぞ無理ならず。乳母のお乳

もかたはらに、二人が心を推量して、共になみだに嗚咽びける。小三はやうく、「この子のまだぐわんぜんもなく、わたしが愚癡な心から、つまらぬ事を案じ立てして、あんまり悲しくなつた故、つい涙をこぼしたのを、旦那に呵られる事かと思ひ、あやまる心のしほらしさ。なぜ子どもといふものは、こんなにもマア可愛からう。この子の成人するにつけ、慾に限りは無い故に、いつまでもたつしやでゐる氣でも、壽命がなければそれも叶はず。もしあすが日に目を眠つたら、さぞマア後で泣くだらうと、それが今から見らる、やうで、死ぬ氣はさらくないけれど、とても長命のできないわたくし、遺言ではござりませんが、ひよつとマアさかさまな事で、この儘死にでも致しましたら、便り少ないこの子の身の上、他人の手につけないやうに、どうぞ向島の姊さんの所へ、お預けなすつて下さいまし。とても日陰で育つたこの子、未始終あなたの御家督を、つぎます事もなりますまいから、養子にやらねばならぬ生ひさき、今からあんまり他人の中で、いぢめられたり苦勞をさせたら、根がひよわい生まれ故、蟲もちにでもなりませうから、外へやつて下さいますな。御如才もござりますまいが、六ツか七ツにもなりましたら、手習や讀書も、教へてやつて下さいまし。また二ツにはお雪さんと、御夫婦中よくお暮しなすつて、御祖父さんはじめ御両親へも、御苦勞をかけ申さぬやうに、御孝行になすつて下さいますれば、わたくしはモウどのやうな、佛事供養をして下さるより、思ひ残す事もな

く、うかみます。あなたには子どもの時からおなじみ申して、ひとかたならぬ御恩をうけましたが、この世の縁が薄いかして、この子ができて末かけて、添ふにそはれぬ身の因果、何のむくいでのやうに、後生の悪い生まれかと、いくたび思ひ返しても、かへらぬ事でござりますが、これもやつばり女の愚癡、この上のお情には、わたくしのからだは、あなたのお寺へ、どうぞ遣つて下さいまし。さうしたならあの世へ行つて、お側に居られませうかと、はかないやうでございしますが、今の身にてはそれが楽しみ、お察しなすつて下さいまし。」ト又もなみだともろとも、金五郎「まだそんなつまらねえ縁りかへしてぞ歎きける。」事を云ふよ。あんまりよく思ふから、ちつと取りのほせたのぢやア無えかノ。この一日二日は、なんでもおれの顔さへ見ると、哀れつほい事ばかりいふから、おれまでどうか氣色が悪くなるやうだ、愚癡な事を考へ立てして、氣でも狂ふといかねえから、ほんに氣をしつかり持つ方がいいぜ。お雪にひどく氣がねをするから、それでこんな病氣が發るのだらう。あの子のお雪と祝言したのは、知つてゐる通り、祖父さんや親父の氣やすめの爲だから、何も今更おめへを捨てる心もなし、又金坊ができたから、榮耀榮花こそさせられねえが、そんなに不自由もさせめえし、日かけ者でもなんでも、共に心さへ變らねえけりやアいいぢやアねえか。儘にならぬのが浮世だとは、唄にさへうたふから、其處を承知して、なにも時節だと、氣を大きく持つて往生して居なけりやア、苦の世界が渡られるものか

な。ほんに往生するといつちやア氣が、りだつて。ア、鶴龜々々。」ト小三のこゝろをなぐさむる、ことばひて氣にかけるも、蟲の知らするゆゑなるべし。この日は金五郎も何となく、小三の身が案じられて、歸る心もなかりしかば、看病がてらこゝに泊りて、夜もすがら沉りがちなる事のみ話して、夜更けてみなく、打臥しける。あくる朝金五郎は、はやく起き出で仕への身なれば、立ち歸らんと身じたくするに、小三は心のつかれにや、まだ目覺さぬこなたには、金之助があさおきにて、うばを相手にあそびゐる。そばへ來りてあやしなから、金五郎「ば、アや、子供と云ふものは、まことに朝おきなものだのう。坊やのしやべる聲で、おらア目を覺したやつよ。」うば「さやうで御座いますかエ。どういたしてもお坊さんは、お晝寢をなさいますから、朝がお早うございませう。ほんにおつかさんはまだ、お目覺がござりませぬ。旦那さんエ、あなたはさぞモウ御苦勞でございませうが、まことに困なすつた事でございますネエ。」金「さうよ、じつに苦勞でならねえ。それになんだか氣にかゝる事ばかりいふから、どうも案じられて安心ならねえヨ。おれは勤めの身のことゆゑ、毎日附きどほしに附いても居られず、なんでも手前ひとりが頼みだから、するぶん氣をつけてやつてくん。女といふものは心の狭いものだから、ひよんな事でもしめえかと、夫れが一倍心配だ。」トいひながら金之助の「こりや金ばうや、おつかアはきい／＼がわりいからの、あんまり世話をやかせず、おとなしくして居るのだヨ。又明日來るときに、お土産をたんと買つて來てやりませ

う。」トいへば嬉しきうに金「おとつちやん、坊おとなちくするかや、うまい物お呉えよ。明日おつかちやんきい〜まだわゆいかや、坊おとなちくすゆヨ。」金五郎「オ、さうだ〜。坊は利口者だからおとなしくするのう。そんならおとつちはマア歸りませう。おつかアはまだ目を覺さねえから、しづかにしなよ。」トいふ聲聞きつけ、小三「オヤモウあなたお歸りなさいますかエ。今日は御番でありますか。」金五郎「フウ、モウ四ツだから歸らざアなるめえ。なんぞ用でもあるのか。」小三「さやうさねえ、用と申すのでもございせんが、なんだか今朝は御歸し申すのが。」トなごり惜しげ、金「またそんなことを言つて、とめるのか。けふは顔ツつきがでえぶいいやうだぜ。なんにしても歸つて又出直して來よう。主人へつとめの間をかかぬも、親父や祖父さんへの心やすめだ。マアなんでも精出して藥を呑むがいいぜ。」小三「それでもあなた、今夜はお出でなさりやアしますまいネ。」金「大抵なら練り合はして來る氣だが、あんまり遅ければ、明日のあさは是非來るヨ。それとも用でもあるなら、さういつておきねえ。」小三「ほんにそれ〜、金ばうの背中の灸がまつてをりましたから、どうぞ直してやつて下さいまし。そしてまだ瘡瘡前はうさうまへでございすから、觀音さまの二王さまの股を潛らせて下さいましヨ。此の頃はあつちこつちに、だいぶ瘡瘡はうさうがありますから、水天宮さまのお守を懸けさせてやつて下さいまし。浮雲うきなくつてなりませんから、轉ばすの玉子守と、水天宮さまのお守を懸けさせてやつて下さいまし。

爰こゝらは近所きんじよに川が多おほうございすから、水が怖こはくつてなりません。」ト萬事につけて子を案じる。金五郎「なんだな、そんな事はいつでも言はれるものを。あんまりいろ〜な事をいふから、おれも歸るのがをかしいやうだ。マア、モウ一ぶく呑んでから歸る事とせう。」ト男心にも氣にかゝれば、別れのつらさも無なが、小三「袖引たばこであなたのお足を、無理にとめた歌妓の時分は、眞の苦勞も苦にならず、はやく身みままになりたいたと、樂たのしみ盡つきて悲しい今の身、思へば夢のやうでございすねえ。」金五郎「さうよ、この子のできねえ時分が、ほんの色事後生樂、無理な口説くせつにすねたり妬やいたり、つらいと思ふは逢あはねえ晩ばん、ゆうべの恨うらみは今夜の手くだ、面白い事も樂しみも、かんけへて見ると昔むかしのやうだ。爺ぢいじみた言いひひぐさだが、ア、年はなんでも重とねえこつた。あの時分のやうな身のうへに、もう一度なつて見てえものだ。」トを子は知らで、金之助はあそびにあきけん、金之助「おつかアちゃん、坊、ば、アと遊ぶの、モウいや〜だよ。何なんじよ旨うまいものおくれよう。」小三「アイ〜、モウお遊びはいや〜かエ。そんならば、アや、お菓子でもやつておくれヨ。」トは「ハイ〜。お坊さん、サア落鷹おらをあげませうねエ。」金之助「乳母は、坊、落鷹おらいや〜だよ。梨子食なべたいよ。おつかちゃん、佛ぶちやんの梨子なちおくれよう。」小三「ナニ佛ぶちやんの梨子なちかエ。坊はこのあひだ、お齒はが痛いた々々だつたから、信州しんしゆの戸隠とさんおに御願おねがひ申ましたから、梨子なは食たべられないからお菓子におしよ。いい子だネエ坊は。」金之助「お菓子い

やいやだもの。佛ちやんにあんがちて居る、梨子おくえよウ。」ト少し泣聲 金五郎「坊や、なぜそんなにだ、をいふ。梨子は毒だから悪い。だ、をいつていびるから、おつかアの病氣が悪くなるのだ。おとなしくしてお菓子をたべな、赤いうまいのがあるから。コレ坊や、なぜそんなに似指をいぢるのだ。似指をいぢると手へ灸するよ。」金之助「灸いや、御めんだよウ。おとつちやん似指いぢやないかヤ、何じよ買つておくえよウ。」金五郎「オ、さうおとなしくするなら、旨い物を買つてやりませう。おとつさんはお屋敷へ歸るから、お竹に抱つこして、兩國のお橋の方へ一緒に來な。お菓子と、手遊と、そして何を買つてやらうのう。」金之助「アノウお菓子とおもちやと、そいかヤ、アノウ佛ちやん上げる、花々買つておくれよウ。」トいはれて小三はむねにぎつく 金五郎「エ、この坊主は、妙な子だのう。なんだといふと佛さんへ買つて上げよう」といふが、氣になる事をいふ坊主だぞ。マア何でもいいから一緒に來い。そんなら小三大事にしな。婆ア氣を付けてくんよ。」トいはつゝおりにぎは、金五郎はお竹にいだかれ、さきへおもてへ出てゐる。小三は 小三「さやうなら御機けんよう。オヤあなた、ちよつとこちらを向いてお見せなさいまし。」ト暇乞ひにもわかれを惜しめ 金「ナゼ、己がどうぞしたか。」 小三「ハイお頭上に何やら芥が。」トとる手もふるへ聲曇り、こ 思へば心も消えぬに、ちつと見つめる目に涙せきくる胸の切なさを、咳にまぎらす顔に袖、あてて泣く目をかくすなる、心の中の四苦八苦、思ひ

やるさへ哀れなり。金之助はわ 金之助「おとつちやん早くお出でよう、坊背負ちて待居るヨ。」トせたげら郎も、詮かたなきに格子戸を、 跨ぐはすみに門口の、石につまづきよろ、 金五郎「ホイ、こいつアしまった。」 小三「オヤ、どうなさいましたエ。」 金五郎「ナニ、鼻緒を踏み切つたのヨ。ハテめんえうな。昨日買った雪踏だから、切れる筈はねえけれど、どうも不思議ぢやアねえかのう。」トまた氣にかけ 小三「そんならアノ、きのふお買ひなすつた、お雪踏の鼻緒が、アノ切れましたかエ。」 金「フウ、こいつアどうも氣が、りだ。」 小三「エ、。」ト胸にこたへて 「あのそんなら、お雪踏をお竹に持たせて、直しの處へおやんなさいましな。」 金「なアに、二本鼻緒が一本切れたのだから、履いて行つて橋臺で直させよう。サア金ばう、一緒に來な。」ト心ならずも出 小三は金五郎の後影、見ゆるまで見おくりて、名残の涙のやるせなく、止めかねしをかくては果てじと、思ひかへして食事をば、やう／＼に食べしまひ、 楊枝をつかひなし如く、考へて居たり 小三「ば、アヤ、けふは旦那もいろ／＼御用があるさうだから、モウ出なほしてお出でなさりもしまいし、わたしも氣分が大きによいから、保養がてら今ツから、向島へ行かうと思ふよ。それに此の節はモウ、花屋敷の七草もさかりだらうし、天氣はよし、金ばうをつれて、ぶらくと出かけようよ。」トそれは宜しうございますが、おあんばいの悪いのに、遠道をお歩きなすつたら、又あとがお悪うございませうヨ。」 小三「ナニ、爰からはそんなに遠くもないものを、ぶらくと

出かけたなら、氣が晴れて却つてよからうヨ。向島の姉さんも、金坊が成人したのを見たがつて連れて
来い〜と、お文をたび〜およこしだから、マア何にしても出かけようヨ。」ト是れより小三は身支度
の、乳母に金之助をおぶはせて、向島へと出で行きける。小三の姉眞名鶴は、富家の隠家に愛せられ
て、向島の洲崎村なる、秋葉の社のほとり近くの、別荘に住居して、月雪花を友としつゝ、いと樂々
と暮し居けるが、この春隠居は世を去りて、なき人の數に入りしかば、本家の主人も眞名鶴の、便り
なき身を哀み思ひ、殊に壯年の事なれば、いづかたへなりとも支度して、嫁入らせやらんと深切に、
情厚く云ひけれども、眞名鶴は今更縁付きて、榮耀を望む心もなく、勤めの身にて年久しく、つらい
苦勞も爲あきたれば、たとひ不自由の暮しをするとも、世を物靜やかに送らんこそ、上もなき樂しみ
なれば、あはれ尼となり佛門に入りて、隠居をはじめ亡親の、後の世をも弔はんこと、生涯の願ひな
りとして、ひたすらに望みける故、本家の主もその心操の、清らかなるを深く感じて、望みに任せて、
別荘を眞名鶴にゆづり、その庭の中に庵を造らせ、念佛庵といふ號をつけて、佛事をいとむ補助と
し、日々の雜費は月毎におくり、不自由なく暮させければ、眞名鶴は日ごろの望みも叶ひ、その恩義
の厚きを喜び、浮世をのがれし心地にて、髪を切り尼となり、名を紫雲とあらため、月々に彼の庵に
て、百萬遍をいとなみつ、佛に仕ふるを身の業とし、行ひすまして暮しけるは、いと〜殊勝の事な

りけり。頃しも秋の中ばなれば、庭面に桔梗、女郎花、なでし子、藤ばかりなど、さまざま秋草の咲
きみちたるまゝ、紫雲は御佛に參らせんと、庭下駄をはき下りたちて、花を手折りて居る折から、枝
折戸の外に人音する故、ふりかへりてひ、紫「オヤ〜、青柳橋の姉さんだネ。よくマアお出でだねえ。
サア〜こつちへお上りナ。ヤレ〜よくお出でだ。」ト流石しんみのき、喜ぶこと大方ならず。小三も
姉の無事な顔を見て嬉しさの限りなく、乳母の背中に負はれるる、金之助を抱きおろし、手をひき
て座敷へ通り、おさだまりの挨拶すみて、紫「ヤレ〜まことに久しぶりだネ。オヤ御無用におしならよ
いに、遠方だのお土産まで。ほんにこのあひだ人をあけた時、おまへがちつと氣色が悪いと、お返
事に書いておよこしだから、どういふ様子かと、いつそモウ案じくらして、ちよつと見舞に參らうと
思つてゐたが、あいにく私も時候にあたつて、ついで〜けふまで出かねてゐたよ。まだおまへも顔の
色も悪いが、氣分はだん〜よい方かエ。そして舟でもお出でのかエ。」小三「イ、エ、あるいて參
りましたよ。見かけ程心もちは悪くもございませませんが、唯ふさぐばかりで御座いますのさ。私はモ
ウ手まへにかまけて、御無沙汰ばかり致しますから、あなたのおあんばいのお悪かつたのを、存じま
せんでお尋ね申しもいたしません。」紫「ナニサ、私のはほんの當分の事、モウさつぱりと快いヨ。
ほんに金ばうよくお出でだネ。ちつと見ない中に大きくお成りだぞ。目つきや口もとがおとつさんに

生だねえ。」小三「金ばうや、手をついておばさんに、ハイ御機けんようとお辭儀をしなよ。」紫「アイ、よくお辭儀ができますぞ、りこうものだ。サア／＼をばさんに抱つこをおし、うまい物を御馳走するから。オ、よく言ふことをお肯きだぞ。可愛いねえ。」ト金之助をひざの上に、抱きあげながら乳母にむかひ乳母「お出でかエ。ハイしばらく。おたつしやでよいネ。」うほ「へいありがたうござります。まことに御無沙汰様を致します。へ、へ、へ、。オヤお坊さん、お嬢しうござりますかエ。お抱つこでようございすネエ。」紫「この子もお前の丹精で、まことにおとなしく成人したネエ。ほんに氏より育てがらとやら、この末ともどうぞ面倒見てやつておくれ。」うほ「イエモウ、お利口なお生まれつきで御座いますから、目からお口へぬけますやうで、よその子供衆より御合點がよく参りますのさ。」紫「ほんにさうだらうネエ。金ばうや、おとつさんは御機嫌よいかエ。」金「アイ、おとつちゃんお屋敷に、お竹内に居のヨ。」紫「オ、お竹は内におるす番で、おとつさんはお屋敷かエ。よくわかるねえ。お常や、お煮花を早くこしらへて、ソシテ今さういつた物を取りにやつておくれかエ。」下女「ハイ／＼、唯今お煮花もできますヨ。アノお菓子も、三松どんが取つて参りました。」紫「そんなら早く爰へ持つて来て、金坊に上げておくれ。そして、鯛七へさう言つてやつて、金坊やおつかさんのお好きな、うまい魚を取つておくれヨ。」下女「ハイ／＼、かしこまりました。」トにはなと菓子を小三「オヤモウおかまひなさ

いますな。今日は御馳走をいただきますより、久しぶりでゆつくりと、むかし話や、うさばなしで、氣をはらすのが何より御馳走。」紫「ほんにさうさねえ。女といふものは久しぶりで逢つても、身の上ばなしかなんぞより、外に話は無いものさ。マアお茶ができたからお菓子をおあがり。サア金ばう、好きならたんとおあがりヨ。」小三「ハイありがたう。左様なら坊やいたゞきな。オヤ／＼お珍らしい、お牡丹餅でございますかエ。」紫「アイ、富貴牡丹といふ道明寺のおはぎサ。そちらにあるのは都鳥といふお菓子で、両方ながら向島の名物だから食べて御覽。」小三「ほんにさやうでございますかエ。サア坊、いたゞいておたべ。ば、アにもお相伴させませう。」金「おつかちゃん、牡丹餅おいちいヨ。坊たんと食べゆヨ。」小三「ほんに誠に申し御座いますネエ。乳母とんだよいお菓子だのう。」うほ「さやうで御座います。此の様なお菓子を、向島で賣りますのを、さつぱり存じませんネエ。」小三「さうさ、モシお姉さんエ、これを御近所で初めましたかエ。」紫「アイ、直この秋葉さまの裏門の通りで、土手へ出る道サ。松花園といふ家で、ちかごろ賣り初めたが、とんと好くするネエ。」小三「左様で御座います。實に美味しうございますから、坊が大悦びで、たんといたゞきます。」紫「それはよかつたネエ。金坊、たんとおたべヨ。乳母は酒の方だから、いまにお看か来ると、一口あけるヨ。」うほ「イエ、御酒よりか又、このおはぎと都鳥は、結構でございます。そして手綺麗でございますから、おつ

かひ物やお土産などには、よろしう御座いますネエ。これは今にはやり出させよう。」業「さうさ。わたしの所の本店などでも、人をつかはさる度毎に、いつでも買つて来いとおつしやるさうさ。何處でも評判がよいからはやつて来るのサ。」小三「ほんに向島も、今ぢやア都になりましたネエ。」業「此の節はおまへ、梅屋敷の七草が盛りだから、たいそう見物の人が出るヨ。それに蓮華寺の大師様のお庭がよく出来たから、だん／＼此方も賑やかになるネ。」小三「左様でございますネエ。私も些と休みましたら、坊を連れて、梅屋敷の七草から、蓮華寺の大師様へお参り申ませう。今年は旦那も前厄でございますから、お身のうへに何事もないやうに、金ぼうの行末やわたくしの、後の世の助かるやうに、よく祈つて参りませう。」トほろりと涙こぼすにぞ、紫雲「業「ほんにおまへもわたしに似て、後生願ひだに見えるねえ。金ぼうは退屈だらうから、三松と一緒に、お庭の池の緋鯉に、お菓子でもやつてお遊び。」トうばに手をひかれて庭におりたち、丁稚の三松を相手にして、池のほとりをめぐり歩き、緋鯉の子などおひまはし、餘念もなくぞ遊びゐる。

小さん 假名文章娘節用三編上卷 終
金五郎

小さん 假名文章娘節用三編中卷
金五郎

江戸 三文舎 自樂補述

第八回

その時紫雲は長羅宇の、煙管に多葉粉を吸ひつけて、小三に出せば手、小三「ほんにお羨ましいはあなたのお身、うるさい世事の御苦勞もなく、朝夕こんな静かなところに、憂世を捨てての樂なお暮し、わたくしもどうぞ三日なりとも、佛につかへて死にたいと、心に願つて居りますが、身の罪障が深いかして、それさへ叶はぬ憂き苦勞、何の因果でござりませう。」ト紫雲も何となく胸せまり、業「なんのわたしの身の上が、羨ましいとはおまへの僻事、世に在りてこそ人は花、金ぼうといふ實を結んで、苦勞はあらうが又楽しみ、旦那も人におすぐれなすつた、發明なお方ゆる、行末はそれこそ安樂だわネ。面白い事もかしい事も、楽しみも悲しみも、知らぬこの世の世捨人が、なんの本意であるものかネ。是れも定まる因縁と、思つて居てこそ又安樂、姉妹二人が同じやうに、浮世を捨てては亡き親

たちの、菩提の爲と思はれようが、却つてそれでは不孝の罪、せめてお前は人なみに、世を過ぎてこそ兩親が、草葉の影からお喜び、必ずくわたしが身を、うらやまないで金ばうや、旦那を朝暮大切に、うき苦勞をもしんぼうして、末の榮えをたのしみに、時節を待つのが樂の種、すこしのことをきなきな思つて、あんまり苦勞ばかりおしだと、大わづらひにでもならうも知れず、氣をきりかへて私にも、苦勞をさせておくれでない。」トしんみのことば身にしみて、涙を袖に包みかね、袂をぬらし暫時は、詞さへ泣くばかりなり。紫雲はこれを案じわび、もしや金五郎が小三を見限り、お雪にこそ、ろを移せし故、胸を苦しめ氣をつかひて、このわづらひの出でしかと、おもひすこして、紫「おまへのふさぐを見るにつけ、やまひの根が知れないから、どうもわたしは案じられるよ。癩や血の道でふさぐのなら、案じる程の事も無いが、何やらひどく氣をいため、心の疲れのわづらひかと、見たはひが目か知らないが、思案に落ちない事でもあつて、一人で心勞してると、ろくな事は考へ付かず、苦勞にくらうを増すやうな、つまらぬ事を考へ出すから、だん／＼病氣は重るとも、快氣方はすくないものさ。他人は格別親身のわたし、世を捨てし身と云ひながら、苦勞な事があるならば、お前の胸を隠さずにはなして聞かせておくれなら、女の智慧の淺はかでも、そこは膝とも談合づく、へだてぬでこそ實の姉妹。からす啼きがわるいにつけ、夢見の悪いや何かにつけ、おまへの事が氣にかかり、後生

を願ふ妨げと、おもへど凡夫の悲しさに、浮世を捨ててもやつぱり苦勞、心の休まる間はないわネ。」ト誠をあらはす言葉の中に、姉の意見のありがたさに、小三は始終なみだにくれ、胸もはりさくばかりにて、顔もえあけず居たりしが、みだをばらひ、小三眞實親身の妹と、思召して下さればこそ、お案じなすつての段々のおことば、うれしいにつけ悲しいにつけ、なんであなたを隔てませう。この世に杖とも柱とも、力に思ふはあなたおひとり、浮世に人は澤山あれど、考へて見るとおまへさんや、わたくし程な因果者は、あんまり外にはありませんまい。生まれ落ちると親に離れ、姉妹二人揃ひも揃つて、古郷をよそにはる／＼と、知らぬ東へさ迷ひ來て、うき川竹の流れに沈み、苦勞にくらうを爲ぬいたあけくに、あなたは行末たよりのお人に、早くお別れなすつた故、お若い身そらに世を捨てて、附會しらぬ佛の道、それにひきかへ私は、恩と情を捨てかねし、浮世の義理にせめられて、日陰に咲きし徒花の、散りてゆく身はいとはねど、まだ撫子も芽生えにて、そだてあけぬが一ツの氣がかり。」紫「その撫子が氣が、りとはエ。」トとがめられて、小三「サア、その氣が、りとは金坊が事、とかく蟲持で病身のゑ、明けても暮れても苦勞になり、どうぞ丈夫に育てたいと、思ひましても子供の事、何が食べたい彼が食べたいと、それは／＼日がな一日、見る程の物食べたがり、ねだり事も三度に一度は、食べ過ぎぬやうに氣をつけて、騙し賺せばぐわんぜんもなく、いや／＼をして泣きますから、ツイ可愛

さにひかされて、灸でおどすより早手廻しと、ねだるお菓子をあてがひますと、又食へすぎてはお腹が痛い、痛い／＼の食傷の度毎に、蟲氣でいつもちよつとは直らず。一體ひよわい生まれだのに、わたくしの乳で育てぬから、猶病身になりますと、思へば不便がいやまして、よその丈夫の子供のやうに、折檻もせず、強くも叱らず、わんぱく育ちが増長して、手にのらぬ程のいたづら者に、なりましたせるかして、ちとづ、丈夫に育つやうだと思へば、旦那は又行儀が悪いの、育てながら悪いからのと、あの子の身の爲を思つて、小言をおつしやるも無理ではないが、まだやう／＼丸三歳に、なるかならぬのふところ育ち、生まれ落ちからちやほや言つて、餘り大事に爲すぎた故、わが儘氣儘に育つ筈、今更急にせつかんしたり、泣く時あたまをはつたりして、厳しくしたら我儘も、すこしづ、は直りませうが、唯でさへひよわい子が、それこそ驚風の蟲でも引出し、ほんたうの病身になりますだらう。可愛いにつけ不便につけ、苦勞のやすまる隙もなく、氣で氣をつかひます故に、今の病氣もおこりましたの。是れもわたくしの氣が小さいから、せずとよい苦勞を餘計にいたして、壽命をちぢめますも心から、とても長生はできませんが思へばまことに世の中ほど、うるさいものは御座りません。それ故にこそあなたのお身が、お羨ましくござります。」ト涙ながらのこち言、聞くも涙の目をして「ほんにさう言へばさうでもあらう、けれどもそれはほんの一隨。はやいたとへが世の中に、子寶と

さへ云ふものを、大切な金銭よりも、子ほどまさつた寶はないと、たれしも知つた世の諺、子を持つた身に苦勞の絶えぬは、お前ばかりではあるまいし、みんな世間のならひだわネ。高貴でも下賤でも、子にひかざる、は親の常、マア見るかけもない橋の上の、むしろ蒲團に世をおくる、食ふや食はずの乞食でさへ、子を大切に可愛がり、寐る目も寐ずに育てあけても、出世の出来ぬ乞食は乞食、上を見れば方圖がないから、貧しいものを思ひやれば、さむい目もせず不自由なく、暮してゐるは安樂さネ。慾に限りのない世の中ゆゑ、十分なことも不足に思ふは、人情だから仕方もないが、おまへなんぞも日かけの身で、儘にならぬを苦におしだが、満つれば缺けるといふ通り、十分すぎた事はないもの。人のほしがる金銀が、有り餘るほどの大家には、子を欲しがらる程子が出来ず、貧乏人の子澤山を、羨むと云ふことだから、金銭づくにも換へられぬは、金坊といふアノ大事の子寶、よし病身の生まれつきで、人の知らない苦勞をするも、親となり子となる程の、因縁づくだとあきらめて、面倒を見て育てなくつては、親の役目がすまぬといふもの。サアそれだから少しの事を、くよく／＼案じて煩つては、おまへの身にも壽命の毒、彼の子の爲にもなるまいから、氣を引立てて、煩はぬ様に、身を厭ふのが肝心さ。世に楽しみも何にもない、わたしが身をうらやますと、金ばうの行末を神佛に祈つて、成人させるがおまへの手柄、女の道の缺けぬといふもの。しかし子もちの身でありながら、旦那

の爲の手助けに、身すぎ世すぎといふものの、人の機けん氣づまを取る、今の身での座しき活業は、ア、さぞいやだらうつらからうと、わたしが昔の身を思つても、おまへの心が悟られて、もう胸もはりさくやう、何かにつけて苦が絶えぬから、ふさいで病氣のおこる筈。とはいふもののわたしと違ひ、おまへは身ひとつといふではなし、幾度もくどく言ふやうなれど、あんまり苦勞に苦勞をかさねて、今のわづらひが大病になると、もしもの事がありもしまいが、さういふ時にはわたしはもとより、金ばうも便りがなくなるから、どうぞこの末は願でもかけて、煩はぬやうに爲ておくれ」トだけ理をわけて、妹を憐むしんせつは、斯くぞありたきものぞかし。小三「その御意見につきまして、まうすやうではございますが、人の命はけふが今日、明日があすとて定まらぬ、世のならひゆるわたくしが、けふが日若しもの事があらうや、知れぬ生身のことなれば、逆さまながら御廻向を、受けます事もあらうも知れず、達者で居つてもなき後でも、親身はあなたおひとり故、何彼につけて金ばうが事を、どうぞお願ひ申しますから、わるい事はどの様にも、お呵りなすつて下さいまし。」ト子にまよふ故ひたすらに、葉「なんだエ、モウそんな哀れつほい事はいつておくれでない。姊となり妹と生まれて来たからは、力になつたりなられたりするのは、そりやア言はないでも知れた事。もうそんな愚癡はやめて、金坊をつれて梅屋敷へでも行つて、ちつと氣ばらしをしてお出で。」ト庭のあそびにあきたるにや、乳母に抱かれ座敷へ來れ

ば、紫雲は抱きつあやしつして、わが子の如くに慈愛み、是れよりみなくもろともに、梅別莊へゆかんとて、内には下女と下男を、残して小三と紫雲は連れ立ち、花屋敷より蓮華寺の、大師へ詣でに出で行きしが、程なくして立ち歸り、紫雲は種々の美味をと、のへ、みなく夕餉を進むる、馳走に時を移しければ、秋の日はや西にかたぶき、入相近くなりしかば、小三は家にかへらんと、き小三ヤレヤレ今日は久しぶりで、つひになくゆるくと、身の上ばなしに鬱を晴らし、まことに保養いたしました。日の暮れるにも氣がつかず、盡きぬはなしをくりかへして、大きに遅くなりました。乳母おまへも支度がよいなら、モウそろく歸らうぢやアないか。」葉「マアおまへ、よいわネ。それに今日は遅くもなるし、内にさしたる用がなくなれば、またかういふよい首尾はないから、今夜ひと晩泊つてお出でな。病氣がよくなつて、座敷へ出るやうになると、又出るといふが手重になつて、いつ來られるか知れないから、寢物がたりにゆつくりと、身の上ばなしの跡をついで、ふさぐ胸をはらしてお出でよ。」小三「私もたまぐではございますし、盡きぬお名残だからどうぞして、泊つて参りたいと存じますが、今夜わたくしが留守のあとへ、ひよつと旦那がお出でなさると悪うございますから、どうも歸らざるないますまい。」葉「ほんにさうさねえ、旦那の御機けんをそこねても悪し、ひと晩でも儘にならないことだねえ。そんなら舟でお歸りな、しかし揺れて悪からうから、駕籠の方がよからうか。」

小三「ナニ、それにも及びません。ずるぶん歩いて参られますから。」紫「それでもお前氣色が悪いに、往還ではくたびれるヨ。」小三「い、エ、却つてすこしづ、頭痛の致す時は、歩くはうが勝手でございます。」紫「さうかネ、そんなら金ばうばかりも泊めてお出でな。のう金坊、おまへは、乳母と爰へおとまりよ。」トいだけきあげれば、金「アイ、坊、をばちやんとこへ、寝ちて、お池の龜ン子つやまいゆよ。」トみななめづらしき子心に、かへるそらの、小三「オヤ、そんなら坊はおとなしくして、おとまりヨ。ば、アのいふ事をよくきいて、だ、を言つてすねるではないヨ。アノ内に居る様におこるとの、をばさんが、泊めて下さらないヨ。あなたが可愛がつてくださるから、直に泊らうと申しまして、おくめんが無くつてこまります。」紫「それだからまことに可愛いのサ。人見しりをする子供は、愛想をしても泣き出すから、うっかり口もきけないが、この子のやうなにごやかな、可愛い子はあります。」小三「坊は誠に仕合者だよ。こんな野廣いところへ泊めていたゞいて、おつかアよりあやかり者だの。そしてアノ坊や、おつかアが居なくなつても、たづねて泣くのではないよ。泣くとの、直灸だよ。をばさんの所には灸がたんとありますから、おとウなくしてお出でよ。」金「アイ、坊おとなしくすゆが、おつかちやんどこいお出でだ。」小三「おつかさんは、アノ内が遠ウいから、歸らないとおとつさんに叱られるよ。」トいひつゝ、金之助をいだきあげ、是れがなごりか悲しやと、云はねど胸にせきあけて、顔

を見つめて目に涙、しばし言葉もなかりしが、疑はれんかと心づき、泣く目をかく、小三「ほんに子供といふものは、何を云つても無我夢中、後生樂なことでありますねえ。」トおもひきつて、帯を直す顔つきも、常にかはりし様子ゆるゑ、紫雲も乳母も何となく、小三の身のうへ案じられ、顔見あはせて、紫「どうもわたしは今ツから、お前を獨りかへすのが、心にかゝつて落ち付かぬから、今夜は泊つて明日の朝、はやく歸つたらよささうなものだ。のうば、ア。」トいひ「さやうさ。旦那だと一晩ばかりの事、譯をお話し申しましたら、お腹立もありますまいから、是非今夜はお泊んなさいましな。」トとめる言いで、小三「さうだけれど、今日こなたへ来る事を、旦那におはなし申さなから、泊つてはどうも濟まないよ。それに是非、お話し申さねばならぬ事もあるから、三松どんでもお借り申して、ちつともはやく歸らうよ。」トいひ「さやうならおばうさんも、お歸りがようございます。小僧さんばかりでは、おかへし申されません。わたくしもお供いたして、龜ン子は又明日、見に参りませう、ねエお坊さん。」金「フウ、ば、ア、坊歸の、厭々だよ。龜ン子の所へ泊ようヨウ。」トいひ「あ、だもの、どうも困りきつた事だ。どう致したら可からうやら。」紫「そんなら斯うしませう。坊と乳母はお泊りと極めて、おつかさんには三松に久助を附けて上げようよ。それでは案じる事もあるまい。」トいひ「然様ならどうぞさうなすつて下さいまし。ヤレ／＼それで落ちつきました。」トいひ「トミナ／＼あん、小三は紫雲と金之助に、

名残のことばが置土産と、なみだを袖にかくしついで、小三「さやうならあなた御機けんよう。御厄介でもござりませうが、金ばうが事をお願ひ申します。ば、ア、そんなら頼んだよ。金ばうや、おつかアはモウ行くから、おとなしくして機けんよくお遊びヨ。あばくだよ、おさらばよ。」ト残るかたなくつどい、輪廻の絆にひかされて、盡きぬ名残のやるせなく、紫雲も乳母ともろともに、金之助の手をひき門口まで、別れを惜しみ送る身より、送らる、身はこの世から、くらき冥途の旅の空へ、消えゆくものと悟りしも、さすがは尊き法の道を、受けたる身ゆゑ御佛の、親身の姉に導きを、させて給はるものにやと、ふり歸りては目に涙、哭く音を忍ぶ親鳥の、雛に別る、思ひにて、氣も絶えくくなる鐘の、無常の風にひゞき来て、耳をつらぬく入相に、驚かされて氣を取り直し、心弱くて叶はじと、別れてこそは歸りける。さる程に金五郎は、今朝小三に別る、時、常にかはりて名残が惜しまれ、歸る心のつらかりしが、主人持つ身の儘ならねば、言葉を契りて別れしかど、その夜は夜詰の番にあたりて、出づる事さへならざるゆゑ、心ならずもとやかくと、案じわびてもせんかたなく、明くる夜遅しと待ちかねて、御殿より内へ歸りても、胸さわぎの常ならねば、食事さへせず著物を著かへ、青柳橋まで急ぎ来る、足も空に飛ぶが如く、小三の許へ来りしは、やうく日の出る頃なるべし。まだ入口の戸もは何事もなかりきと、少しは心も落ち付、金「オイお竹、起きねえか。モウ日があつてゐるぞ。お竹く。」きながら、戸口をとんとんと叩き、金「オイお竹、起きねえか。モウ日があつてゐるぞ。お竹く。」

ト女はおどろき、お竹「ハイく、旦那さまでござりますか。オヤく、おほきに寐すぐしました。」トかけ金はづして戸を開ければ、金「坊主はどうした、まだ起きねえか。小三の病氣が悪かアなかつたか。」金五郎は内へとびこんで、お竹「ハイ、昨日は大きにおこ、ろよいとつて、お坊さんをお連れなすつて、向島へいらつしやいました。お坊さんは、乳母さんと御一所に御逗留で、お獨りあちらの男衆に、送られて昨夜お歸りなさいました。」金「ナニ、きのふ金ばうを連れて、向島へ行つたか。よく歸つて来たのう。それぢやアくたびれて、まだ起きねえのだらう。」トらかみあけてひとめ見るより、「ヤ、、、、。」トやつてん、尻居に倒る、物音に、下女のお竹も何事にやと、かけ来りて様子を見れば、小三は白無垢を身にまとひ、いつの間にやら自害なしけん、朱に染みて死したる體に、同じくわつと駭きて、倒れてわなくふるへ居る。金五郎は狂氣、金「小三、ナゼ死んだ。どうしたのだ。氣が狂つたか。コレ小三。小三々々。」トだきおこし、呼べどこたへもこと、蟲の息さへなきゆゑに、さすが男の心もみだれ、泣聲くもらせ、ともに、切れて、顔の色つやあをざめて、金「コレお竹、てめへが内に一所に寝ながら、小三が斯ういふ様子があつたら、ちつとは知れさうなものだのに、知らずに殺してしまつたか、情ねえ事をしてくれた。」トことわりなり。この時糸川の若い者、清助佐助もかけ来りて、驚くこと大方ならず、何はともあれ向島へ知らせんとて、佐助を紫雲のところへ走らせければ、紫雲も乳母も仰天して、金之助を連れ駕籠にうちのり、飛ぶが如くに馳せ

來りて、小三のすがたを見るよりも、あまりの事の悲しさに、夢か實か辨きかねて、涙にむせぶばかりなり。紫雲は顔に袖おしあて、聲くもらせつ、金五郎に、小三がきのふの様子を語り、金之助の行末までを、とにかく悪みて別れ路に、名残の涙の盡きざりしも、斯ういふ覺悟をきはめし故か、情なや悲しやと、歎かたへに書置の、ありしを乳母は、うは「コレマア御覽じまし、遺書までこんなになすつて、お果てなさるはよく／＼な事。とは申しながら、いとし盛りの、お坊さんをこの世へ捨てて、あとのなけきを思召さぬは、あんまり聞えぬおどうよく、おせまい心でござりました。」トみだに、咽び居る。金五郎は男子ながら、共に心も消え／＼に、歎きに沈みうつとりと、夢現ともわかぬまで、惜しさやるかたなかりしが、流石さかし生まれ故、武士の身でかへらぬ事を、くりかへして歎くこそ、人の思はくも面目なしと、やう／＼思ひあきらめて、かの遺書を手にとりあけ、ひらきて見ればこま／＼と、わが身の爲と家のためを、思ひつめての覺悟の文體、讀めばよむほど後悔の、身を切る、より切なさに、あきらめてもまた涙ぐむ、目をしばた、金老少不定は世のならひ、あすをも知れぬ身の上だと、きのふ小三が言つたのが、思へば記念の言となつたか。浮世の義理とおれがためを、思ひなやみて先だつ不便さ。亡き跡の事まで苦勞にして、意見まじりのこの書置、よむ身にならうとは氣がつかなんだ。いつか世に出し人なみの、樂な暮しをさせてえと、思つた事も水の泡、子供の時

からけふが日まで、可愛や一日樂もせず、日陰の身にて苦勞を爲死に、死んだ苦勞の原はといへば、おれが片時に居ぬゆる、親に不孝といはせじと、その身を捨てし心根は、眞實過ぎて恨めしい。たとへ一人で死んだとて、わが手にかけても同じ事、死なすと仕様はあらうのに、短氣を爲たからみんなの歎き。吁なんだか夢のやうで、かへらぬ事だが不便でならねえ。南無あみだ佛／＼。ト乳母、之助は、つく／＼と「おとつちやん、ナニ泣くのだえ。おつかちやん、佛ちやんになつたかエ。乳母、なぜ泣くよウ。をばちやんもお泣きかエ。坊、おつかちやんこはいよウ。」ト共になきだすあどけなき、業ほんにこの子のかしこい事、誰教へねどおつかアが、佛さんになつたとは情ない。こんな悲しいことを見るのを、蟲が知らせたせるかして、きのふ歸すが氣にかゝり、乳母と二人でとゞめたが、あのと時歸さずばなんのマア、あつたら命を捨てさせよう。歸すも約束歸る身も、みんな定まる因縁ながら、薄命な妹が身の果てや。トさめ／＼と、みな／＼歎きかなしみて、涙に覺も浮くばかり、哀れと云ふもおろかなり。斯くては果てしなき人の、爲にならじと金五郎は、男心を取り直して、紫雲をいさめ乳母をはけまし、野邊の送りもねんごろに、七日々々の訪ひとむらひも、手厚く法會なしにける。かかりし程に金五郎は、をさなき金之助が母に別れて、便りなき身となりしを案じ、かねて小三が存生より、紫雲の許へ預けくれよと、頼みし言葉もあるゆるに、日がら立ちて金之助を、乳母もろ

ともに向島へあづけ、青柳橋の家は取りかたづけ、残るかたなく心を配り、をりく紫雲の庵を訪らひ、金之助を愛しながらも、只小三の事忘れかね、家に在る時は部屋にのみ籠り、お雪にだにこれ等の始末を、祕しかくして語る事なく、氣のひき立たぬも理なり。白翁はじめ家内の者も、金五郎がこの頃にては、急にうつて變りし如く、夜あそびにも出でざるゆゑ、さては身持の直りしかと、喜ぶもののいつとても、何か心に案じ顔、屈託らしくふさぐのを、見るにつけ又白翁は、老いの身の思ひ過しに、もし金五郎が短氣から、小三に怪我をさせしも知れず、それ故にこそふさぐのか、小三の身の上おほつかなし、いかなる事かたつねゆき、様子を聞きて安堵せんと、ひとりひそかに兩國の、小三が家へぞいたりける。

小さん 假名文章娘節川三編中巻 終
金五郎

小さん 假名文章娘節川三編下巻
金五郎

江戸 三文舎 自樂 補綴

第九回

朝夕に木々の落葉を雨と見つ、冬をば告ぐる寂しさに、心も空も時雨月、訪ふ人もなき草の戸へ、友さそひ来て音信ふは、水鶏にあらぬ小雀の、ちよは、よと啼く聲を、聞くにつけても哀れ添ふ、紫雲は小三の亡き後を、弔ふひまに金之助を、慰めてもまだ聞きわけの、泣いては母を尋ぬる故、不便の増して可愛さに、涙のかわくひまもなし。母におくれし金之助は、紫雲や金五郎ともろともに、七日々をば、見やう見まねの子心に、内にかへりて遊ぶにも、さすが血筋といひながら、金「なんまいく、の、ちや菊の花など折りて來つ、庭に立てたる石どうらうへ、たむけて小さき手をあはせ、」
「なんまいく、ば、アこ、へ來て、なんまいく、爲なよ。をばちやんもお出でよウ。」トわけわからね見るにつけ聞くにつけ、乳母も紫雲も俱なみだ。金之助を、紫「これ金ばうや、またそんな事をして、をばさんを泣かせるのかエ。ア、梅檀は雙葉とやら、やがて成人したならば、孝行者にならうのに、」

いたいけざかりのこの子を捨てて、死んだ小三が心の中、マアどの様につらかつたらう。思ひやるほど後生のさはり。ア、南無あみだ佛あみだ佛。」トつまぐる數珠もしめりがち、うは「とても返らぬ縁言と、思ひ直し氣を取りなほしましても、お可愛さうな事を致しました。」トかたるもはなすもなみだゆ 金「ばばア、伯母ちやんとこモウいやだヨ。面白くないかヤ、家行かうよウ。おつかちやんへ行かうよウ。」
 うは「又そんな事を仰しやるかよ、お聞きわけの悪い。こ、がお坊さんのお宿で御座いますから、家へ行かうくとおつしやるものでは御座いません。」金「フウ、坊の家爰でないよ。おつかちやんへ行かうよう。をばちやん、ば、アいけないヨ。坊、家へ歸やせないよ。」業「オ、さうかエ、悪いば、アだぞ。ア、しかし騙しすかしても、まだぐわんぜんもない子供だから、家へ歸らうといふも無理ではない。小三が座敷活業で、なんほ傍には居ないがちでも、三日と離れた事もないのに、やがてもう五日餘。にぎやかな所で育つた子が、こんなさむしい所へ来て、鯉や龜の子が相手だから、どうでも遊びにあきるはず。コレ金坊ヤ、お前は利口者だから、をばさんの言ふことをよくお聞き。アノ、お前のおつかさんはの、それはく遠うい所へお出でだから、モウうちには誰エもお出ではないよ。それだから家へ行かうと云はずに、をばさんの所にいつまでも居るのだよ。」金「坊のおつかちやん死んだから、お寺へ行つちまつたかエ。」業「アイ、さうサ。」金「そいだから坊の家無ちくかエ。」

郎「さうサ、よく分るぞ。それだからこ、が坊やの家だよ。」トうはと二人で慰むる、を「モシあなたへ、どこのか御隠居様が、お目にかゝりたいといつて、入らつしやいましたヨ。」業「さうかエ、そんならどなただか、マア庭口からお通し申しな。」下女「ハイ、ハイ。」ト立つて庭口へまはり、しをり戸開きこなたへと白翁「白ヤレ、よい御住居ぢや。マ、御免ください。」ト座に直りて。「さてハヤわしは金五郎めが祖父で御座るが、たしかこなさんは、小三どのの姉御といふ事ゆゑ、聞きたい事、話したい事、山々あれば孫めにかくれ、わざく尋ねて参つたが、おさし合ひなお客はござらぬか。」トこびながら、なにか様子もわからねば、唯「これはく、何方様かと存じましたら、金五郎さんのお祖父さん、ようマアお出で遊ばした。何にも御遠慮なものは居りませんから、何なりともお心おきなく、お話しなさるが宜しうござります。」ト優しき言葉に白翁は、老いの目やにを、白「ヤレ、姉妹とは言ひながら、小三どのに生きうつし。おまへの顔を見るにつけ、涙がモウ、さきだつやうぢや。叔何から申さうやら、心のうちが取込んで、前後するの老いの癖、退屈ながら一通り、話を聞いて下されや。その仔細といふは、知らしやつた通り、不思議な縁で金五郎と、小三どのと深うなり、たがひに思ひおもはれればこそ、深切づくが苦勞のたね、大概に惚れ合つてゐたならば、人の思はく世の義理にも、か、はらずに樂しみだらうに、あんまり可愛がりいとほがられたから、孫めもその情に迷うて、うちを外の

夜泊りばかり。一ツづ、年はとれども、放埒が直らぬ故、とゞのつまりが案じられて、意見はしても糠に釘、豆腐にかすがひ、きかぬが儘よと、捨てて置いては爲にならず。刃物も折々磨がなければ、錆付いて切れぬ道理。その錆を落すには、普通の世事の合はせ砥では、とても切れる事ではないと、推量をして見る時は、わしが心の荒砥にかけても、切らねばならぬ浮世の義理。お雪といふ孫娘と、祝言までさせたから、とても添はれぬ悪縁と、思つた故に孫めにかくれ、ア、いつでかあつたけな、小三どのの家へ尋ねゆき、初めて逢つたその席で、よろこばせもせず孫めが身の上、かうくゝいふ譯あれば、長うとは言はぬ程に、いやでもあらうが暫時が間、どうぞ縁切つて下されと、無粋なむごい頼みをば、聞いて涙にむせながら、義理と恩とを聞きわけて、ふつつり思ひ切りましよと、云はれた時の私が胸、嬉しさ餘つて不便なは、小三殿の心の中、さぞつらからう悲しかると、おし量られて共なみだ。ア、浮世が儘になるならば、容貌といひ利發といひ、優しい心の生まれつき、孫めと夫婦にしてやつたら、さぞマア互に嬉しがると、思つたばかりでそれも叶はず、是非も泣くく歸つたが、それから後は金五郎めも、そはくする様子もなく、家にばかり居る故に、扱は心が直りしかと、家内の者がよろこんで、機嫌をとるほど鬱ぎ顔、じれては部屋にとちこもり、何か屈託なやうすを見ては、又案じるが親の常、両親の者もお雪めも、同じやうに苦勞がれば、私もやつぱり氣にかゝり、

考へて見るほど合點がゆかず。もし金五郎が若氣の癖で、愛想つかしの腹立ちまぎれ、疵でも付けて騒動を、出来した故にふさぐかと、思つて見れば片時も、案じに胸がやすまらず、わざく青柳橋へ尋ね行きて、見れば思ひもつかぬ人の、栖家となりて勝手口も、變つた事で引越せしかと、あたりの人に尋ねしに、小三どのの知る人によ、子までなしたる身ながらも、男の爲と義理づくで、身を捨てられたあつばれ貞女、近所の者までその當座は、皆惜しがつて泣きましたと、涙ながらの物語、聞いて突胸のわしがびつくり、悲しさ不便さやるせなく、その捨てられし子の行先、聞けば親身の姉御のところへ、引取られしと言ふことなれば、悔みも云ひたし様子も聞きたさ、孫めが顔も、イヤ孫ではない曾孫であつた、見ねば心も落ちつかぬ故、駕籠を飛ばせてやうく來ました。子まである身と知つたなら、何のむごく縁切らせう。なま半包み隠されたが、今となつては却つて恨み、年に不足のないわしが、長命せすばこの様に、悲しい涙はこぼさぬもの、なんの因果で生き延びたか、思へば年が恨めしい。」ト、老いのなみだをくり返し、愚癡になるのも道理なり。紫雲もあましまし聞き取るうち、共に涙を、業ほんに妹が薄命は、約束事とは申しながら、子までなしても日かけ妻、一日半時人なみの、息をもつかぬ苦勞を爲死に。わたくしとても親身といふは、天にも地にも小三一人、力に思ふ甲斐もなく、杖にはなれし今の悲しみ、忘れ記念の金之助で、少しは憂さも晴れますが、まだマアまことにぐわんぜんも

なく、明けても暮れても母を慕ひ、泣くにつけ、すねるにつけ、達者で居たならどうかと、思ひ出しては同じやうに、泣いて涙のかわく間は、ほんに一日もござりません。」白翁「イヤモウ、そりや言はる、までもない。お前の胸を推量すると、私が胸もはけさくやうで、矢も楯もたまるこつちやない。マ、マ、それは左もあれ、孫めが倅はどこに居るか、ちよつと逢ひたい、逢はせてください。」業「ほんに左様でございましたネ。金坊は奥においでかエ。乳母一寸連れておいで。」トは、うばよりさきへかけ來金「をばちやん、坊、おとつちやんお出でだとおもつたヤ、餘所のおぢいちゃんだネ。」業「是れはしたり、よそのお祖父様ではないヨ。是れは坊ヤのお祖父さんだから、手をついてお辭宜をおしよ。」白「ヤレ、おとなしいよい子ぢや。ドレ、祖父の側へ來やれ。オ、よく言ふことをきくぞ。そんならお土産をやりましょ。サア、手を出しやれ。オ、てへくがよく出來たぞ。ヤレ、可愛いい好い子ぢやナア。」トやうかん一棹出しやれば、金「をばちやん、コレお菓子、お祖父ちゃんおくえだ。有り難うごじやイまちゆ。」業「オヤ、よいお菓子をおいたゞきだの。よく忘れずにお禮を申したぞ。よいお祖父さんを持つて、坊は仕合ものだぞ。」白「ハ、ハ、ハ、イヤ、この坊ヤを見るにつけ、初めて逢つたわしでさへ、可愛くつてならぬもの、いくらしつこく意見をしても、金五郎めが聴き居らぬも道理かエ。まして小三殿は女の事、このマアいたいけな子を措いて、飽きもあかれもせぬ中で、男

のためと身を捨てられたは、貞女ともあつばれとも、賞めても是れが稱め盡されうか。しかし親身のこなさんが、身に取りてはこの爺を、鬼とも蛇とも悪魔とも、さぞマア憎いと思はつしやろ。ガ、その言譯ではなけれども、この子を家へ引取つて、晴れて金五郎が倅と披露し、小三どのの亡き跡も、ねんごろに弔はせましょ。せめては夫れをなぐさめに、思ひあきらめて下され。」トなみだふきく、いひさ限りなく、涙のと「だん、厚い思召し、何とてお恨み申ませう。みんな過世の因縁ゆゑ、どうも仕方もござりません。それにつけても姉妹が、身の上のあらましを、おはなし申すもお恥かしいが、わたくしどもが生立は、かやうくでござります。」ト兄弟二人母なき故、小三が身は生まれ落ちより、文之をさづけ、その恵みにて里に行きしが、早く父にも死に別れ、里親に騙されて、うき川竹に沈みし事、小三も金五郎と共に育ち、互に末を契りしに、金五郎は本家へ養子となれば、小三は便りなき身をかこち、心狂ひて鴨川へ、身を沈めしが不思議にたすかり、悪者の手にわたりて、つひに同じ花街へ賣られ、唄妓となりて暮すうち、縁ありて金五郎にめぐり逢ひしより、二世を契りて深くなり、つひに子どもの出來しゆゑ、身請をされて圍はれし事、又その身も同じ頃に、さる人に請け出され、この別莊に養はれしが、便りの人に早くわかれて、頻りに佛門の志願おこり、髪を剪り尼となりつ、世をのがれて暮すうち、妹が身の薄命から、浮世の義理にせばめられ、添ふ事ならぬを覺悟して、心づよく

も身を果せしは、みな男の爲を思ひ、操を立てぬくこゝろざし、妹ながらもあつばれ貞女、只一すぢの不料簡と、思召さすに心の中、推量してやつて下さいまし。」ト
 一、たれば白翁もかふるゐをながし、か白「さてきて姉妹揃ひもそろひし、貞婦といはうか、義婦といはうか。殊に小三は幼いときから、金五郎と一緒に育ち、家出して死んだと聞いた、養ひ娘のお龜であるとは、夢にも知らぬが大きなあやまり。さういふ譯のある事を、養子の身ゆる金五郎も、遠慮して人にも明さず、ひとりで苦勞をして居たかと、思へば小三が心の中と、金五郎が胸の中が、不便でどうもなりませぬ。」ト
 二、思ひやりつゝうちなげく、ともに泣いては物がたり、はなしは涙ではかどらず。うばも次の間に、金之助をねえ、叔も白翁は、泣く／＼紫雲にわかれを告げ、家に歸りて金五郎の、両親はじめお雪にも、小三が成行紫雲の身の上、金之助が事までも、くはしく語りける程に、皆もろともに涙にくれて、小三を惜しまぬ者もなし。この上は少しも早く、忘れ記念の金之助を、引取つて小三の亡きあと、ねんごろに弔はんとて、金五郎にもこのよしを相譚ふに、喜ぶこと限りなく、それから日をえらみ向島より、金之助を乳母もろともに呼びむかへ、お雪の子となしていつくしみ、小三は世になき數には入れども、あらためて先妻と呼び稱し、佛事も手厚く行ひければ、金五郎はいへば更なり、紫雲乳母も上なく喜び、家内の者も朝夕に、金之助を掌中の珠と愛し、唯すこやかに成長するを、指をり數へて暮すほどに、早くも小三が百箇日に當

りければ、金五郎は寺に詣でんとて、金之助を乳母に抱かせ、供の男を引連れて、菩提所へとて出で
 行きける。あとにお雪は下女と共に、金五郎の部屋をかたづけなどする時、下女あやまつて煙草盆を打ちかへしけ
 りしかば、下女はこれを手にと、下女「オヤ、御新造さんえ、一寸御覽あそばせ、女中のお文がございま
 したよ。」お雪「ドレお見せ、ほんにねえ。オヤ、常のお文だと思つたら、書置の事としてあるから、こ
 りやア小三さんの書置だよ。わるい物があつたネエ。モウ是れを見たら、中を讀まないのに、胸がい
 つばいになつたヨ。」下女「オヤ、書置でございしたかえ。ほんに思ひ出してもお可愛さうでございま
 すネエ。」お雪「さうさ、大かた若旦那の事が、いろ／＼書いてあるだらうから、見たさも見たいが、涙
 のたね。それにひよつと知れでもしたら、お腹をお立ちなさんと悪いから、マア／＼、よしにしませ
 う。」ト
 三、母親が出で來りて、母「お雪や、モウ今に金五郎も歸るだらうヨ。早く其所を片付けておしまひ。」
 お雪「ハイ、モウしまひました。アノおつかさん、一寸是れを御覽なさい。まことによい手で御座いま
 すねえ。」母「ドレ／＼、オ、書置の事、ア、小三どのの書置かエ。またそんなものを見つけて出して。」
 お雪「それでもお杉が見つけましたもの。開いて見ましても宜しうございませうかネエ。」母「不遠慮な
 れど、あんまり可愛さうだから、ちつとばかり開けて見なナ。アノ杉や、おまへは、お煎茶の支度
 をしておくれヨ。」下女「ハイ／＼、かしこまりました。」ト
 四、下女は勝手へ立つて行く。お雪はこは

逢ふは別れの初めとは、かねてより人の身の、定めなきに引比べ、覺悟致しをり候ひしに、やうやく唯今思ひあたり候ま、この世の御名残に、一筆書き残したる。まづとや、御平らかに御くらし被遊候御こと、此の上もなう御よろこび申し上げたり。さてしもわが身事、いやしき賤のふせ家に生まれ、草葉の露のはかなき身を、御父君の御情にて、やうく人となり候御恩の程、海とも山とも詞には盡しがたく、夫れのみならず親姉までも命を繋ぎ、御恵みの淺からぬ御事、いつの世にか、報いまるらせんやうもなく、あまつさへ一日の御恩も送らず、かへつて御辛勞のみかけたり。この身の罪のふかき御事、申し上げべきやうも御座なく候。えにしは神のむすばせ給ふ御事にや、もとよりのやしきわが身ながらも、君の御情にあづかりたりより、ひと方ならぬお氣がねのみ遊ばしざらふも、みな我が身ゆゑと存じ候へば、身もよもあられず、たゞつたなき身をのみ恨みたり。御祖父さま御初めお雪さまにも、さぞくわが身を御憎しみ、御うらみ被遊候はば、はてはては君の御ためあしからむと、行末のこと存じつゞけ候へば、ながらへをり候ほど、つみをかさぬる思ひにて、後の世さへも空恐ろしく、又このうへにかすくの御苦勞かけ参らせんもはかりがたく、せめてはわが身を果し候はば、するく君の御心も安かるべしと、とくより覺悟はきはめ参らせ候へども、女心の淺ましく、御名残のみ惜しまれて、けふまでながらへをり候御事、まことに

まことに御恥かしく存じたり。たゞく此のうへは、お雪さまと御中よう、御祖父様御はじめ御両親さまへも御孝行のほど、願ひ上げたり。二ツには姉事は、御存じの通り、まことに便りなき身のうへ、これまでは及ばずながらも、互に便りいたしをり候へども、末々は猶々たよりなき身にさふらへば、何とぞ御見捨てなう御めをかけ被下候やうねんじ上げたり。また金之助事はぐわんぜんきわんぱく者にさふらへば、わが身なきのちは、たづねわび、泣きむづかり候はんかと、今より目に見え候やうにて、みれんながら、ふびんにぞんじたり。姉方へも昨日まり、よそながら、いとまごひのついでに、金之助の事も、よく頼みおき候へば、あの方へ御預け下され、西東もわかり候やうに成り候はば、母なし子とて、人に笑はれぬやう、手ならひなど、よく御をしへ下されべく、かへすくも君の御身もち、唯今までのやうなる御ころにては、御ためあしく候ま、是れより御心を入れかへ、無理なる御酒を御すごしなされず、御宿にのみ御出であそばし、お雪さまにも無理なる御事御まうしなされぬやう、願ひ上げたり。なほ此のうへの御ねがひには、後の世の御事に御座候。百とせの御よはひ過させ給ひて、未來は一つ蓮のうてなこそ、ひとへに願ひ上げたり。まことにをさなき時より御親しみ申しあげ、時の間の御別れだに、心うく存じさふらふに、かくながき御別れとなり、さかさまなる御ゑかういたゞき候は、いかなるむくい因果にやと、繰り

かへし、まことに御名残惜しさ云はんかたなく、心も亂れさふらふて、申し上げ度き御事は、濱の眞砂の盡きせねど、明けがた近き鐘の音に、死出の山路へ心せき、をしき筆とめたりと。

道しらぬくらきよみぢへ初旅の身は御佛を力にぞして

と読み終り、お雪も母ももろともに、目を泣きはらして顔見あはせ、なみだを袖に、母「ア、ヤレ／＼、よしない文を開けて見たゆゑ、悲しさも悲しし、胸がせまつて、大きに涙をこぼしました。金五郎の迷ひしも尤もな筈、美人だとお祖父さんさへ小三が容貌を、おほめなさる程な生まれつき、容貌は格別な事だが心だてと云ひこの手蹟まで、美しいとも見事とも、約束事とはいふものの、若死をする故に、人にすぐれて生まれ来て来たのか。金五郎の爲を思ひ、お前に義理を立て通して、名を汚さない貞女の鑑。ほんにお雪や、必ず仇に思ひなさんなヨ。この書置はおまへの爲には、實によい手本だヨ。此の様に金五郎を大事にして、道を立てるが女のたしなみ。金坊も龜畧にしてはすまないヨ。」お雪「ほんにさうでございます。わたくしが人なみに、よく氣のつくやうな生まれなら、このやうな事にはなりませんまいに、因果な事でございますました。」トおや子二人がくやみ泣き、なみだに袖を下女「若旦那さまのお歸り。」トつづるに母 お雪は手早く文をしまひ、泣顔かくして出で迎へば、金五郎はそ 金「お雪、どうぞしたのか。涙ぐんだ顔つきだが、ハ、ア大きな形をして、又おつかさんに叱られたの。」お雪「イ、エ、

そんな事ではございませんが。」トあと言ひかねしが「アノ、金坊はどう致しましたエ。」金「ば、アと先へ、奥へ行つた。」ト びをしめながら、「ア、ヤレ／＼草臥れたぞ。ほんにお雪、けふはの、寺参りをし、直に向島へ行つたら、紫雲さんのお傳言があつたぜ。おめへに金ばうを連れて、ちつと泊りがけに來いとヨ。」ト しばかりゆる 金五郎はふしんに思ひ、金「ハテ、どうもおれは、おめへの様子が分らねエが、なにをそんなに鬱ぐのだらう。ハ、アきこえた。こりやア何だの、おれが小三の寺参りに行つたから、それで癪にさはつたのだの。」お雪「どう致してマアそんな事が。」金「心になけりやアどういふ譯だか、心をおかすと言つてきかせな。一生添はうと思ふには、隔てぬでこそ夫婦といふもの。」お雪「そのへだてるといふ事は、誰がわたくしに教へましたか。」金「なんの事たな。こつちはそんな覚えはねえもの。」お雪「外の事はともかくも、小三さんの事ばかりを。」金「へだてたといふ事か。」お雪「ハイ、それ故にこそこの悲しみ。先から私に、斯うくだと、譯をお聞かせなすつたら、あなたにも御苦勞をかけますまいのに。」金「なんだナ、又思ひ出したやうに。モウいくら言つてもはじまらねえ。未練も大概にやめてくんない。」お雪「しつこい様でございますが、何につけ彼につけて、つね／＼忘るゝ事もなく、みんなわたくしがおろかゆゑだと、この身を恨んで居りますが、けふは取りわけいつもより。」金「百箇日だけ氣になるか。」お雪「またそんなことばつかり。おうたがひが晴れませぬから、申しますか

らお腹をお立ちあそばしますなヨ。アノ、あなたの御留守のうち、お煙草盆の引出から、小三さんの遺書が出ましたゆゑ、ツイちよつと。」金「見たので氣色にさはつたらう。」お雪「なんほ愚かなわたくしでも、先から深い譚あることを、知つて居つたら、どうでもいたして、あなたのお側へ小三さんを、呼びますことも出来ましたらうに、なぜ隠しては下さいました。」金「モウどのやうに言つたとて、ともかへらぬ繰言だ。小三の事をかくして居たは、おれが一生のあやまりだから、堪忍してくんな。年もいかねえおめへにまで、いろく苦勞させたのも、みんな因縁約束事。この上は言ふまでもねえが、金ばうを可愛がつてやつてくんな。ア、何だかひどく鬱いで來た。お雪、おめへいい子だから、茶椀に一杯酒を持つて來てくんな。そのうちよつくり奥へ行つて、皆の機嫌を取つて來よう。」ト羽織つかけ奥へゆく。お雪は酒を持ち來「お雪、金坊はの、祖父さんの側に媚び付いて居て、好きなねだり事をして居るぜ。」お雪「左様でございますかエ。お祖父さんにはよいお相手でございます。ハイあなた、御酒を。」ト茶わんをぼんにの「金」オット有り難し、御苦勞だつた。」ト手に取りあげていきもつかず、ぐ「オヤあなた、召上げるのなら、煖めて參ればよう御座いましたネエ。」金「なアに冷でもいい。是れで氣色が直つたやうだ。」お雪「ほんにその事もあの書置に、いつそ案じて書いて有りましたヨ。」金「さうだつけのう。いつでもこのぐい呑みでは、小三にひどく氣をもませたが、ア、今思へば是れも後悔。モウ

モウふつつり止めにする。思へば小三はおれが爲の、善知識でもあるだらう。」ト何かにつけて身のおこも小三の貞心、天に通ぜし故にこ。是れよりして金五郎は、主君へ忠勤忘る事なく、白翁初め兩親に、孝そ。あつばれ賢女といひつべし。を盡す事日にまし厚く、お雪とも中睦ましくして、金之助を愛育し、紫雲の庵も四季折々に、訪ひ音を信れて疎遠せず。忠孝信義全き故に、家内に和順の基をひき、お雪の腹にも子を儲けて、幾千萬代賑はしく、益家富み榮えける。かかる目出たき因みによりて、金五郎が實の親、文之丞も年來の、勘氣をこの時免されしかば、京師の家には養子をなし、その身は直に東へ下り、親族眷屬に對面して、喜ぶ中に小三の身の果て、聞いて悲歎の涙にくれ、頻りに無常を觀するものから、終に髪を剃り佛門に入りて、身を雲水に任せつ、諸國行脚に出でしとなん。

小さん 假名文章娘節用三編下卷 (大尾)

清
談
若
綠

清談和歌翠初輯敘

南都の帝の御時に、撰まれたりし萬葉集には、三月月をもて嬋娟なる、處女の眉ひきに譬へられ、柳の眉とは唐人が、美人を贊むるの形容なり。こゝに清談若翠も、則ち春の景物にて、常磐の松の緑さへ、春は一しほ色増すと、古人も既に詠まれけむ。是れ青陽の讚詞、如月彌生卯月立つ、樹々の梢もまた若緑。夫れから日々に繁り行く、それに倣ひて此の冊子を、行末長く世間に、茂らせんと作者が新案。そこで霞に引く紅の、夜明いさまし初日の出、鶯來なく垣ほの梅も、東風和暖に綻ぶる、其の春の日の門口に、立て添ふ緑松と竹、契りも千代の末掛けて、何時もかはらぬ御最良を、願ひ奉ると申すになん。

江戸曲山人戲題

清談若綠卷之一

東都曲山人著編

第一回

梓弓春立ちしより年月の、射るが如しと古歌にもいへり。實にや月日に關守なく、隙ゆく駒の足掻は早く、昨日は其處の花嫁と、人に覗かれ視られしも、今日はたちまちやかましき、老婆様となりて狎猫と、ともに忌まる、酒の席、長い浮世にみじかいは、實に人間の盛りなり。かくて假名屋金五郎は、其の後お雪と仲睦ましく、次男金次郎其の次に、女兒お銀を産ましめ、いと賑はしく榮ゆるほどに、はや夢の間に十年あまりの春秋を送りければ、總領なる小三が子、金之介は十九歳、や、男装に
なるにしたがひ、色は白く眉秀で、背も高からず低からず、父金五郎が壯盛りに、優りはするとも劣らぬ人品、殊に伶俐じき生まれにて、一を聞いては十を知る、發明なれば武藝は元より、手書き物讀み其の外の、遊藝にもまた暗からず、見聽く人毎に譽めぬはなし。金五郎夫婦はものかは、祖父白翁

も金之介をば、たゞ掌中の珠の如く、寵愛詞に述べがたく、末たのもしくぞ思ひける。此處に小三が姉向島の、紫雲はもとより摘髮の、若後家となりしより、たよりに思ふ妹は死して、浮世に頼みもなきものから、さいはひ近所に難儀する、女兒のありと聞きおよび、人を立ててこれをもらひ、藝など仕込むを樂しみとして、今年と暮れ來年と、過す程に此の女兒、お政は年も十餘り、六歳の春とぞなりにける。其の生まれ立ち直朴にして、縹緞は式部が源氏にいへる、若紫もこれにやは、勝るべきとおもはれて、其の品容の婀娜なるに、これを見る人たましひを、動かさぬはなかりしとぞ。されど、お政は年こそゆかね、其のこゝろさま貞實にて、戯れたる方に心を移さず、朝夕母によくつかへて、なまめけることはなし。ある日假名屋金之介は半日の暇を得て、久しく伯母の左右をも聞かず、殊に彌生の初めにて、堤の櫻もほらくと、咲きそめたるよし人も言へば、夫れを見がてら向島を、こゝろざして立ち出でつ、彼方此方を三圍や、いそがぬ道をふらぐと、歩行も遅き牛島わたり、木々は染めねど秋葉の森、はや其の家の門へ來れば、手拭出して足につく、塵など拂ひおとしつ、金「ハイ、御免なさい。」ト、言ふ聲聞きつけ、年來紫雲に使はるゝ、お澤と云へる婢女は、年も三十七八にて、萬事如才のないをんな、澤「オヤ、若旦那さんで御座いますか。」ト、言ひながら障子を開け、澤「サア、お上り遊ばしまし。今日はまことに好いお天氣だから、萬一入らっしゃるかと思ひました。」

金「伯母さんはお變りもないかエ。何だか種々忙がしくつて、兎角モウ御無沙汰勝サ。」澤「ハイ、例も御機嫌宜う御座います。併し牛僧今日は、お寺詣りから大師さま、観音さままで廻ると仰しやいました。モウ些と先刻、仁介を連れておいで遊ばしました。」金「左様かエ、夫りやア残念。併し御息災なら、お目に懸らすとも宜い。そんなら吾儕も直に是れから、奥の方まで行つて見て來よう。」澤「アレまア、宜いぢや御座いせんか。お政さまはいらっしゃいますから、まアく、お上り遊ばしまし。そしてまだ木母寺の方は、花も一向咲かないさうで御座います。」ト、留める折からお政は驅け出で、政「オヤ、兄さん、よく入らっしゃいました。お上んなさいまし。」澤「私が幾干お留め申しても、何方へか入らっしゃると仰しやつて、お聴き遊ばしませんヨ、憎らしい。貴嬢、お留め遊ばせ。」政「澤も折角左様申しますから、マアく、鳥渡お上り遊ばせナ。」金「左様かネ。實は女許りの所へ上り込んぢやア、人間が悪いと思つてサ。」澤「ホ、。伯母さんも失張、女ぢやア御座いせんか。ホ、。ホ。」金「夫れは左様だけれど。」澤「ナンノお前さん、他人ぢやアおあんなさるまいし、誠にお堅い事ばかり仰しやいますねエ。さアくお上んなさい。」ト、引き上げられては了得また、否にはあらぬ猪名の野や、小篠が下に吹く風も、心動かす圓居なり。澤「さア、漸うお上んなすつた。實はモウお政さまと唯兩人で、寂しくつてなりません處。サアお嬢さん、貴嬢のお子舎にいたませう。見晴しが

宜いから。」金「慥か堤がよく見えたツけ。彼處が宜いネ。」澤「種々散らかつてをりますから。」金「ナニ、其様な事にやア構はねえ。ハ、ア、お政さん、針仕事が大分よく出来るネ。感心だ。」政「ナニ、一向出来ませんから、常住叱られます。」ト、言ひながら、其の縫物を片脇へ押付けて、政「アレ御覽なさい。此の頃は大層人が出て参りました。」金「成程、是りやア大勢だ。何だ、お師匠さんでもあるめエ。」澤「まアお茶を一ツ。お嬢さん、ソレ何か有つたぢやア御座いませんか。」政「ア、金玉糖が。餘りちつとだねえ。」澤「まア、夫れでも宜う御座いますわ。今にまた御馳走をいたします。」金「無理に引き上げたからにやア、定めて御馳走は悉皆あるだらう。アハ、、、。」澤「夫れはモウ、當然で御座いますねエ。お嬢さん。」金「此間伯母さんに聞けば、大層琴が巧くおなりだといふ事だ。何ぞ彈いてお聞かせなさいナ。」政「ホ、、、。慈母さんが其様な謙ばつかり。ちつとも出来は致しません。」金「何も其様なに吝しがらずと、宜いぢやアないか、ノウお澤。」澤「左様サ。お好みならお弾き遊ばしませしナ。」政「夫れでも出来ないものヲ。」澤「アノ、此間お貰ひ遊ばした繪を、若旦那さんにお目に懸けなさいナ。」政「ホンニ、誠に綺麗な繪を、お鄰から貰ひましたわ。」金「左様か。ム、成程こりやア美しいノウ。當時は錦繪も強氣によくなつた。併し左様いふと老年めくけれど。」澤「だんく上手になりますネエ。」政「此方の御覽遊ばせ。景をよく畫きました。」金「ム、成程是りやア宜い。」

ト、二人は暫く繪に見惚れ、餘念なき體を見てお澤は莞爾をいらせ、澤「ホンニ、左様していらッしやる所は、まことに何方も劣り勝りなし。桃と櫻の一對の御夫婦様。何卒早く左様いたして、上げたもので御座います。」政「オヤ、否なお澤だノウ。」ト、顔少し振らめて身をもぢれば、金之介も未だ了得に、戀には疎き少年なれば、同じく顔を赤くなし、何とも言はず繪を見てゐる。澤「夫れでも此の間旦那様紫雲の仰しやいますには、年齢といひ容貌といひ、似つかはしい金之介とお政、自由になるなら夫婦にして、和合く暮せたら何様にか、嬉しからうと思ふけれど、金之介こそ吾儕が爲に、マア甥とはいふやうな者、母も元來本妻ではなし。此方からは言ひ出されぬ。思ふ様にはならぬものサと、何ぞと申すと其のお話。貴嬢も亦何様かすると、金之介さまのやうな優しいお方が、廣い世間にも澤山はあるまい。彼様いふお方の御新造様になるお方は、どんなマアよい月日の下で、生まれた人だらうと、一度ならず二度が三度、おつしやつたでは御座いませんか。ホンニ、何卒左様なりませと、數ならぬ私共まで、何様に嬉しう御座いませう。」ト、言はれて此方は恥かしさに、愈緒らむ緋櫻や、露持つ花の風情にて、差俯向けば金之介も、又言ひ出でん由もなく、聞かぬ如くに繪を見てゐる。お澤は餘りに言ひ過し、年行かぬ身の二人とも、物言ふ機も中垣の、あればぞ結句妨げならんと、少し笑ひに紛らして、澤「ドレ、なんぞ御馳走の準備にでも掛りませう。」ト、言ひ捨てて、つと

立つて行く。金之介は顔を上げ、金「お澤は誠に謙ツ吐きだネ。」政「何故で御座います。」金「夫れでもお前が言ひもしないことを、言つたなンぞと言ふし、また伯母さんの事も、皆あれは謙だらう。吾儕のやうな者を、伯母さんはマア冤も角も、お前が左様言つて呉れよう筈がない。何故といふに此の向島は、意氣な人や通人が、寄り集まつて居る處だ。吾儕等なンざア其の衆中の、足下へも寄ッ付かれねえからサ。」政「そりやアどんな人が居りますか、ツヒに他所へ參つたことがないから存じませんが、假令意氣な人があらうが、通な人があらうが、其様なのは嫌ひで御座います。」金「そしてどんなのが宜いエ。」ト、お政の顔を覗き込めば、お政は莞爾、政「アレ、其様に御覽なすツちやア否で御座います。」金「それでもお前が挨拶をしねえものヲ。さア、何様なのが好きだヨ。左様お言ひ。」ト、猿摺り寄つて覗き込めば、お政は其のま、逃げもせず、政「ハイ、此様なのが好きで御座います。」ト、思ひ切つて言ひながら、人指指で金之介が、頬の邊を些と突けば、金之介は思はずも、戰慄身に染む戀風の、やる瀬なきまで可愛くなり、抱き付かんとする處へ、ばたく来る婢女お澤。夫れぞと二人は身を少し、離れて此方を打見れば、お嬢さん、餘り何も御座いませんから、おでんを取つて参りました。冷めない中上げませう、お前様も御一所に、召し上るが宜う御座います。」政「オヤ、左様かエ。其様な直に持つてお出でな。何ぞお看でもあると宜いが、慈母さんがお精進だから、お留守には却

つて悪いネ。」お澤「左様サ。不斷から構はず、食べろくと仰しやいますけれど。ネエ、若旦那さん、何様も可笑しなもんで御座います。」金「マア、其様なもんだらう。然して精進物の方が、第一身體の養生にやア宜いと言ふことだ。ハ、ハ、ハ。」お澤「その代り、澤山取つて参りました。」金「如何さまお澤が氣前を見せたノ。夫れでも此様なものが、近所にあつて宜いノウ。」政「ナアニ、花の中ばかりだからいけません。」ト、是れより食事にかゝるなるべし。

第二回

斯くて其の後金之介と、お政は兎角戀しさの、忘れやらすはありながら、紫雲が家にあるときは、目をもて知らず事さへならず、唯其の顔を見るのみを、時にとりての憂さ晴し、儚なく心を慰めて、十日餘りを過す程に、今日は殊更天氣好く、堤の櫻も爛漫と、咲き亂れたる花の色、四方の遊人集ひ來て、是れが門邊は市をなせど、お政は兎角金之介が、佛のみ戀ひ憧れ、物思はし氣の有様を、紫雲は夫れとも心は附かず、はや年頃の嬢の兒、かの鬱症の病もや、出でなんかと案じられ、紫「コウお政、お前は何か此の頃は、濟まぬ顔付をして、元氣が落ちたが、何處ぞ鹽梅でも悪いのかエ。若し左様なら隠さすと、お醫者さまに診ておもらひヨ。春先は腹の病が動くやらいふこつたから、早く

お薬でも食べたが宜いヨ。」ト、言はれてお政は莞爾とし、政「オヤ、其様な氣ぢやア御座いませんが、何か異しく見えますかエ。」兼「左様サ。何でも鬱ぐやうだ。何ともなくば結構サ。些と氣晴しに此の頃上げた、碇とやらをお復習ひナ。あれはとんだ手が細かで、手琴の中では一番だノウ。澤や、其處の琴を持つて来て遣んなヨ。」ト、言はれてお澤は袋をかけた、嗜みの琴持ち出せば、母の命の呑みもならず、お政はやがて、柱を掛けて、調子合はして弾き出す。折柄一羣騒然と、先を拂ひし花見の同勢、元より低き眞柴垣、伸び上らねど縁先より、見れば是れなん大家の内室、又姫君にや眞先には、燃え出る許りの唐紅、同じ色なる打紐の、總は花よりまだ赤きを、結び下けたる對の箱、次に長刀その次に、結構善美を盡したる、蒔繪の乗物日覆は、是れも眞紅の花やかさ。朱の長柄傘差翳し、徐練り行く其の行装。御跡よりは緋網代や、銀乗物さへ幾干となく、列を亂さぬ嚴しさ。目を驚かすばかりなれば、紫雲は更なり琴弾きさして、お政も縁へ起ち出でツ、暫時見送り、政「あれはまア、何方さまで御座いませうネ。殊に綺麗で御座います。」兼「左様さノウ、彼の立派な事。同じ人間に生まれても、彼様な結構な方もあり、吾々はおろか著替一つ、自由にならない者もある。ホンニ、上を見れば方圖がないと、昔の人の言つたは感心。彼れでも亦其の御身では、不足に思召すこともあらうヨ。」ト、話す折柄菖蒲革染の、袴をはいたる若黨が、若頼んませう。」ト言ふ聲に、是れは何だと半ば

は仰天、お澤は其處へ驅け出でて、譯「ハイ、何方から入らッしやいました。」若「それは斯波家の奥女中、八十島殿と云はる、方が、何やら御用の筋がある。此處の主人に逢ひたいとの事、苦しからずば乗物を、是れまで昇き入れても宜う御座るか。」ト、思ひよらねばお澤は狼狽、其の挨拶もせぬ中に、早昇き入る、緋網代の、乗物ひとと昇き据ゆれば、中より出づるは年のころ、四十ばかりの氣高き婦人、桂の褌とり持つて、徐々上れば何事にや、合點のかねど主人の役、紫雲は其處へ立ち出でて、上座へとほし、兼「妾は此處の主人の尼、何の御用。」ト、慇懃に、問へば老女の八十島は、莞爾と笑つて、ハ「オ、お前が、此の家の御主人か。様子を言はず押掛け客、嘸不審に思はッしやらう。態々是れへ參つたは外でもない。今日姫君さま、此の櫻を御遊覽、其の行列はお前方も、よく拜ましやつたであらう。先刻此の表を通りの時、十六七の娘の兒、琴を弾いてあられたが、お駕籠の中からお目に留り、今御小休へ入らッしやると、吾儕を召して何者の娘か孫か知らねども、何卒侍女にして欲しい、早う行つて聞いて見やとの御意に因つてすぐさま、參つたは其の譯サ。なんと御主人、斯波さまの、姫君さまの御侍女、申さば是れも出世の筋。勿論姫君さまの御目にとまつて、御所望なさることなれば、著類その他何一ツ、お前方に苦勞はかけぬ。皆お上から下さる譯。何様であらう。」ト、藪から棒に、言ひ掛けられては闇の夜に、小判が降つて來たよなもの。紫雲は嬉しさ有りがたさ。まづ速かに

お政を呼んで、八十島に引合はせ、紫「さて、段々の思召し、有り難いと申さうか、勿體ないと申さうか。お受けの言葉に困ります程、何も仔細のない事なら、厚い仰せに随ひまして、不束ながら直様に、差上げますので御座いますが、仔細と申すは外でもなし。母子が斯うして居りますのも、皆本店から一切仕送り、其の本店の息子の方へ、是非々々嫁に貰ひ度いと、番頭どもからたつての掛合。さやう致せば私も、益安堵と申す譯、是れも、早速承知の挨拶、致すべきで御座いますが、形は此のやうに大きくても、未だ漸う十六歳、遅からぬ嫁入相談、何れ其の中挨拶をと、申して置いて娘にも、今日まで申し聞かさぬ程。併しながら此の節より、お館様へ御奉公に、出すと申さば本店で、よもや承知はしてくれませうまい。よしや承知は致しても、夫れでは手前の義理も立たず。此處の譯をお汲みとり、宜しいやうにお断りを、貴嬢さまから願ひます。」ト、母が言葉に初めて知る、思ひもよらぬ縁談に、お政は只管呆るゝのみ。八十島は領いて、八「成程、左様した譯ならば、御奉公には出しにくからう。勿論姫君さまの仰せにも、藪から棒に申したとて、承知あるか否やも知れず。若し又其處に差支があつて、出されぬとなら、是非もないが、唯折々に十日二十日、乃至一月二月でも、館へ逗留に参るのみは、苦しいもあるまいから、其れも能う心得てと、御意のあつたは此處の處、何と其様なら姫君さまの、御意の通り逗留に、上げるはなんの仔細もあるまい。願つてもない宜い御縁。ホン

ニ、此の兒が僥倖な。」ト、言ふに、紫雲は恐れ入り、紫「はしたない此の娘を、夫れまでの厚い仰せ、何で否を申しませう。御奉公と申すでなくば、何時なりと差上げます。」八「さう聞いて吾儕も安堵。ヤレ／＼不意に掛掛けて、種々お世話になりました。嘸姫さまもお待ち兼ね、些とも早く参らうヨ。」ト、暇乞さへそこ／＼に、供人促し乗物に、ひらりと乗つて歸り行く。後見送つて、紫「ア、ヤレ／＼何事が出来たかと、些との閒肝を潰した。併しお政僥倖な。斯波さまといふは假名屋の御主君。殊に將軍さまの御連枝で、まことに富貴なお館だから、是れを御縁に未長く、お出入りすればお前ばかりか、親類までも皆の僥倖。モシお迎ひが来て上ツたら、能く氣を附けて思ひの外だと、言はれぬ様にしなさい。」ト、言はれてお政は何とやら、うしろめたさにもち／＼と、政「有り難い事は有り難いが、ツイしか見た事もないお館の奥、何様したら宜いものか、一向様子が知れませんか。」紫「夫れはまた彼のお方が、引廻して下さるだらう。只物事内端にして、知れないことは人に聞き、我儘といふ氣さへ出さねば、人の交際は出来るもの。不案内は元よりのこと、何も構ふことはない。」政「マア夫れは左様といたして、今彼のお方へ仰しやるには、本店から私を、貰ひに来たとは夫りやア、正真で御座いますか。」紫「オヤマア、何だ。仰山な顔をしてサ。全體すぐ其の事を、話さうとは思つたが、左様急ぐ事でもなし、夫れにまた吾儕が胸に、些と落ちない事もあるから、お前には未だ言はな

んだが、此の頃出た時番頭に、路で逢つたら一件は、何様で御座いますと催促故、未だとつくりと娘にも、言つて聞かさず夫れ故に、御挨拶も致さぬが、他ではなし本店の事、なか／＼龜罫には存じません。何れ近々御挨拶をと、言つて別れてモウ五六日、左様々々捨てても措かれぬ義理合。今日は既に其のことを、お前に言つて聞かさうと、思ふ處へ不意のお客。好い時にはよい事が、重なつてくるものだ。併し御奉公は結構と、云ふ様なものの僅の當座、此方は一生の身の落ち著き。夫れと是れとは一ツにやアならない。其處でお政、知つてのとほり、本店の息子喜太郎さんは、痘痕はあり背は低し、餘り見よい男でもない。畢竟金があればこそサ。彼が貧乏人で身なりも悪けりや、實に三文が所もない、男振ではあるけれども、何をいふにも分限帳で、五番目とは下らぬ家産、其の御新造になつて見れば、何一つ不足はなし。夫れはほんに諸侯の奥様より、自由が出来て、此様な僥倖な事はない。お前も定めて否とは言ふまい。直に挨拶とも思つたが、否々、併し若い身には、また種々の願ひもあるもの。親の威光で押し付けに、ならぬのは夫婦の仲。まア／＼篤り言ひ聞かしてと、思つて今日まで返事をせず、是れは此の頃急の出来事、豫て吾儕は金之介の、嫁にしたら宜からうかと、實は内々金五郎さんと、耳打をした事もあるが、爺父さん(文次郎)の事也)や祖父(白翁)の思召しが何様あらうかと、金五郎さんも顯然には言ひ出し兼ねてまづ夫れなり。胸に落ちぬと言つたは其の事。併し是れは

遠い事。差當つて本店は、何でも是非と厚い執心、夫れへ極めるが宜からうと、吾儕は思ふが何様だエ。ト、言はれてお政は今更に、否と言はれぬ養母の義理。金之介とて思ひをば、運ばすものから新枕交せし事もなき中は、如何にあらんと危みて、とかう回答はあらざりけり。

清談若綠卷之二

東都曲山人著編

第三回

當下紫雲はお政が面持、快からず見えければ、是れは定めて喜太郎が、男振の醜きを、嫌ふものにやあらんと察し、娘心の最もながら、斷りいふべき筋にもあらず。何さま勸めて承知せんと、思へば言葉を尙和け、紫「お政、お前は否だと思ふのか。夫りやア若い時は吾儕にしても、好男子を持ちたいと思ふは、當然の人情で、誰あつて悪いのを、擇り好む者はないが、其處に諱のある事サ。好いと思つてお互に、惚れたはれたも當座の中、ツイ一年経ち二年経ち、子供でも出来てみな。モウ其の時は好いも悪いも常になつて、嬉しいとも辛いとも、思はぬもの。左様なつては内證の、善いと悪いで苦も樂もある。假令男が、業平か源氏の君のやうぢやとて、内證に苦勞があつた日にやア、一向嬉しいことはない。好男子を眺めても、空つた腹は滿れぬ道理。昔からよく言ふ事。お前と夫婦にな

るならば、手鍋提けても厭はぬとは、たゞ人情の至極をいふのサ。夫れも一旦行末まで、契つた人のことならば、手鍋はおろか諸共に、袖乞しても厭はぬが、女の道といふ事だが、お前は左様いふ人もなし、見掛の醜いを否がるは、無理ではないが夫れは僅の、年の行かない娘氣だ。生さぬ仲とは云ふものの、五歳の時から手に掛けて、思へば出入十二年、荒い風にも當てまいと、是れまで育てたお前だものチ。末悪かれといふものか。能くつくりと考へて、左様しようと思ふなら、すぐに挨拶をしてやるから。ノウ澤や、左様ではないか。」ト言ひ掛けられて思ひよらねど、お澤も俱に執り成して、選「ホンニ、御繚緻が美しいものだから、其方此方から種々に、仰しやツて御座いませうが、御本店はまた格別、仰しやる通り元からの、御大家といふ中に、また近頃はお地面も、餘程殖えたと申す噂。何でも七八十箇所も御座いますかネ。」紫「何様して、其様なことではないヨ。まだ隠居さんが存生の中、百箇所の祝ひがあつたが、夫れから段々殖えたといふヨ。」選「オヤ／＼それは承つたより、大層で御座いますねエ。其處へ入らッしやれば御苦勞なし。其様な能いお口は御座いません。入らッしやるとお極めなさいまし。お嬢さん、夫れともに貴嬢はお否で御座いますか。」ト、切に問はれて否だとは、我儘らしく言はれもせず。さりと思ふ人あれば、夫れを見捨てて餘所外へ、嫁入るは何とも心に濟まず。とかう回答をなし兼ねて、唯一言も物言はねば、恥かしきにや又外に、心ありての事な

るか、夫れさへ量り難ければ、まづ夫れなりに其の日は過しぬ。斯くてお政は千萬の、黄金の中に身を置いて、假令榮耀に暮すとも、思はぬ人に思はれて、何を浮世の樂しみに、朝な夕なを送るべき、とは思へども義理のある、母の命のいと重く、背かば忽ち不孝の罪、九ツの世は換ふるとも、償ふ時はあるべからず。いかゞはせんと胸一ツ、とつおいつに心も決せず、夫れよりはいとゞしく、氣も結ほれて物事の、手には付かねど其の容子を、見するもやはり不孝ごと、氣を取直して常々に、變らぬ様にはもてなせども、思ひの中にある時は、其の色外に表はるゝ、喩へに洩れて何となく、懶き様を見てとる紫雲、困つたものと思へども、強ひて勸めて若しも又、病の種ともならんには、是れも又詮なしと、思へば其の後はそれを言はず。五六日も過す程に、八十島よりの使として、若黨婢女すべて五人、乗物を昇き齎し、先頃約束申せし通り、迎ひの人を差遣はず、女兒御を逗留に、上げらるゝやう姫君さまの、御意なりと文の趣。紫雲はお政に其の由言ひて、髪も丁度今朝結つて、とんだ好都合であつた。手調度や何や彼も、取落しのないやうに、取集めて行きなさい。」ト、迎ひに来る下部等には、酒など出して是れを饗應し、急いで準備も調へば、卒とて乗物に打乗りツ、彼の供人等に誘はれ、斯波家の奥へぞ判りける。斯くてお政は上様へ、出でしは實に初めてなれど、元來伶俐しき生まれなれば、馴れし者より中々に、氣轉も利きて姫君の、一段御意に叶ひしのみか、老女八十島

を始めとし、お附の女中上下共に、皆々お政を愛で思ひ、最良になして龔畧なく、かれ是れとする程に、お政は豫て案じたる、心の裏も和ぎて、馴染重なる女同士、愛れたき事は更になく、笑ひて暮す日のみなれば、斯くては長く此の御殿に、居ることまされと思ひけり。此處に金之介が弟お雪の腹なる、金次郎は今年十三、先頃よりして若君の、お伽の列に召し出され、朝暮御殿にありとはいへど、此處と彼處は隔たりて、常にはお政も見事なし。此の若君は姫君の、御弟にてましますば、御年も漸う十一にて、表へは未だ出で給はず。然るに因つて姫君の、御殿へ度々御入りあり。女中達を對手にして、或は目隠し鬼渡し、將棊雙六何くれと、戯れ遊び給ふ時、お伽なりとも十五歳より、以上の者は入る事協はず。金次郎は十三なれば、差合なしとて若君の、お入りの時は金次郎の、お供をせざることはなし。是において圖らずも、お政は戀しき其の人の、弟に逢ふは猶其の人に、逢ひたる心地せられつゝ、餘所ながら言傳して、獨り心を慰めけるが、ある日金次郎は何やらん、頂きてお次へ下り、是れを食べて居るを見掛け、政「オヤ、金次郎さん、お羨ましい。美しいものをお頂きだネ。お茶を持って来て上げようか。」ト、驅け行きて茶を汲み來り、政「まだ若さまはお將棊だから、寛りとお上りヨ。そして此の頃兄さんは、向島へ入らしつたかエ。私も久しく御殿に居るから、一向お目に懸らないのサ。是れは餘り不躰だが、私も頂いた結構なお菓子、何卒兄さんへ上げたいが、密とお前様お袂

へ入れて、晩にお下りの時兄さんにお届けなすつて下さらないか。多分あらばお銀さんにも、上げたけれど、左様はないから誰にも無言で、兄さんに密と上げて下さいヨ。」次「例でも私は兄さんの、お子舎へ寝ますから、其の時に上げませう。」政「何卒左様して下さいまし。お前様にはまた今度、何ぞよいものを上げませうネ。」ト、戀には碎く處女の心、看官宜しく斟み分けて、其の切なるを察しねかし。落花に心ありけれど、流水さらに心なし。お政は人に知られじと、聲を低うし密語きて、恃むとすれど金次郎は、また情合知らぬなる髪、他に物など恃まるゝは、何となう心嬉しく、常より大きな聲を出して、次「なに、誰にも言ひはしません。臥せる時に之を出して、向島のお政さんが、密と上げろとお言ひだと、申したら宜からうネ。」ト、言ふにお政は手をもて防ぎ、政「ア、夫れで宜いから、其様な大きな聲で言ひなさんな。人様に聞えるから。」次「お頂きのお菓子を上けるのが、聞えても宜いぢやアないか。」政「夫れは随分宜いけれど、ア、モウ宜いヨ。食べてお仕舞ひなら早く奥へお出でなさい。」次「ドレ、奥へ参りませう。」ト、起ち行く後へお侍女、お政と同じ年齢なる、いづれも元氣な處女達、騒然來つて、口々に「お政さん、お羨ましく御座います。唯一日お前様の身になつたら、何様に嬉しからう。」政「オヤ、何を仰しやるのだネ、皆さんお氣でも違ひはしないか。」●「左様サ、餘り逆せて居るから、大方氣でも違ひませうヨ。」政「何だか一向解りません。何様遊ばしたので

御座います。」×「ナニネ、斯様で御座います。お小姓の金之介さんは、好男子だと奥中の大評判。夫れだから彼の方の、紋所を附けた簪を、態々打たせる人もあり、著物に染めて著る者もある位サ。夫れをお前が其の弟御の、金次郎様に何か恃んで、密と上げるとお言ひだから、皆さんが何様にか、羨ましがつて似りたいの、何の彼のお言ひだヨ。」政「オヤマア、左様で御座いますか。御存じあるかは知りませんが、彼は私の親類で、幼稚い時から兄弟も、同様にして居りましたから、別に好男子だとも、何とも思ひは致しませんのサ。ホ、、、、、彼の人が其様な好男子で御座いますかネ。見馴れて居ては氣が付きません。」▲「其様にしらをお切りでないヨ。従弟同士は鴨とやら、鶯とやらと言ひますから、大方卵もお仕こみだらう。隠さずに話してお聞かせナ。」○「モシ夫れをお言ひでないト、皆して探ぐるヨ。」×「是れサ、何だ騒々しいヨ。マア、お静かにしてお話しナ。お前方の様に言ふと、岡嫉妬とかいふやうで、見ツともないぢやアあるまいか。」○「焼いた處が及ばぬ戀サ。併しお政さん、羨ましいネ。」▲「彼様な人を三日でも、良人にしたら夫れ限りに、死んでも思ひは残りませんヨ。」×「ア、モウ皆、口蓋しい。各々の働きて、良人にでも情合にでも、して見るが宜いぢやアないか。併し皆さん其の様なことを、餘り大きな聲でお言ひなさんナ。御存じの通り淫奔なことは、此のお館の厳しい制禁、既にお前四五年程後、女中の中に不義があつて、男は切腹女の方は、お下へ下